鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (27)

皇徳寺ニュータウン (仮称) 造成工事に伴う
埋蔵文化財調査報告書

苦辛城跡

1983. 3

鹿児島県教育委員会

序　　文

皇徳寺ニュータウン造成工事に伴う苦辛城跡の発掘調査を，昭和56年・57年の２年間にわたって実施した結果，中世山城に関する遺構や遺物など貴重な発見がありました。

その後，出土品等の整理・検討を行なってきましたが，今回，ここに『苦辛城跡』と題して，その報告書を発刊することになりました。

県教育委員会では，この報告書が文化財の保護と学術研究のために広く活用されることを願っております。

発刊に当たり，調査・報告書作成に御協力くださいました関係者各位に対し，心から感謝の意を表します。

昭和５８年３月

鹿児島県教育委員会
教育長　井之口　恒　雄

例　　言

1．この報告書は皇徳寺ニュータウン（仮称）造成工事に伴う苦辛城跡の調査報告書である。

2．発掘調査は，南国地所株式会社からの受託事業として，鹿児島県教育委員会が実施した。

3．本書で用いたレベル数値はすべて海抜絶対高である。

4．発掘調査にあたり，河口貞徳氏（考古学会長），五味克夫氏（鹿児島大学教授），三本靖氏（鹿児島短期大学教授），宮本長二郎氏（奈良国立文化財研究所）の指導，助言を得た。なお青磁については，小田富士雄氏（北九州市立歴史博物館主幹）の指導を得た。

5．放射性炭素の年代測定は京都産業大学に依頼した。

6．挿図・図版の写真撮影・実測・トレース・レイアウトは弥栄，山口が行った。執筆は次のとおりで編集は弥栄が行った。

第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ章……弥栄久志

第Ⅳ章第４節……山口俊博

谷山郡山田と苦辛城一（史料にみる苦辛城）…三木　靖

目　　次

第Ⅰ章　調査の経過

第1節　調査に至るまでの経過…… 8

第2節　調査の組織および経過…… 8

日誌抄…… 9

第Ⅱ章　遺跡の環境と周辺遺跡

第1節　遺跡の位置と環境…… 13

第2節　周辺遺跡…… 13

第Ⅲ章　遺跡の地形と地質

第1節　地形の概要…… 16

第2節　層　序…… 16

第Ⅳ章　遺跡の概要

第1節　苦辛城跡の概要…… 17

1　郭の配置　（城の概要）…… 17

2　郭の出入口…… 20

3　通路…… 20

4　堀…… 26

第2節　各郭の遺構…… 31

1　建物跡…… 31

2　第1・3・5郭の土拡と竈・帯曲輪の水溜遺構（水の手）…… 70

第3節　古代の炉跡…… 70

第4節　出土遺物…… 73

1　旧石器時代…… 73

2　縄文時代…… 73

3　古代…… 73

4　中世…… 73

5　近世…… 75

6　その他の製品…… 84

7　古銭…… 84

第Ⅴ章　まとめにかえて…… 110

写真図版…… 101

史料編　谷山郡山田と苦辛城…… 131

苦辛城跡出土滓の調査…… 149

挿　図　目　次

第１図　苦辛城跡の位置と周辺遺跡……15
第２図　苦辛城跡の標準地層図……16
第３図　苦辛城調査前の地形図……付図
第４図　苦辛城跡の調査全図……付図
第５図　第１郭の西側中央出入口図……21
第６図　第１郭北西角の出入口図……22
第７図　第３郭・第４郭の出入口図……23
第８図　第５郭・第６郭の出入口図……24
第９図　第８郭堀１の通路状況図……25
第10図　各堀の断面図(1)……26
第11図　各堀の断面図(2)……27
第12図　各郭の断面図……28
第13図　第１郭の遺構検出状況図……29
第14図　第１郭北区の建物跡検出状況図……30
第15図　建物１……36
第16図　建物２・８……37
第17図　建物３……38
第18図　建物４……39
第19図　建物５……40
第20図　建物６……41
第21図　建物７……42
第22図　建物９……43
第23図　建物10……44
第24図　第１郭南区建物跡検出状況図……46
第25図　建物11・15……51
第26図　建物12……52
第27図　建物13……53
第28図　建物14……54
第29図　建物16……55
第30図　建物17・18……56
第31図　第３郭の遺構検出状況図……57
第32図　第３郭の建物跡検出状況図……58
第33図　建物19……63

第34図　建物20……64
第35図　建物21……65
第36図　建物22……66
第37図　建物23・24・27……67
第38図　建物25……68
第39図　建物26……69
第40図　土拡図……71
第41図　竈図……71
第42図　水溜遺構（水ノ手）検出状況図……72
第43図　古代の炉跡検出状況図……72
第44図　旧石器時代の遺物……73
第45図　縄文時代の遺物1……74
第46図　縄文時代の遺物2……75
第47図　古代の遺物1……85
第48図　古代の遺物2……86
第49図　古代の遺物3……87
第50図　古代の遺物4……88
第51図　中世の遺物1……89
第52図　中世の遺物2……90
第53図　中世の遺物3……91
第54図　中世の遺物4……92
第55図　中世の遺物5……93
第56図　中世の遺物6……94
第57図　中世の遺物7……95
第58図　中世の遺物8……96
第59図　中世の遺物9……97
第60図　中世の遺物10……98
第61図　近世の遺物……99
第62図　苦辛城跡の地形図及び縄張……付図

表　目　次

第１表　苦辛城跡と周辺遺跡表……14
第２表　建物１の計測……31
第３表　建物２の計測……31
第４表　建物３の計測……32
第５表　建物４の計測……32
第６表　建物５の計測……33
第７表　建物６の計測……33
第８表　建物７の計測……34
第９表　建物８の計測……35
第10表　建物９の計測……35
第11表　建物10の計測……45
第12表　建物11の計測……45
第13表　建物12の計測……47
第14表　建物13の計測……47
第15表　建物14の計測……48
第16表　建物15の計測……48
第17表　建物16の計測……49
第18表　建物17の計測……49
第19表　建物18の計測……50
第20表　建物19の計測……50
第21表　建物20の計測……59
第22表　建物21の計測……59
第23表　建物22の計測……60
第24表　建物23の計測……60
第25表　建物24の計測……61
第26表　建物25の計測……61
第27表　建物26の計測……62
第28表　建物27の計測……62
第29表　出土遺物一覧……76
第30表　古銭一覧……84

図　版　目　次

図版１　苦辛城跡全景（真上より）・苦辛城跡全景（南より）…… 101
図版２　第１郭全景（真上より）・第１郭全景（西より）…… 102
図版３　第２郭・第３郭・第４郭全景（真上より）・第３郭全景（西より）…… 103
図版４　第５郭・第６郭・帯曲輪・水ノ手全景・第11郭・第12郭・第13郭全景…… 104
図版５　第１郭建物13全景・第１郭建物12全景…… 105
図版６　第１郭建物16全景・第１郭建物17・18全景…… 106
図版７　第１郭中央出入口遠景・第１郭中央出入口近景（南区より）…… 107
図版８　第１郭中央出入口（北区より）・第１郭中央出入口（外枡形より）…… 108
図版９　第１郭西北角出入口（上より）・第１郭西北角出入口（下より）…… 109
図版10　第３郭建物跡全景・第３郭竈…… 110
図版11　堀１遠景・堀１近景…… 111
図版12　堀１断面・第１帯曲輪断面…… 112
図版13　堀３・堀９…… 113
図版14　堀８・堀２…… 114
図版15　水溜遺構（水ノ手）・水溜遺構断面…… 115
図版16　水溜遺構（高子小僧）・旧石器時代の遺物出土状況…… 116
図版17　石器出土状況（旧石器時代）・石核出土状況（旧石器時代）…… 117
図版18　苦辛城跡調査前全景（南より）・苦辛城跡調査前全景（北より）…… 118
図版19　旧石器時代の遺物・縄文時代の遺物…… 119
図版20　古代の遺物…… 120
図版21　古代の遺物…… 121
図版22　古代の遺物・中世の遺物…… 122
図版23　中世の遺物…… 123
図版24　中世の遺物…… 124
図版25　中世の遺物…… 125
図版26　中世の遺物…… 126
図版27　近世の遺物…… 127
図版28　近世の遺物…… 128
図版29　近世の遺物…… 129

第Ⅰ章　調査の経過

第1節　調査に至るまでの経過

皇徳寺団地造成工事に関して南国地所株式会社が鹿児島県に昭和48～53年の土地利用対策要綱の協議申請があったので鹿児島県教育委員会は造成工事予定地区内を埋蔵文化財の分布調査を昭和53年に2回行った。

初回の調査では苦辛城掘の一部を確認し，2回目の調査では城跡の大半が造成地区内に含まれていることを確認した。また，内城や外城の字名のほか，郭・土塁・掘等があり，全体の伐採と航空写真の撮影・$\frac{1}{500}$の地形測量を事業者南国地所株式会社に依頼した。

予備調査は昭和56年10月26日から57年3月31日まで行ない建物跡・竈跡・竪穴状遺構・通路跡・溝状遺構のほかに青磁・白磁・染付・須恵器・土師器・陶器等の他，銅製品・古銭（咸淳元宝）等の遺物を発見した。

本調査は昭和57年4月12日から開始した。発掘作業は11月24日までに終了し，12月27日まで残務整理と測量，実測を行なった。また，整理作業は12月6日から行なった。

第2節　調査の組織

調査責任者　鹿児島県教育委員会 文化課長　猿渡候昭

調査担当者

文化財研究員　吉永正史（第1次調査）

主事　弥栄久志

主事　中島哲郎（第1次調査）

文化財調査員　山口俊博

日誌抄（第１次調査）

昭和56年10月26日（月）～31日（土）

本日より第１次調査（試掘・調査）の開始　帯曲輪の調査（トレンチ調査）

11月２日（月）～７日（土）

帯曲輪の調査

９日（月）～14日（土）

帯曲輪の調査，第１郭のトレンチ調査

16日（月）～20日（金）

第１郭のトレンチ調査，第３郭のトレンチ調査

24日（火）～28日（土）

第３郭のトレンチ調査，第４郭のグリッド設定

30日（月）～12月５日（土）

第４郭のトレンチ調査，第５・６郭のトレンチ調査

７日（月）～12日（土）

帯曲輪の調査，第１郭の西斜面部（帯曲輪）のトレンチ調査

14日（月）～19日（土）

帯曲輪の調査，第１郭の調査

21日（月）～26日（土）

第２郭のトレンチ調査，第１郭の調査，第５郭の調査，帯曲輪の調査

昭和57年１月５日（火）～９日（土）

図面整理，事業報告書作成

11日（月）～16日（土）

事業報告書作成作業，図面整理

18日（月）～23日（土）

事業報告書作成作業

25日（月）～30日（土）

文献資料収集

２月１日（月）～６日（土），６日（月）～13日（土），15日（月）～20日（土）

遺物実測

22日（月）～27日（土）

遺物実測，拓本，鉄器，古銭の処理，発掘準備

３月１日（月）～６日（土）

帯曲輪の調査，平安期の遺物出土，（成川式も含む），焼土検出

８日（月）～13日（土），15日（月）～20日（土），23日（火）～27日（土），29日（月）～31日（水），帯曲輪の調査，第１次調査終了。

第２次調査　本調査の開始

昭和57年４月12日（月）～16日（金）

帯曲輪の調査で２ケ所トレンチを入れた。　第１郭の１区の表土剥ぎ。縄文土器片や染付片出土。

19日（月）～24日（土）

第１郭の１区の表土剥ぎを終了後包含層調査にはいる。２区の表土剥ぎも終了後包含調査にはいる。３区の表土剥ぎにはいる。包含層中には青磁片・染付片・縄文土器片が出土，１区に２×３間の建物跡が検出。

26日（月）～28日（水）・30日（金）

第１郭の２区の包含層剥ぎ。３区の表土剥ぎ終了後包含層調査へ移る。４区の表土剥ぎにかかる。青磁片・黒曜石片・縄文土器片が出土。２区の遺構検出。

５月４日（火）～８日（土）

第１郭の３区包含剥ぎ，４区の包含層剥ぎ，５区の表土剥ぎ。青磁片・土師器片・染付片出土。３区に２×３間の建物跡検出。

10日（月）～14日（金）

第１郭の１区の遺構検出。２区の遺構検出。３区の遺構検出。４区の包含層調査。５区の表土剥ぎ。６区の表土剥ぎ。７区の表土剥ぎ。第２郭・第３郭・第５郭・帯曲輪の草刈。

17日（月）～22日（土）

第１郭の２・３・４・６区の柱穴検出。５区の包含層調査。７区の表土剥ぎ。遺物は染付片土師器片出土。４区に２間×５間の建物跡検出。第７郭・第８郭・帯曲輪の草刈。

24日（月）～28日（金）

第１郭の４・５・６区の柱穴検出。７区の包含層剥ぎ。第５郭・第６郭・帯曲輪の草刈。５区に2.5×５間の建物跡検出。

31日（月）～６月５日（土）

第１郭１区の樹根切り，２区の遺構検出。３区の包含層調査。５～７区の土手はずし，５・６・７区の柱穴検出。８区の表土剥ぎ。

７日（月）～11日（金）

第１郭の７区の柱穴確認調査。８区の表土剥ぎ。第14郭・第16郭の草刈。

14日（月）～18日（金）

第１郭７区・８区の柱穴検出。６区・８区の包含層調査。８区の細石器時代の調査。

21日（月）～26日（土）

第１郭７区の段落ち郭の調査。８区の包含層調査。帯曲輪の草刈。遺物は青磁片出土。

28日（月）～７月３日（土）

第１郭７区通路の調査。８区の包含層調査。５区の包含層調査。

５日（月）～９日（金）

第１郭の５区の包含層調査。７区の通路の調査。８区の通路出入口の調査。中央出入口の調査。第14郭の柵掘り。堀１の調査。帯曲輪１の調査。

12日（月）～17日（土）

第１郭の８区の段落ち，出入口の調査。中央出入口の調査。１・２区の柱穴の調査。第14郭の調査。堀１の調査。

19日（月）～23日（金）

第１郭の建物跡の調査と中央出入口の調査。第14郭の通路の調査。堀１の調査。

26日（月）～31日（土）

第１郭の建物跡の調査。中央出入口の調査。第14郭の調査。堀１の調査。

８月２日（月）～６日（金）

第１郭の建物跡の調査。（柱穴掘り）。出入口の調査。堀１の調査。第14郭の調査。第17郭の調査（トレンチ）。

９日（月）～12日（木）

第１郭の建物跡の調査。中央出入口の調査。第17郭の調査。堀３の調査。

16日（月）～21日（土）

第１郭の建物跡の調査。出入口の調査。第17郭の調査。堀２・３の調査。第３郭の草刈。

23日（月）～28日（土）

第１郭の建物跡の調査。第３郭の荒掘り。

30日（月）～９月３日（金）

第１郭の建物跡の調査。（本日より北区へ）。第３郭包含層調査および柱穴検出。荒掘り。第５郭出入口の調査。堀14表土剝ぎ。

６日（月）～11日（土）

第１郭の建物跡の調査。第３郭の荒掘りと包含層調査。柱穴検出。出入口の調査。帯曲輪の調査。（トレンチを入れる）。

13日（月）～18日（土）

第１郭の建物跡の調査。第３郭の柱穴検出，荒掘り。包含層調査。堀８・９。帯曲輪の調査

20日（月）～25日（土）

第３郭の柱穴検出。荒掘り。包含層調査。堀８・14，帯曲輪の調査。

27日（月）～10月１日（金）

第３郭の建物跡の調査。（柱穴掘り上げ作業）。包含層調査。第14郭出入口の調査。第10郭の調査。（トレンチ）。帯曲輪の調査。

４日（月）～９日（土）

第３郭の建物跡の調査。第５郭　遺構検出。掘り下げ。第６郭　出入口の調査。帯曲輪の調査。堀５・６の調査。第11郭の調査。水溜遺構の調査。

12日（火）～15日（金）

第３郭の建物跡の調査。荒掘り。柱穴検出。堀14・15・16・17・18の調査。帯曲輪の調査。水溜遺構の検出。

18日（月）～23日（土）

第13郭の建物跡の調査。堀11・13の調査。帯曲輪の調査。第１郭の平板測量(北区の建物跡)断面図作成

25日（月）～29日（金）

第１郭の平板測量，第３郭　建物跡の調査。第17郭の調査。帯曲輪の調査。第16郭の調査。

11月１日（月）～６日（土）

第１郭の平板測量。第３郭の帯曲輪の清掃。写真撮影。

15日（月）～20日（土）

第１郭の平板測量。全体の清掃。

22日（月）～26日（金）

土師器の層

29日（月）～12月３日（金）

本週より柱穴実測にはいる。また，掘り残しの柱穴の掘り下げを行う。北地区の柱穴掘り。第１郭・第２郭の建物跡の測量。柱穴実測。

６日（月）～10日（金）

第１郭の北地区柱穴実測。柱穴掘り下げ。第３郭の建物跡の実測。本週より収蔵庫にて，整理作業はじまる。

13日（月）～17日（金）

第１郭の柱穴掘りと実測。第３郭の柱穴掘りと建物跡の測量。

20日（月）～25日（土）

第１郭の柱穴実測。第３郭柱穴掘りと測量。水溜遺構。焼土。第５・６郭の測量。帯曲輪の地形実測。

27日（月）～28日（火）

第１・３郭柱穴実測。（平面，断面）。

昭和58年１月５日（水）～８日（土）

５日は収蔵庫で整理作業を行ない６・７日は柱穴の平面図・断面図の実測を行なう。７日で発掘作業は終了。８日から収蔵庫にて整理作業を行なう。

第Ⅱ章　遺跡の位置と周辺遺跡

第1節　遺跡の位置と環境

苦辛城跡は鹿児島市山田町内城を中心としたところに所在する。ここは谷山市街地の北4.5kmの位置にある。谷山は鹿児島市の南部にあたり，永田川が中心に平野を形成したところである。永田川は日置郡松元町の春山を源に薩摩半島の山地より南行し，南九州独特のシラス台地を侵食し，各支流等で舌状台地や弧立丘を形成している。苦辛城跡もその一つで東側から北側にかけ永田川，南側から西側にかけて永田川の支流山之田川にはさまれたシラス台地の独立丘であり，最項上部は標高133mである。

最項部は約4,500㎡の平坦部があり，それを中心に東・西・南・北に平坦地や尾根を形成しながら低くなっている。各平坦地や，尾根には郭（曲輪）や空掘等をつくり諸々の地形に合った防備策を画している。

城は東の永田川側に出入口すなわち大城戸，台地の麓に仮屋があり，台地を詰の城にした中世の山城である。山城の範囲は約470,000㎡の広さがあり，その中で人工面が約1割の47,000㎡である。

この山城の地域は詰の城の後，畑地に利用されているが残存度合いが良く，土塁や柱穴等がはっきり検出された。現在は雑木林や荒地になっている。また，畑作のための里道が通じている。城主は平田宗秀の記録が残り，16世紀前半に登場する。

第2節　周辺遺跡

この永田川を中心とした谷山地域には旧石器時代（今回発見）から縄文・弥生・古墳時代をはじめ，古代・中世・近世と各時期の遺跡がみられる。古墳時代では笹貫遺跡や薬師堂遺跡があり，中世では皇徳寺跡をはじめ寺院や，谷山本城や，椿山城がある。

谷山本城は別名千々輪城とよばれ，市街地の西の台地に立地している。舌状台地を空堀で堀り切りして独立丘にしたもので大きく三つに分けられる。麓集落は現在の市街地にあたり谷山地区の中心的な所であった。苦辛城は谷山本城の出城的な存在であったことも記録に残っている。苦辛城の南方にみられる。

その他に現在団地化された，椿山城が市街地の北部にあり，苦辛城の東南部で永田川をはさんで対の台地である。この山城も舌状台地を空堀で堀り切り，独立台地の地形をなしている。現在堀切りは通路になっており，車が往来している。

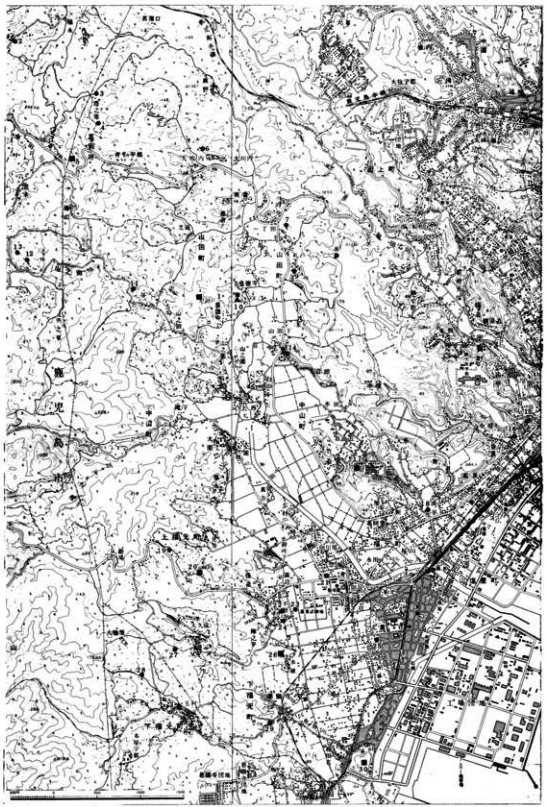
苦辛城の仮屋と接して皇徳寺跡がある。皇徳寺は中世から近世の寺院である。明治の廃仏棄釈で寺院は現存しない。山城の南西の麓部にあり，参道入口には仁王像が2体あり，供養塔や上人墓地がある。文書関係では皇徳寺文書が残っており，貴重な寺院である。

皇徳寺の上の段に仮屋跡があり，現在は庭園の一部の池が残っているが半分は埋められている。

以上中世関係を中心に述べたが他は次の第1表にまとめた。

第1表　苦辛城跡と周辺遺跡表

番号	遺跡名	所在地	時代	地形	備考
1	苦辛城	山田町内城	室町時代	台地	銅石器・縄文・平安時代も出土
2	炭床	五ヶ別府町炭床		台地	磨製石斧
3	塔ノ原	五ヶ別府町塔ノ原	弥生時代後期	台地	磨製石斧，弥生式土器片
4	塔ノ原	五ヶ別府町塔ノ原	縄文時代早期	台地	押型文土器片
5	川口城	五ヶ別府町川口	室町時代	台地	
6	大河内	山田大河内	弥生時代後期	扇状地	弥生式土器片，磨製石斧
7	坂下	山田坂下		台地	弥生式土器底部
8	上ノ原	山田上ノ原農場		台地	弥生式土器片，磨製石斧
	上ノ原	山田上ノ原農場	縄文時代早期	台地	押型文土器片
9	札下	山田札下(製材所ウラ)		台地前端	磨製石斧
10	皇徳寺跡	山田皇徳寺	南北朝？	台地前端	石幢，無縫塔
11	谷	山田谷		台地	磨製石斧
12	三重野	五ヶ別府町三重野	弥生時代後期	台地	成川式・甕形土器底部，磨製石斧
13	三重野	五ヶ別府町三重野	弥生時代後期	台地(段丘)	指宿式土器・打製石器
14	辺田	中山町辺田中山小囊		台地	石皿，磨製石斧
15	笹貫	宇宿町笹貫	弥生時代後期	山麓	弥生式土器
16	笹貫	上福元笹貫湯貫迫	弥生時代後期	台地	壺形土器，鉢形土器，高杯，石鏃
17	椿山城	鹿児島市上福元町	室町時代	台地	現在，団地化されている
18	波之平	福元高見波之平	弥生時代後期	台地前端	弥生式土器片，磨製石斧
19	御所ヶ原	上福元見寄御所ヶ原	弥生時代後期	台地	弥生式土器片
20	菊地城跡	上福元町見寄	室町時代	台地	
21	堂園	上福元町堂園	弥生時代後期	沖積地	壺形土器
22	不動寺跡	下福元不動寺		台地前端	五輪塔群（弥生式土器）
23	堂園	上福元町堂園	弥生時代後期	沖積地	壺形土器
24	水樽	下福元水樽	弥生時代後期	台地	弥生式土器，磨製石斧
25	北麓	北麓平田病院屋敷内	弥生時代後期	台地	壺形土器，甕形土器，高坏
26	本城跡	下福元町本城		台地	将軍廟ありという石像一体あり(将軍像か)
27	大窪	下福元町大窪	弥生時代後期	台地	志形土器底部（丸底）
28	大脇原	下福元玉利大脇原	弥生時代後期	台地	弥生式土器，磨製石斧，鉄滓
29	慈眼寺	下福元慈眼寺	弥生時代後期	台地	磨製石斧
30	神前城	上福元町和田	室町時代	台地	破壊



第1図 苦辛城跡の位置と周辺遺跡

第Ⅲ章　遺跡の地形と地質

第1節　地形の概要

南九州は火山地帯の地形を特徴とする一地区である。加久藤カルデラと霧島連山，姶良カルデラと桜島，池田カルデラ・開聞岳，鬼界カルデラと硫黄島等は南九州の火山の周知のことである。

苦辛城跡は古成層の安山岩が基盤である。山ノ田川はその岩盤を底に渓流を形成し，西側から南側に向って永田川に合流している。安山岩とそれに伴う腐植土の上に姶良カルデラ形成時に噴出した火砕流（入戸火砕流）が数10mの堆積がみられる。この地域では降下軽石はみられずにすぐ火砕流となっている。上部には桃色シラスとよばれるものや燈色シラスといわれるものがみられる。シラス台地は標高250～100mの台地で非常に水に弱く，雨や流水等ですぐに崩壊する性格がある。そのため南九州はシラス台地の各地に舌状台地や孤立した台地が多くみられる。苦辛城もこうした地形を利用した山城の形態である。

第2節　層位

層位は標準として右の図のような層位が得られた。

第Ⅰ層は表層で表層ならびに開墾土・二次堆積層であり，台地頂上面では耕作土であるが谷部では約2mみられる。耕作土は15～20cmである。

第Ⅱ層は黒褐色土層でアカホや火山灰を基盤とした腐植土層である。厚さは深い所で20cmである。

第Ⅲ層はアカホや火山灰層で燈褐色を呈している。下部にピソライトも若干みられる。厚さは深い所で20～30cm位である。

第Ⅳ層は桜島噴出物を基盤とした腐植土層で黒褐色を呈している。下部には黄色の軽石が多く混っている。

第Ⅴ層は薩摩火山灰といわれ，桜島の初期の噴出物である。この火山灰は上面より13番目の噴出物であり，下位から軽石・火砕流・火山灰とみられる。ここではベースサージ的な要素のある層がある。

第Ⅵ層は暗茶褐色腐植土層である。今までは細石器や小形のナイフ形石器が出土している。本遺跡でも細石器時代の黒曜石剥片や細石刃が出土した。

第Ⅶ層は黄褐色の火山灰層で指宿・種子島等でみられる火山灰で起源は不詳である。

第Ⅷ層は暗茶褐色腐植土層で入戸火砕流を基盤とした腐植土層である。

第Ⅸ層は入戸火砕流になっている。

第2図　苦辛城跡の標準地層図

第Ⅳ章　遺跡の概要

第1節　苦辛城跡の概要

1，郭（曲輪）の配置……城の縄張　（第62図）

苦辛城跡の郭（曲輪）の基準の設定は基本的に土塁をもつものを「郭」とし，もたないものを曲輪とした。

郭は最頂上部から四方の尾根上に構えられ15の郭が確認された。曲輪は郭に伴う腰曲輪・帯曲輪・小さな曲輪を連ねる段々状の曲輪に分けられる。曲輪はいずれも郭に対しての通路とか敵の進入を一次的に止める防備上の補助的な位置に設置されている。

土塁の設置は苦辛城跡の南面（第1・2・3・4・15郭），東面（第1・13郭），北面（第10・11・12郭），西面（第5・6・7）と四方に向けて山城の外周を廻る形である。高さは0.3m～3mのものまであり，幅は4m～10mである。

堀は空堀で堀り切り，通路があり，大きさは1m位から10m位の幅のものである。

1）第1郭

この郭はこの山城の中心的な郭である。位置としては中央部にあり，4500㎡の平坦地で標高133mの高い台地である。地形は南北に長い長方形をしている。この郭は中央部よりやや南に幅約4m，高さ約0.6m，長さ約22mの土塁で2分されている。調査上この中央土塁を境として南区・北区に分けた。

南区は入口と東南部を除いて土塁が廻っている。北・東側は中央土塁を含めて約47mの長さがあり，南・西側が約94mある。いずれも矩尺状で幅3～6m，高さ0.5～0.8mの土塁である。遺構としては堀立柱の柱穴が160個検出され，8棟確認された。

北区は出入口と北側に土塁がなく，西側の土塁は長さ約28m，高さ0.3～0.6cm，幅約4mで，東側は中央土塁も含め，矩尺状に長さ約54m，高さ0.2～0.8mのものである。遺構は柱穴が210個検出され，10棟が確認された。建物跡は中心部にあり，北東部は約50cm位の微高地になっている。

第1郭の出入口は西側中央部と北西角部の2ケ所みられた。中央部のものは「T」の字形で南・北両区へ行けるように箱堀状になっている。北西部のものはクランク状になっている。また後者は堀1で断ち切られた状態である。

第1郭の土塁は切り残しの部分に若干盛られた状態であり，基本的には切り土塁と考えられる。

2）第2郭

第2郭は第1郭の南尾根の1番目に位置している。形は南北に長い三角形をなし，約40㎡の郭である。東側と北側に幅約6m，高さ約0.6m，長さ約54mの土塁を設けている。北と南には堀り切りがあり，第1郭と第3郭と区別されている。建物跡等は検出されなかった。土塁は自然地形の切り残し状になっている。

3）第3郭

この郭は第1郭の南尾根の2番目に位置している。形は台形で南北に長く，約2500㎡の面積をもつ郭である。土塁は北東側から南側に矩尺状と，北西側に直線状に設けてある。幅は4～10m，高さは0.5m～1.5m，長さは約90mおよび20mである。この土塁も地形の切り残し状になっている。

郭の中は2段になっており，北東側$\frac{1}{3}$は一段高く，建物跡等は検出されなかった。南西側$\frac{2}{3}$には堀立柱の柱穴が210個検出され，20棟の建物跡が確認された。

出入口は北西側にあり矩尺状で堀の形をとっている。その向きは北側に折れている。

4）第4郭

第4郭は南尾根上の3番目の郭で台形をなしている。約1000㎡の郭で南方面では最南端の郭である。

土塁は東北面に設けられ，幅10m～4m，高さ3.3m～0.5m，長さ約45mのものでやはり地形の切り残し状の土塁である。建物跡は検出されなかったが矩尺状の出入口が南西側に設けられその向きは南東方向である。

5）第5郭

第5郭は第1郭より西方へ延びた尾根上にあり，1番目の郭である。約1050㎡の面積をもち西と南側に整形した土塁と北側に旧地形の残存部で高さ4mの高台を設けてある。土塁は幅2m～7m，高さ1.1m～1.2m，長さ約55mの切り残し状の土塁である。高台と土塁を合わせると北面，西面，南面へ向けて防備提を設けている形である。

またこの郭には西側の一段低いところに40㎡の小さな腰曲輪を設置している。その西側には尾根上に5本の堀切りがみられ，それに伴う小さな曲輪が3ケ所ある。

この郭には建物跡は検出できなかったが2m方形の土拡がみられ，出入口は東側に矩尺状に検出された。

6）第6郭

第6郭は第1郭より西方へ延びた尾根上にあり，2番目の郭である。この郭は第5郭の南側の郭で一段低いところにある。面積は約510mで方形の形をしている。西側に幅約7m，高さ1.4～1.7m，長さ約25mの土塁がある。建物跡はなく，矩尺形の出入口が東側中央部に検出された。

この郭の南側には約75mの三角形をした腰曲輪がみられる

7）第7郭

この郭は第1郭より西方へ延びた尾根上の最端部の郭にあたる。約200mの面積をもち，北側に土塁をもつ。土塁は約幅4m，高さ0.7～1mで長さは約40mにおよぶ，この土塁は堀りにそって造られたものとの結合した形である。

8）第8郭

この郭は最初は通路帯になっており，後になって埋められ最終時で郭になっている。はっきりした土塁はないが第9郭の間の地形が土塁の役割りをはたすと考えられる。この郭の位置は第1郭の北側の尾根上の一番目である。

9）第9郭

この郭は第1郭から北へ延びる2番目の郭である。この郭も前郭同様な郭であるが通路は検出されなかった。約100㎡の郭で堀1と堀3とに切られている。

10）第10郭

この郭は第1郭から北へ延びる3番目の郭である。この尾根は第10郭までは真地に延びているが第10郭からは東へ延びている。面積は約1000㎡で三角形をなし，西側に幅4m，高さ1m長さ20mの土塁を設けている。建物跡等はなかった。

11）第11郭

この郭は第1郭から北へ延びた4番目の郭である。三角形をなし，面積が約800㎡で北側に土塁を配した郭である。土塁は幅約5m，高さ約2m，長さ約35mのものである。建物跡等は検出しなかった。また，腰曲輪が東西2ケ所にみられた。

12）第12郭

この郭は第1郭から北へ延びた5番目の郭である。方形をなし面積が約600㎡で北側に「コ」字状に土塁を設けている。土塁は幅約7m，高さ約2.5m，長さ約77mのもので，一部出入口のため切られている。建物跡は検出しなかった。

第11郭，第12郭は牧田ケ宇都の上にあるので牧田の塁に比定できる。

13）第13郭

第1郭の北東の尾根上にあるもので堀1とによって分断されている。面積は約100㎡であり，堀側に幅約4m，高さ約0.5m，長さ約10mの土塁をもつ，この郭の北側には7段の段状の曲輪がみられ，これは北東尾根上からの防備を考えている。

14）第14郭

この郭は第1郭より東へ延びる尾根上の1番目である。長さ約30m，幅約8m，深さ約2mの長方形の郭である。これは土塁を設けるという形でなく，郭を1段低くした形で土塁にあたる部分は北側にある。この郭の北側には5段の段状の曲輪があり，東側の尾根の防備をしている。

15）第15郭

この郭は第1郭より東へ延びる尾根上の2番目である。面積は約200㎡と小さく，南側に幅約4m，高さ約1m，長さ約20mの土塁を「コ」字状に配している。建物跡はなく，北側に2段の曲輪をもっている。

以上が郭の説明である。

第1郭より各尾根状に郭をもつ連郭式山城の形態を著しく表わしていることがわかる。一応各郭の中心的な標高を上げておきたい。第1郭は132.6m，第2郭は127.3m，第3郭は122.6m，第4郭は115.6m，第5郭は125.6m，第6郭は121.5m，第7郭は110.9m，第8郭は126.3m，第9郭は125m，第10郭は116.4m，第11郭は 96m，第12郭は101m，第13郭は125m，第14郭は115m，第15郭は101.9mである。

2　郭の出入口（第　図）

郭の出入口は，第１郭・第３郭・第４郭・第５郭・第６郭に確認された。

第１郭の中央部は「T」字形になっており，南北両方へ行けるようになっている。外側には50㎝の三角形をした外枡形がある。墨間は15mで堀り状になっている。東西に延びる通路は幅25mで郭面へ登るようになっている。地盤がシラス（火山灰）であるため水の侵食に弱く大小のポットホールや，竪穴が多くみられる。虎口の突きあたり郭は２段の溝状の落ち込みがもうけてあり，侵食をくい止めている。

この出入口は郭面と外枡形面が3.7mの差をつけたもので「T」の字形につくってあることは蔀としての造りが考えられる。

西北角にある出入口は幅2.5m，深さ60～80㎝のクランク状の虎口である。堀１で切断される状態で検出され，第８郭にもこの続きがみられる。第８郭は埋められて造られた郭であるためこの虎口と堀１との関係で初期の出入口と考えられる。

第３郭の出入口は北西部に検出した。この出入口は通路帯の曲輪より左折し，また虎口内で左折するもので堀状になっている。幅は２～３m前後で帯曲輪より郭までの差は４mである。帯曲輪部は固められている層が10㎝前後みられるが虎口より直ぐ下の帯曲輪部は自然崩壊がみられる。また土塁の外側は犬走状に段がみられる。この出入口も蔀としての考えがみられる。この虎口には左側には土塁が設けてあるが右側にはない。

第４郭の出入口は第３郭の形で虎口の中で右折している。郭と帯曲輪の差は3.5mであり堀状につくられている。この出入口には土塁はつくられていない。虎口の幅は２～３mで矩尺状に折られている。

第５郭の出入口は小さく，３×４m位で小さい。段状になっており通路帯からすぐ左折している。郭と通路帯との差は1.5mである。

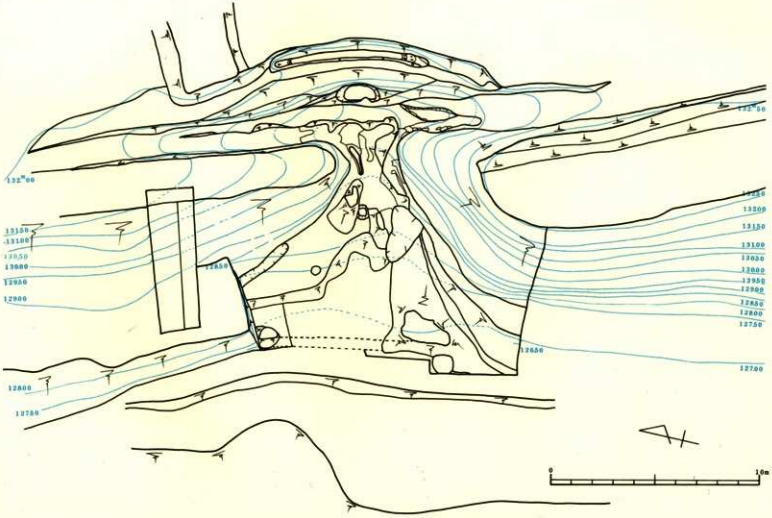
第６郭の出入口は通路帯より右折し，虎口内で左折している。幅は1.5m～３mで小さな溝状になっている。通路帯と郭の差は2.5mである。この出入口は小さいが水の作用により，虎口より直下に溝ができていることを示している。第１郭・第３郭等で虎口直下が崩壊していることがこれでうかがえられる。

以上のように郭の出入口は郭と帯曲輪ないし通路との高低差と左折や右折等の組み合せで蔀の要素を強く出して虎口を造っている。とくに第１郭・第３郭の出入口は建物跡があることから堀状に深く強固に造られているのが特徴である。

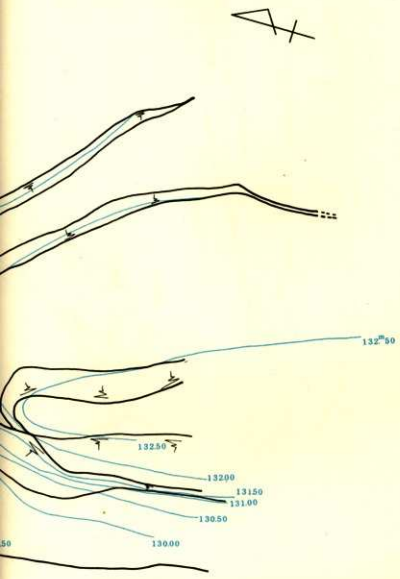
3　通路

通路は第１郭にできるだけ行けない状況につくられている。その構成としては通路帯ならびに帯曲輪で形成されている。第１郭と南側の尾根と，西側の尾根の郭ではさまれた谷部は段々状の帯曲輪になっている。通路出入口（大手口）方面は谷部より東へ行き堀19を通りぬける通路が考えられる。最近の農耕にも使用された道である。

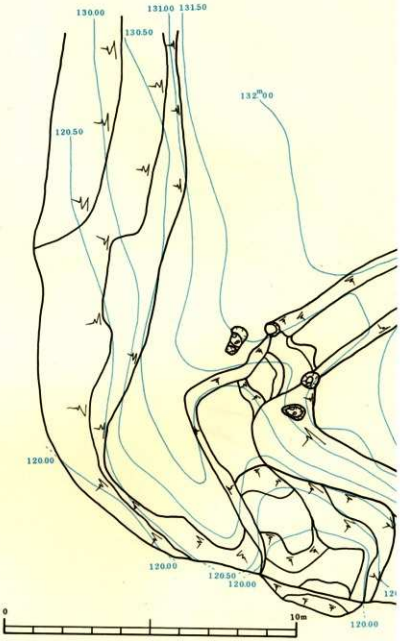
堀19を通り，堀11の下を通りすぐに右折して帯曲輪12・13に行く，またここは直進する通路と，



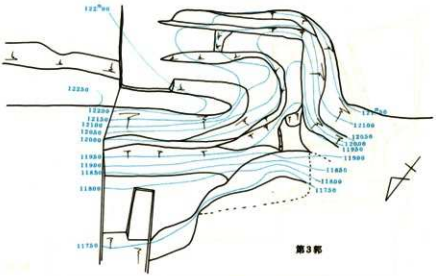
第5図 第１郭の西側中央出入口図

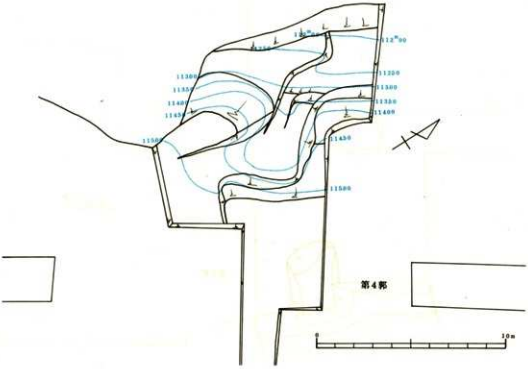


角の出入口図

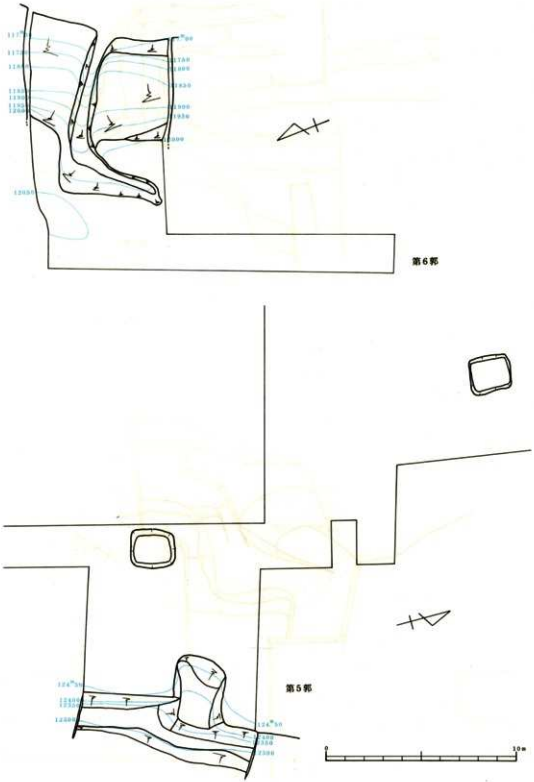

130.00
131.00
131.50
130.50
132.00
120.50
120.00
120.00
120.50
120.00
120.00
0
10m

第6図 第 1 郭 北 i





第7図 第3郭・第4郭の出入口図



第8図 第５郭・第６郭の出入口図

第9図 第8郭堀1の遺路状況図

左折して第５郭・第６郭へ行く通路の分岐点でもある。直進して帯曲輪３にはいる。この入口には人工的に踏み固められたところがあり，通路として使用された形跡がある。そしてこの帯曲輪３は右曲して第４郭へ通ずる曲輪である。帯曲輪３の上下に数段の段状曲輪があり，また，帯曲輪４・５は行き止りの曲輪であるが４は水ノ手，５は通路にある。

堀11の分岐点より，左折して第５郭・第６郭の下を通り，帯曲輪３にはいり，そこから第１郭・第２郭・第３郭へ通ずるところが第８郭である。第８郭は後から埋められてつくられた土居であるが最初の時は第９図のように第１郭・第２郭・第３郭へ通ずる分岐点になっている。手前で右折すれば第３郭へ突き当り，右折すれば第１郭の北西角の虎口，突きあたり，右折すれば第１郭の中央出入口，左折すれば堀１にはいる。また第２郭は第１郭の外枡形より直進して通ずる。

このように通路帯と段状曲輪と，帯曲輪は敵に対して迷路的につくられていることがわかり，どの郭にいても敵はすぐ目につくようにつくられている。

４　堀

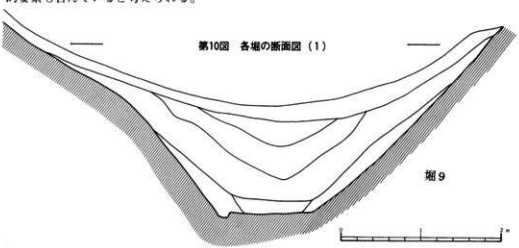
堀は20ケ所みられた。第１郭より東の尾根上に**堀４・５・６・７**があり，南の尾根状に**堀８・９・10・19・20**があり，西の尾根上に**堀11・12・13・14・15・16・17・18**があり，北の尾根上に**堀１・２・３**がある。この中では**堀１・９**が箱堀，**堀４**が土橋状の馬の背地形をもつ堀で他は薬研堀ないし，箱薬研堀であった。これは**堀１・９・４**は通路的に使用され，他は敵を止める手段の堀り切りに主目的であると考えられる。堀の規模は第10・11図に参考としてあげておいた。

堀14～18は段と堀との組み合せである。とくに**堀14・15**の間は狭く，堀も長く第５郭の下位で郭を防備している。また尾根部は墓濠的な形態をしている。

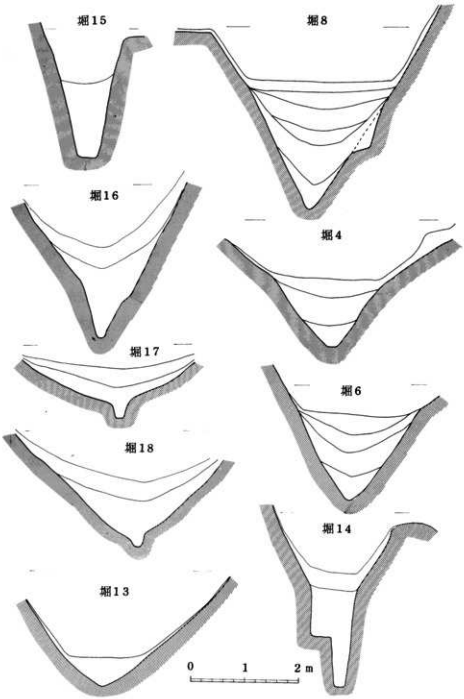
堀１と３は箱堀と薬研堀である。**堀１**は通路で**堀２**の横を下る通路帯の一部と考えられる。

堀８は５ｍもあり第１郭と第２郭の堀り切りで第１郭の重要性をうかがえられる。

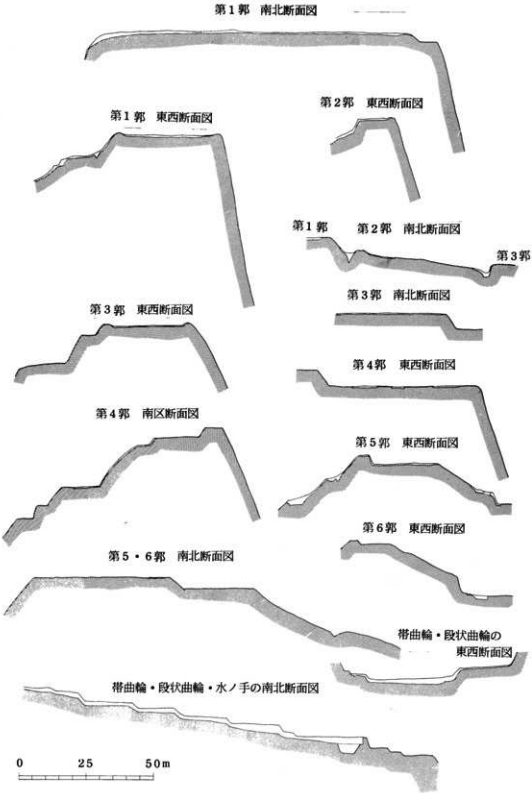
堀11は長く南西からの防備として考えられるが通路の関係で敵が谷へ通りぬけるための迷路的要素も含んでいると考えられる。



第10図　各堀の断面図（１）

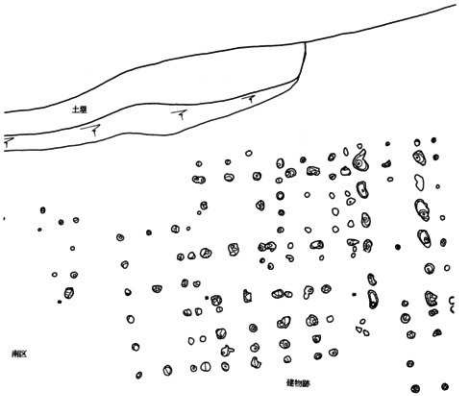


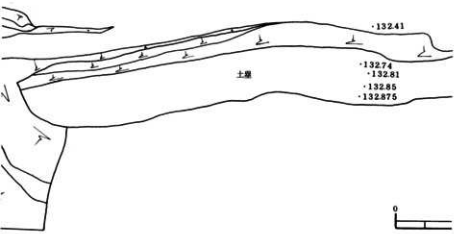
第11図 各 堀 の 断 面 図 (2)


第1郭　南北断面図
第1郭　東西断面図
第2郭　東西断面図
第1郭
第2郭　南北断面図
第3郭
第3郭　南北断面図
第3郭　東西断面図
第4郭　東西断面図
第4郭　南区断面図
第5郭　東西断面図
第6郭　東西断面図
第5・6郭　南北断面図
帯曲輪・段状曲輪の
東西断面図
帯曲輪・段状曲輪・水ノ手の南北断面図
0
25
50m

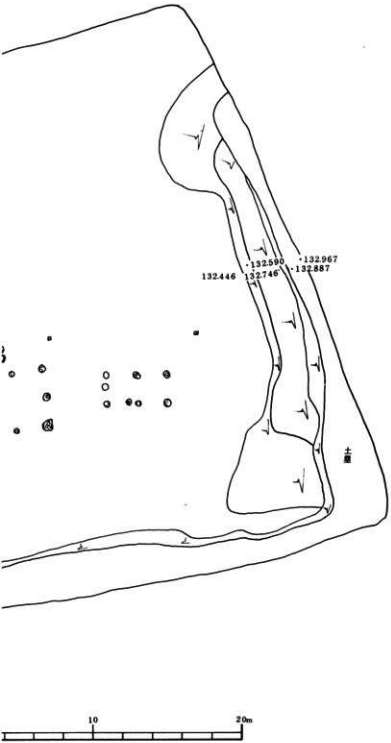
第12図　各　郭　の　断　面　図

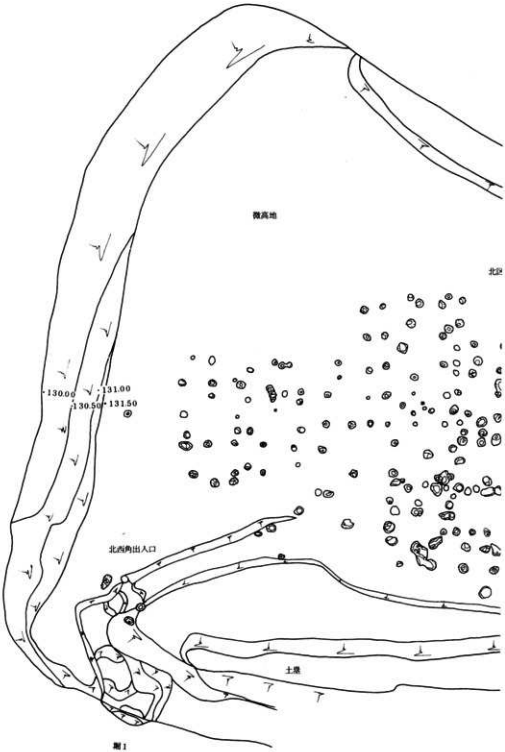
第13図　第１郭の遺構検出状況図

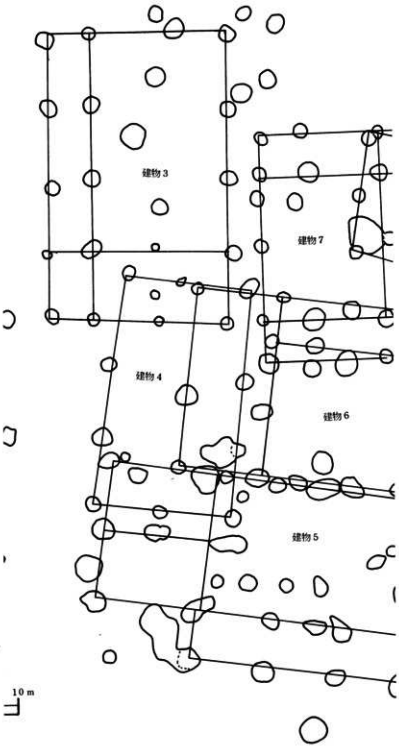


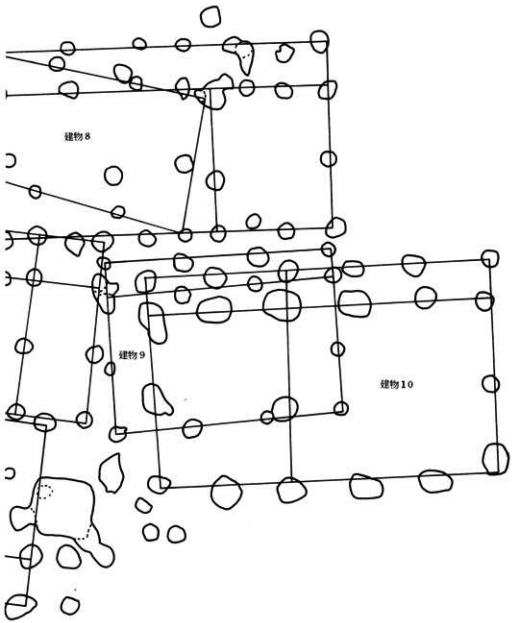


図

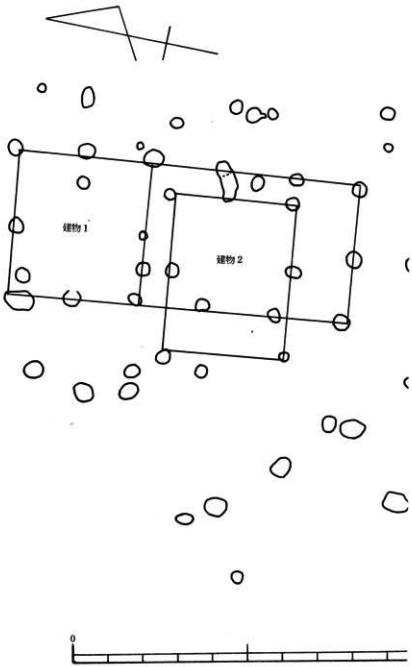

132.967
132.590
132.887
132.446
132.746
土屋
10
20m


130.00
131.00
130.50
131.50
北西角出入口
土塁


建物3
建物7
建物4
建物6
建物5
10 m



第14図　第１郭北区の建物跡検出状況図


建物1
建物2
0

第2節　各郭の遺構

1　建物跡

第1郭と第3郭に検出した。また，建物の方位は桁行の角度を北から測った。

建物1

建物1は梁間間が2間で桁行間が5間である。中に間仕切柱をもち2間と3間を間仕切っている。桁行は東側が9.85mと西側9.70mである。梁間は北側が4.19m，南側が3.96mである。西側に2個，東側に1個の下屋の柱がみられるが他に組める柱穴は検出しなかった。この建物の1間の平均は1.96mである。

第2表　建物1の計測

建　物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出郭	柱穴の長径×短径×深さ(cm)
1	北2間	東5間	4.19m		東9.85m		第1郭北	P1　80×55×71　14　32×29×44
							方　位	
	南2間	西5間	3.96m		西9.70m		W　7°	2　44×38×58　15　40×37×67
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3　47×45×62
P1－2	1.94m			P1－4	1.88m			4　42×37×71
2－3	2.25m			4－6	1.80m			5　45×42×64
13－14	1.81m			6－9	1.96m			6　36×34×65
14－15	2.15m			9－11	2.11m			7　26×25×33
				11－13	1.95m			8　57×47×86
				3－5	1.97m			9　35×32×54
				5－8	1.89m			10　62×49×85
				8－10	2.07m			11　45×38×55
				10－12	2.12m			12　44×39×77
				12－15	1.80m			13　49×40×57

建物2

建物2は建物1と重って検出された。梁間間が2間で北側が4.6m，南側が4.53mである。桁行間は3.5mと3.6mである。東側の桁行間の間に柱穴があり，2間×2間の可能性もある。

第3表　建物2の計測

建　物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出郭	柱穴の長径×短径×深さ(cm)
2	北2間	東1間	4.60m		3.60m		第1郭地区	P1　45×37×45
							方　位	
	南2間	西1間	4.53m		3.50m		W　10°	2　42×36×60
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3　38×34×52
P1－2	2.33m			P1－4	3.52m			4　34×31×50
2－3	2.27m			3－6	3.60m			5　40×36×60
4－5	2.53m							6　40×36×63
5－6	2.00m							

建物3

建物3は梁間間が3間で桁行間が4間である。西側1間には間仕切り柱（棟持柱の補強）がある。東側の梁間は上屋が4.19m，下屋が1.22mで計5.41mである。西側の梁間は上屋が5.19mで，下屋が1.18mで計6.37mである。下屋は1.22mと1.18mで若干東側が広い。桁行間は8.34m（南）と8.20m（北）が上屋で，下屋は8.20mである。この建物は東側の梁の棟持柱が南にずれて柱穴が検出された。この建物の1間の平均が203.12cmである。

東2間半　　**第4表　建物3の計測**　　南4間5.25m 1.22m

建　物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出郭	柱穴の長径×短径×深さ(cm)
1	東3間	東5間	4.19m	1.22m	8.67m	8.34m	第1郭北区	P 1　45×42×68　12 48×43×88
5.25	西3間	北4間	5.19m	1.18m	8.34m	8.20m	方　位 W 103°	2 34×30×38　13 46×42×101
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3 40×35×64　14 48×41×62
P 1－2	2.12m	3－4	1.19m	P 1－5	2.15m	P 4－8	1.84m	4 43×37×68　15 50×48×87
2－3	1.88m	17－18	1.22m	5－9	2.2 m	8－11	1.9 m	5 45×42×86　16 48×45×60
15－16	1.60m			9－12	2.04m	11－14	2.38m	6 27×27×52　17 38×31×88
16－17	2.43m			12－15	2.28m	14－18	2.17m	7 54×44×87　18 42×40×54
				3－7	2.02m			8 33×27×55
				7－10	2.24m			9 44×44×94
				10－13	2.07m			10 48×43×100
				13－17	2.01m			11 40×38×57

建物4

建物4は梁間間が2間で桁行間が3間である。西側の梁間は4.08m，東側の梁間は3.58mと50cmの差がある。桁行は北側が6.84m，南側が6.63mである。全体的に東側が狭くなっており，桁行間柱が長い。

第5表　建物4の計測

建　物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出郭	柱穴の長径×短径×深さ(cm)
4	東2間	南3間	3.58m		6.63m		第1郭北	P 1　32×28×79　10 37×32×36
	西2間	北3間	4.08m		6.84m		方　位 W 92°	2 33×28×32
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3 58×34×61
P 1－2	1.59m			P 1－4	2.7 m			4 38×38×58
2－3	1.99m			4－6	2.14m			5 48×46×68
8－9	1.9 m			6－8	2.0 m			6 54×48×62
9－10	2.18m			3－5	2.58m			7 46×38×58
				5－7	2.06m			8 38×36×72
				7－10	1.99m			9 43×38×58

建物5

建物5は梁間間が北側が2間，南側が3間，桁行間が4間で西側に下屋が南3間につく。上屋の中には間仕切り柱が5本みられ西側の桁行柱も1本増やしている。梁間が3.95m（北）と5.2m（南）でその内下屋が1.4mと1.3m，桁行間が9.2mで下屋が6.4mである。上屋の中では南側桁行3間と梁間の平均が2.06mである。それに比べ北側桁行1間は2.8mと2.9mで0.74m・0.75mと2尺少々長い。柱穴8・柱穴6は棟持柱と間仕切りに，柱穴19・20・21は間仕切り柱と考えられる。

第6表　建物5の計測

建　物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出郭	柱穴の長径×短径×深さ	
5	南3間	東3間	3.9 m	1.3m	9.2m	6.4m	第1郭北	P 1 72×54×69	12 78×65×66
							方　位		
	北2間	西3間	3.95m	1.4m	9.2m	6.4m	W 55°	2 73×57×71	13 80×54×88
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3 71×34×63	14 91×52×76
P15−16	2.0m	P14−15	1.3m	P 3 − 7	2.8m	P 4 − 8	2.3m	4 71×64×48	15 68×61×55
16−17	1.9m	4 − 5	1.4m	7 −10	2.0m	8 −11	1.9m	5 109×42×66	16 42×30×55
1 − 2	1.9m			10−13	2.3m	11−14	2.2m	6 108×41×85	17 64×48×69
2 − 3	2.0m			13−17	2.1m			7 91×78×82	18 48×38×58
				1 − 5	2.9m			8 65×56×66	19 61×41×70
				5 − 9	2.2m			9 58×50×77	20 58×40×73
				9 −12	2.2m			10 43×40×82	21 68×45×64
				12−15	2.0m			11 67×61×98	

建物6

建物6は梁間間3間，桁行間が4間の建物である。それは2間×4間の上屋と，1間×4間の下屋に分けられる。上屋は北から1間2間1間と3分割する間仕切り柱（棟持柱も兼用）がある。梁間間は5.2mと5.1mで桁行間は8.4mと8.34mである。そのうち下屋梁間が1.3mである。

第7表　建物6の計測

建　物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出郭	柱穴の長径×短径×深さ	
6	南3間	東4間	3.9m	1.3m	8.41m	8.34m	第1郭北	P 1 42×40×58	10 51×49×80
							方　位		
	北3間	西4間	3.8m	1.3m	8.4m	8.41m	W 10°	2 60×51×89	11 53×48×64
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3 39×36×77	12 52×47×61
P15−16	2.0m	P17−18	1.3m	P 6 − 9	2.0m	P 7 −10	2.0m	4 65×62×65	13 58×49×78
16−17	1.9m	6 − 7	1.3m	9 −13	1.93m	10−14	2.0m	5 64×43×72	14 61×48×71
4 − 5	1.8m			13−17	1.91m	14−16	1.84m	6 39×34×48	15 48×44×65
5 − 6	2.0m			4 − 8	2.0m			7 37×30×64	16 53×42×58
				8 −11	2.0m			8 97×55×68	17 73×63×73
				11−15	2.1m			9 73×61×70	18 70×53

建物7

建物7は第1郭北区に検出し，梁間間3間で，桁行間6間の南北に長い建物である。それは12.9mと5.4mの規模である。東側に梁間半間間の下屋がつき，上屋には北から1間・3間・1間と間仕切り柱がつく。そして南側1間は半間ずつ柱をもっている。下屋は南から2間目で梁間は北に約2尺ずれている。平均間間は2.12mである。桁行方位はW14°である。

建物8

建物8は第1郭北区に検出し，梁間間2間で桁行間3間である。梁間間の長さは3.9mと3.5mで北側が狭い。桁行間の長さは1.3mである。平均間間は2mである。桁行方位はE1°である。

建物9

建物9は第1郭北区に検出し，梁間間3間で桁行間3間である。2間×3間の上屋に半間間の下屋が東側に付くかたちである。梁間の長さは南側が4.75m，北側が4.69mである。これは上屋の長さが南北とも3.9mに対し，下屋の北側が10cm長い。桁行間は上屋・下屋とも6.56m 6.54mになっている。平均間間は1.87mである。桁行方位はW15°である。

第8表　建物7の計測

建　物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出郭	柱穴の長径×短径×深さ(cm)
7	南3間	東6間	4.16m	1.19m	13.13m	13.12m	第1郭北	P 1　35×31×73　21 45×33×78
	北3間	西6間	4.28m	1.27m	13.2m	3.67m	方　位	2　39×35×75　22 40×36×87
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間	W 14°	3　42×37×48　23 42×34×52
P 1－2	2.18m	P 3－4	1.12m	P 1－5	1.48m	P 4－7	1.27m	4　39×33×68　24 44×39×84
2－3	2.1m	31－32	1.19m	5－8	2.17m	7－11	2.03m	5　70×65×74　25 96×26×87
29－30	2.07m			8－12	1.93m	11－14	2.22m	6　70×56×67　26 50×49×78
30－31	2.09m			12－15	2.15m	14－17	2.1 m	7　51×43×58　27 52×44×96
				15－18	2.05m	17－22	1.26m	8　56×53×69　28 50×45×82
				18－23	1.01m	22－25	1.45m	9　48×37×34　29 59×48×74
				23－26	1.03m	25－28	1.54m	10　55×50×67　30 45×43×64
				26－29	1.38m	28－32	1.25m	11　73×27×72　31 57×45×97
				3－6	1.43m			12　57×52×67　32 55×52×86
				6－10	2.15m			13　58×49×70
				10－13	1.93m			14　45×42×68
				13－16	2.02m			15　50×46×77
				16－21	1.32m			16　40×36×93
				21－20	0.87m			17　36×33×65
				20－24	0.97m			18　50×48×101
				24－27	1.07m			19　52×46×80
				27－31	1.37m			20　82×75×89

第９表　建物８の計測

建　物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出郭	柱穴の長径×短径×深さ(cm)
8	南２間	東３間	4.07m		6.26m		第１郭北	P 1　36×33×40　10 45×40×73
							方　位	
	北２間	西３間	3.66m		6.35m		E 1°	2　37×32×42
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3　73×34×55
P 1－2	1.72m			P 1－4	1.89m			4　43×36×42
2－3	1.94m			4－6	2.55m			5　41×38×59
8－9	1.98m			6－8	1.91m			6　33×30×47
9－10	2.09m			3－5	1.92m			7　60×48×70
				5－7	2.06m			8　37×32×34
				7－10	2.28m			9　46×38×52

第10表　建物９の計測

建　物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出郭	柱穴の長径×短径×深さ(cm)
9	南３間	東３間	4.75m	0.94m	6.54m	6.54m	第１郭北	P 1　45×41×59　10 62×57×65
							方　位	
	北３間	西３間	4.69m	0.93m	6.56m	6.54m	W 15°	2　37×28×50　11 38×36×57
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3　56×45×68　12 36×31×50
P 1－2	1.80m	P 3－4	0.94m	P 1－5	2.17m	P 4－7	2.28m	4　45×40×60　13 45×36×50
2－3	1.95m	13－14	0.93m	5－8	2.21m	7－10	2.13m	5　64×50×45　14 44×37×67
11－12	1.72m			8－11	2.18m	10－14	2.13m	6　62×45×74
12－13	2.10m			3－6	2.23m			7　57×80×80
				6－9	2.05m			8　37×40×40
				9－13	2.26m			9　44×37×49

建物10

建物10は第１郭北区に検出した。柱穴が大きく1.2m～0.8m位のものが主である。梁間間は３間で桁行間は５間で南３間，北２間に間仕切り柱がある。梁間間の長さは6.23・6.09mで，そのうち上屋が約５m，下屋が約1.1mである。梁行間の長さは約10mである。平均間は2.08mである。建物の方位はW11°である。

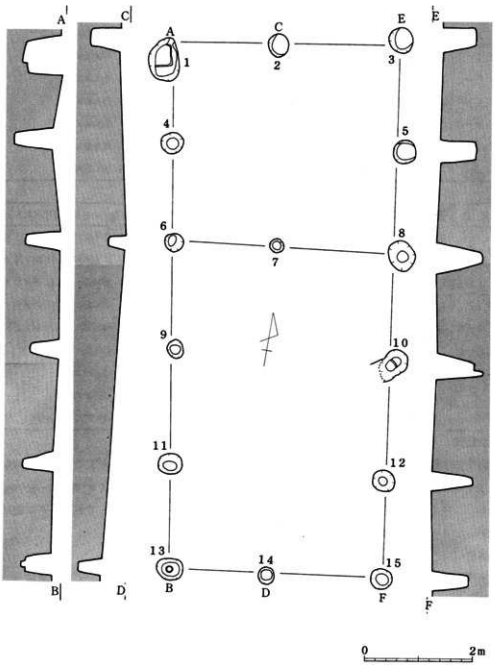
建物11

建物11は第１郭の南区に検出した。梁間間は２間で桁行間は３間である。その長さは 約４mと約5.8mである。平均間間は1.94mである。桁行の方位はW14°である。

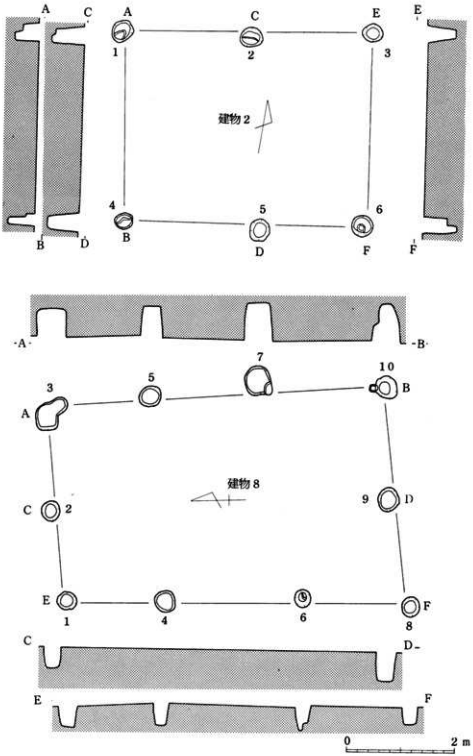
建物12

建物12は梁間間３間で桁行５間で第１郭の南区に検出した。その長さは梁間間4.6m，桁行間9.6mである。梁間間２間，桁行間５間の上屋で２間と３間の間に間仕切り柱がある。下屋は梁間間半間で桁行間は５間であり上屋の南側にある。平均間は1.9mである。桁行方位はW103°。

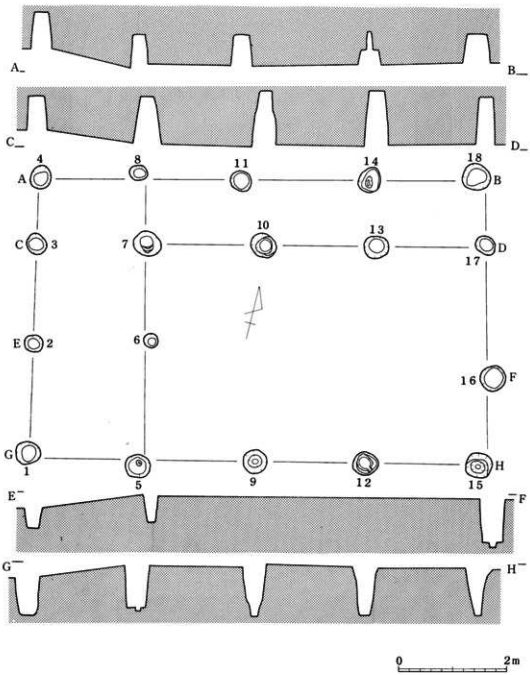
建物13



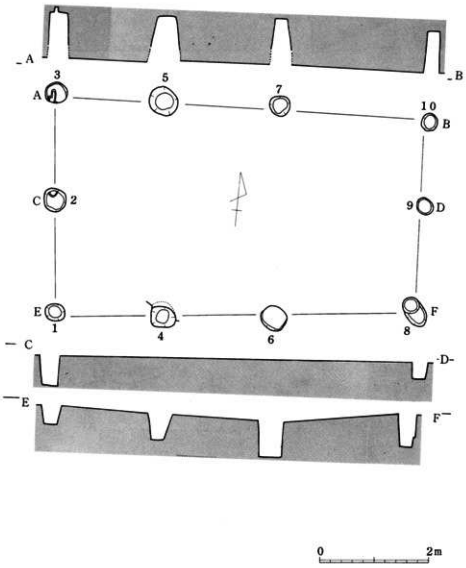
第15図　建　　物　　1


A
C
A
C
E
E
1
2
3
建物2
4
5
6
B
D
F
F
B
D
A
B
7
10
3
5
B
A
建物8
C
2
9
D
E
1
4
6
F
8
C
D
E
F
0
2 m

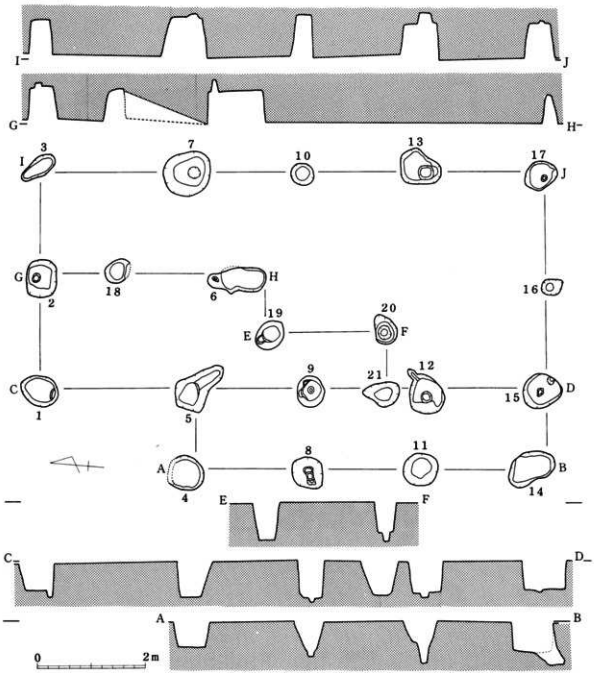
第16図　建　物　2　・　8



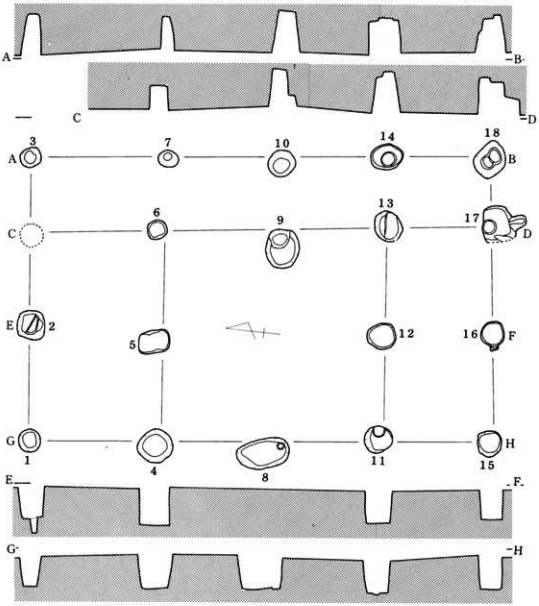
第17図 建　　物　　3



第18図　建　　物　　4

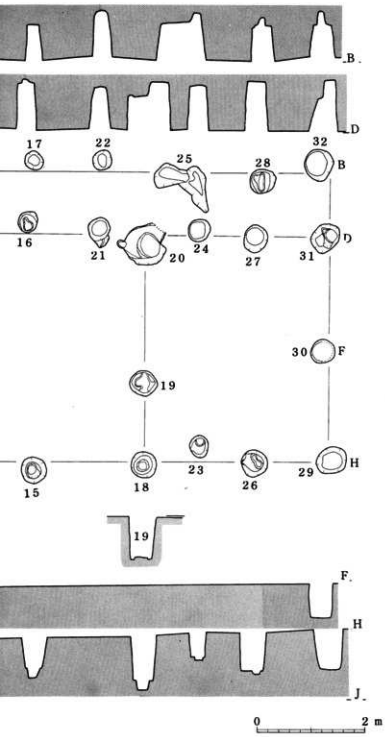

I
J
G
H
3
7
10
13
17
I
J
G
2
18
6
H
16
19
20
E
F
C
1
5
9
21
12
15
D
A
4
8
11
14
B
E
F
C
D
A
B
0
2m

第19図　建　　物　　5

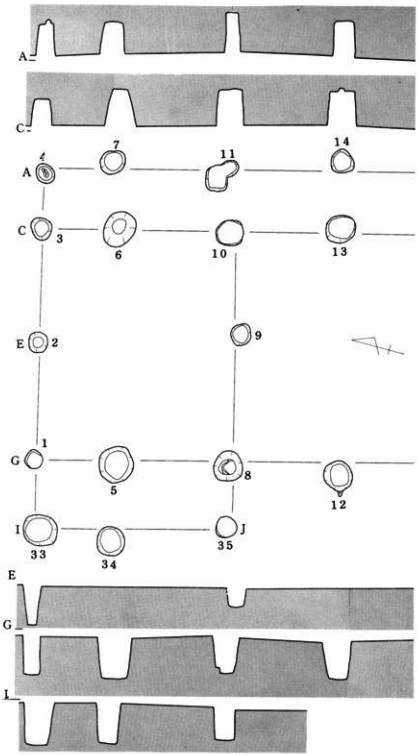


第20図　建　　物　　6

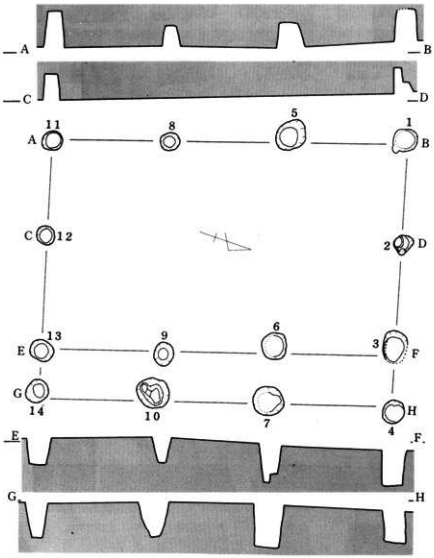
0　　2m


B
D
17
22
25
28
32
B
16
21
20
24
27
31
D
30
F
19
15
18
23
26
29
H
19
F
H
J
0
2 m

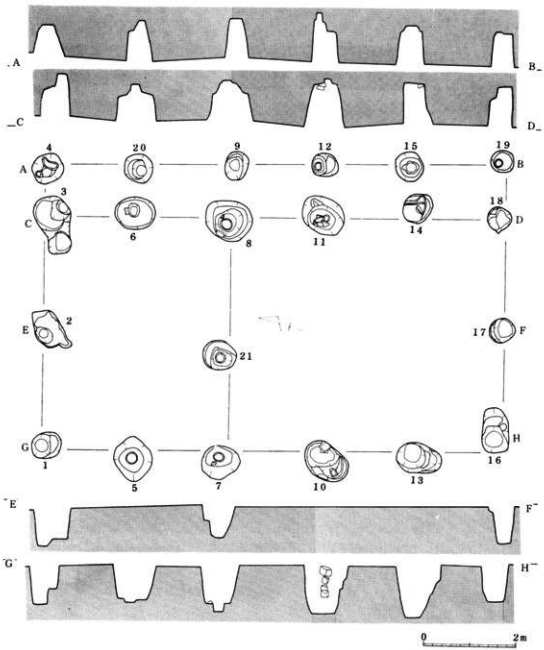
物　7



第21図　建



第22図　建　　物　　9



第23図　建　　物　　10

建物13は梁間間３間，桁行間５間で第１郭南区に検出した。その長さは梁間間は北側6.32m南側6.01mで桁行間は東側10.45mと西側10.27mである。上屋は２間×５間で北側が２間，南側が３間で間仕切り柱がある。下屋は南側上屋の西側に梁間半間と桁行間３間，北側の上屋の東側に半間間×１間間がある。平均間は2.15mである。桁行の方位はW19°である。

建物14

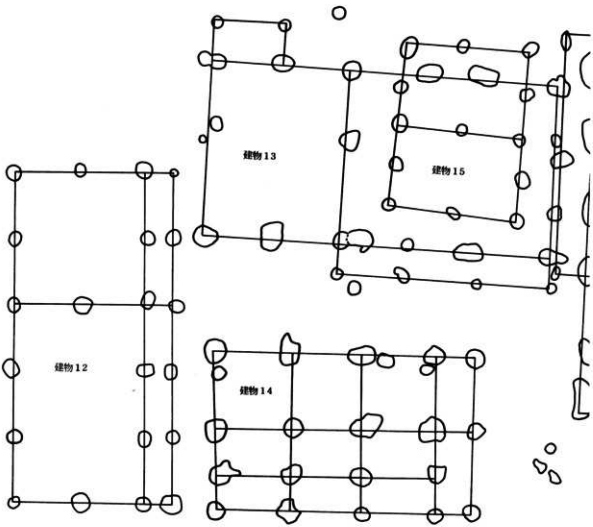
建物14は梁間間３間，桁行間４間の建物で第１郭北側に検出した。梁間間の長さは約4.65m桁行間の長さは東側7.62m，西側が7.46mの規模である。この建物は総柱で梁間２間と桁行間３間に半間間の下屋が南側と西側につく形である。上屋部にあたる西側は１間が狭い。この建物は他の建物と違って，倉庫の使用目的が考えられる。桁行方位はW17°である。

第11表　建物10の計測

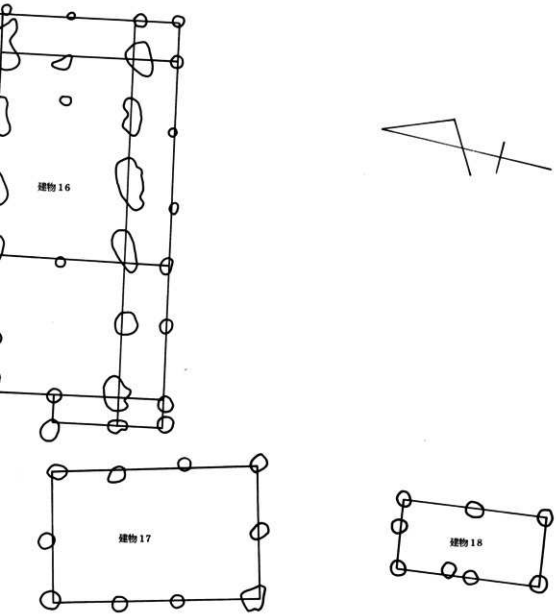
建　物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出部	柱穴の長径×短径×深さ(cm)
10	南３間	東５間	5.05m	1.18m	9.97m	9.96m	第１郭北	P 1　68×63×83　14　71×60×91
							方　位	
	北３間	西５間	4.97m	1.12m	10.28m	9.97m	W 11°	2　III×56×83　15　65×60×85
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3　80×72×91　16　97×57×81
P 1－2	2.54m	P 3－4	1.12m	P 3－6	1.98m	P 4－20	2.00m	4　70×62×69　17　57×52×81
2－3	2.43m	18－19	1.18m	6－8	2.01m	20－9	2.13m	5　97×78×83　18　58×53×89
16－17	2.67m			8－11	2.05m	9－12	1.92m	6　88×71×80　19　51×47×75
17－18	2.38m			11－14	1.98m	12－15	1.82m	7　84×72×97　20　66×60×90
				14－18	1.95m	15－19	2.09m	8　III×88×88　21　73×64×71
				1－5	1.97m			9　62×51×85
				5－7	2.20m			10　III×72×105
				7－10	2.20m			11　102×90×106
				10－13	2.08m			12　59×57×109
				13－16	1.83m			13　97×65×115

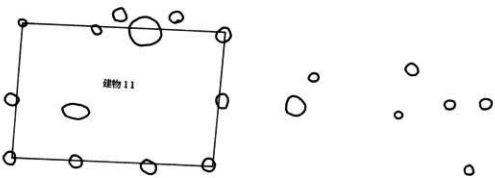
第12表　建物11の計測

建　物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出部	柱穴の長径×短径×深さ(cm)
11	南２間	東３間	3.97m		5.83m		第１郭南	P 1　22×21×44　10　37×31×40
							方　位	
	北２間	西３間	4.02m		5.70m		W 14°	2　41×38×45
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3　35×35×58
P 8－9	1.99m			P 1－4	2.15m			4　36×30×75
9－10	1.98m			4－6	1.18m			5　33×32×60
1－2	2.28m			6－8	2.37m			6　94×83×89
2－3	1.74m			3－5	1.85m			7　43×37×42
				5－7	2.14m			8　44×38×50
				7－10	1.84m			9　41×28×50



第24図　第１郭南区建物跡検出状況図


建物16
建物17
建物18


建物11

0
10m

建物15

建物15は梁間間が2間で桁行間が半間間の4間である。梁間の長さは東側3.60mで西側が3.75mである。桁行間は北側が4.88mで南側が4.88mの規模である。平均間は2.1mである。桁行の方位はW101°である。

第13表　建物12の計測

建　物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出郭	柱穴の長径×短径×深さ(cm)
12	東3間	南5間	3.83m	0.83m	9.74m		第1郭南	P 1　45×41×58　14 44×32×51
							方　位	
	西3間	北5間	3.73m	0.82m	9.76m	9.76m	W　103°	2　35×32×28　15 47×38×66
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3　48×42×58　16 46×39×67
P 1－2	1.93m	P 3－4	0.83m	P 1－5	1.96m			4　23×19×39　17 33×30×30
2－3	1.90m	20－21	0.82m	5－8	1.95m			5　42×39×70　18 42×37×69
18－19	1.93m			8－12	1.89m			6　42×38×54　19 60×52×64
19－20	1.80m			12－15	2.02m			7　43×39×60　20 42×39×50
				15－18	1.92m			8　45×42×63　21 59×49×70
				3－6	1.88m			9　59×47×75
				6－10	2.06m			10 54×39×47
				10－13	1.87m			11 40×32×45
				13－16	2.04m			12 53×45×82
				16－20	1.91m			13 53×37×48

第14表　建物13の計測

建　物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出郭	柱穴の長径×短径×深さ(cm)
13	南3間	東5間	5.10m	0.91m 0.86m	10.45m	2.26m 2.02m	第1郭南	P 1　70×53×74　14 72×49×61
							方　位	
	北3間	西5間	5.22m	1.10m 1.07m	10.27m	8.25m 6.29m	W　19°	2　23×22×45　15 32×27×55
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3　85×28×78　16 83×48×58
P21－20	2.16m	P19－18	0.91m	P 3－6	2.26m	P 4－7	2.02m	4　29×27×58　17 85×46×67
20－19	2.94m	3－4		6－11	1.98m	8－12	1.97m	5　83×56×72　18 33×25×50
1－2	2.86m	8－9	0.86m	11－14	2.31m	12－15	2.11m	6　65×33×84　19 87×32×75
2－3	2.36m	6－7	1.10m	14－17	1.60m	15－18	2.21m	7　35×31×57　20 58×39×61
				17－21	2.30m			8　36×32×70　21 67×41×80
				1－5	2.02m			9　97×46×86
				5－9	1.97m			10 63×48×65
				9－13	1.99m			11 55×49×73
				13－16	1.82m			12 53×21×58
				16－19	2.47m			13 39×36×62

建物16

建物16は梁間間が3間で桁行間が6間である。2間×5間の上屋に半間間の下屋が四方に廻っている。上屋の間仕切り柱は東3間・西2間の間にある。梁間間の長さは約5mで桁行間の長さは北側が約12.16mで南側が12mである。平均間は2.06mである。桁行の方位はW113°である。

建物17

建物17は梁間間2間で桁行間が3間である。梁間間の長さは北側が3.96m，南側が3.98mであり，桁行間の長さは6mと5.89mである。平均間は1.95mである。桁行の方位はW19°である。

建物18

建物18は梁間間1間で桁行間2間の建物であり，第1郭南区に検出した。梁間間の長さは約2m，桁行間は約4.2mである。桁行の方位はW11°である。

第15表　建物14の計測

建　物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出郭	柪穴の長径×短径×深さ(cm)	
14	南2間	東4間	4.59m		7.62m		第1郭南	P 1 48×46×65	11 70×58×90
	北2間	西4間	4.69m		7.46m		方　位	2 49×46×88	12 73×54×84
							W　17°	3 68×66×84	13 41×38×72
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		4 72×60×68	14 50×48×94
P14−15	1.38m	P13−14	1.03m	P 4−8	2.32m	P16−19	1.15m	5 69×51×77	15 66×57×97
15−16	2.18m	1−2	1.03m	8−12	1.95m	13−17	1.03m	6 58×50×87	16 58×40×78
2−3	1.38m	17−18	2.43m	12−16	2.20m	13−9	2.18m	7 50×48×94	17 50×44×90
3−4	2.28m	18−19	2.16m	2−6	2.26m	9−5	2.01m	8 68×52×76	18 44×40×74
				6−10	2.00m	5−1	2.24m	9 41×41×74	19 53×48×72
				10−14	2.18m			10 58×54×97	

第16表　建物15の計測

建　物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出郭	柪穴の長径×短径×深さ(cm)	
15	東2間	南2間	3.60m		4.88m		第1郭南	P 1 53×37×78	12 42×32×61
	西2間	北2間	3.76m		4.88m		方　位	2 39×31×60	13 39×33×72
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間	W　101°	3 62×33×38	
P11−12	1.90m			P 1−4	1.22m			4 41×28×53	
12−13	1.86m			4−6	1.34m			5 35×26×66	
1−2	1.88m			6−9	1.12m			6 40×32×60	
2−3	1.72m			9−11	1.20m			7 30×28×60	
				3−5	1.27m			8 48×47×52	
				5−8	1.18m			9 49×44×54	
				8−10	1.15m			10 42×37×55	
				10−13	1.28m			11 44×42×89	

建物19

建物19は第3郭に検出した。梁間間3間で桁行間4間の建物である。梁間間は約6.5mで桁行間は約8mである。上屋は2間×4間で下屋は梁間1間が南・北の桁行にある。間仕切り柱は2本あり，東側上屋の南側には竈がある。平均間は1.9mである。桁行の方位はW26°である。

第17表　建物16の計測

建　物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出郭
16	東3間	南6間	3.76m	9.8m 1.05m	9.8m	12.03m 11.96m	第1郭南
							方　位
	西3間	北6間	4.03m	1.28m	9.8m	12.18m 12.15m	W　113°
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間	
P 7－8	1.78m	P 1－2	0.98m	P 9－13	1.45m	P 5－10	1.24m
8－9	1.98m	4－5	1.09m	13－17	2.00m	10－14	1.92m
27－28	2.09m	6→7	1.13m	17－22	2.04m	14－18	2.23m
28－29	1.94m	9－10	1.32m	22－25	2.17m	18－23	1.74m
		30－29	1.28m	25－29	2.14m	23－26	1.80m
		34－33	1.28m	7－12	1.78m	26－30	2.10m
				12－16	2.02m	30－34	0.93m
				16－20	1.83m	1－6	1.39m
				20－24	2.34m	6－11	1.88m
				24－27	1.83m	11－15	2.08m
						15－19	1.78m
						19－31	6.05m

柱穴の長径×短径×深さ(cm)			
P 1	57×29×69	18	29×27×77
2	31×28×69	19	42×25×58
3	22×16×61	20	84×50×84
4	37×32×70	21	32×26×23
5	32×29×48	22	122×58×86
6	70×41×52	23	39×29×63
7	151×74×71	24	86×38×69
8	59×31×75	25	67×59×55
9	92×78×88	26	35×32×54
10	37×36×71	27	112×38×68
11	38×32×90	28	38×33×50
12	113×56×73	29	93×63×80
13	107×33×80	30	45×41×41
14	23×22×70	31	36×32×64
15	49×40×74	32	47×37×60
16	90×44×84	33	59×26×51
17	157×64×95	34	43×36×40

第18表　建物17の計測

建　物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出郭
17	南2間	東3間	3.98m		5.89m		第1郭南
							方　位
	北2間	西3間	3.96m		6.00m		W　19°
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間	
P 1－2	2.20m			P 1－4	1.83m		
2－3	1.76m			4－6	1.95m		
8－9	1.88m			6－8	2.11m		
9－10	2.10m			3－5	2.10m		
				5－7	1.70m		
				7－10	2.20m		

柱穴の長径×短径×深さ(cm)			
P 1	42×35×53	10	68×47×76
2	40×38×69		
3	51×48×77		
4	56×39×57		
5	39×38×81		
6	37×34×49		
7	37×35×61		
8	47×43×52		
9	47×39×71		

第19表　建物18の計測

建　物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出郭	柱穴の長径×短径×深さ(cm)
18	南1間	東2間	1.98m		4.16m		第1郭南	P 1　47×39×50
							方　位	
	北1間	西2間	2.07m		4.20m		W　11°	2　42×39×57
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3　40×35×63
P 1－2	2.07m			P 1－3	2.12m			4　40×39×62
5－6	1.98m			3－5	2.04m			5　53×46×63
				2－4	2.17m			6　54×51×69
				4－6	2.03m			

第20表　建物19の計測

建　物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出郭	柱穴の長径×短径×深さ(cm)	
19	東3間	南4間	4.99m	1.0m	8.01m	8.01m	第1郭南	P 1　33×30×35	13　41×38×60
							方　位		
	西3間	北4間	5.10m	1.02m	7.93m	7.91m	W　26°	2　48×45×72	14　77×33×60
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3　38×30×36	15　51×46×67
P 2－3	2.48m	P 1－2	1.60m	P 2－7	2.00m	P 1－6	1.98m	4　51×41×55	16　40×37×63
3－4	2.62m	18－19	1.27m	7－11	1.92m	6－10	2.00m	5　27×26×43	17　49×47×53
19－20	1.97m	4－5	1.02m	11－15	2.09m	10－14	2.15m	6　51×47×75	18　33×30×35
20－21	3.02m	21－24	1.00m	15－19	1.92m	14－18	1.78m	7　50×45×60	19　46×45×56
				4－8	1.95m	5－9	2.07m	8　48×39×30	20　47×35×87
				8－13	1.97m	9－22	1.93m	9　49×39×28	21　40×39×44
				13－17	1.98m	22－23	2.05m	10　40×33×60	22　51×50×56
				17－21	2.11m	23－24	1.92m	11　43×41×56	23　51×46×54
								12　51×43×61	24　47×35×56

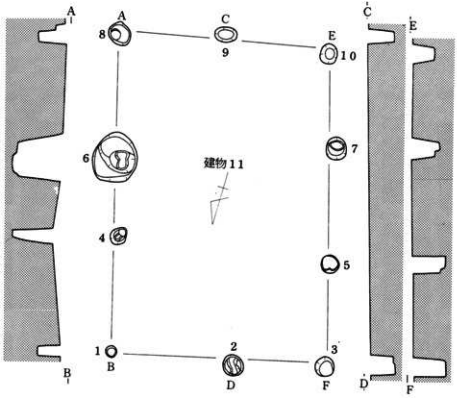
建物20

建物20は第3郭にある。梁間間3間で桁行間4間であるが，北側の上屋と下屋の桁行間は5間になっている。上屋の間仕切り柱は2本あり，中が2間間になっている。梁間間の長さは6.57～6.58mで桁行間の長さは10.7～10.84mである。平均の間の長さは2.64mである。全体的に間の長さが大きいが北側桁行と下屋の中央部は約1.8mをつかい桁行間を5間にしている。桁行の方位はW30°である。

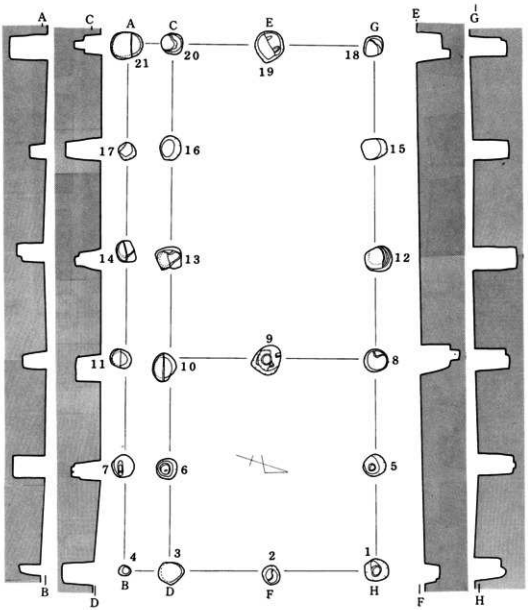
建物21

建物21は梁間間3間で桁行間6間の建物で第3郭に検出した。この建物は上屋が2間×5間で南側に半間間の下屋が基本の建物で北側と西側に半間の梁間間を増築し，上屋に1間の間をつくっている。梁間間は約6.3mで桁行間は約10.65mである。平均間の長さは1.96mである。桁行方位はW29°である。

建物22

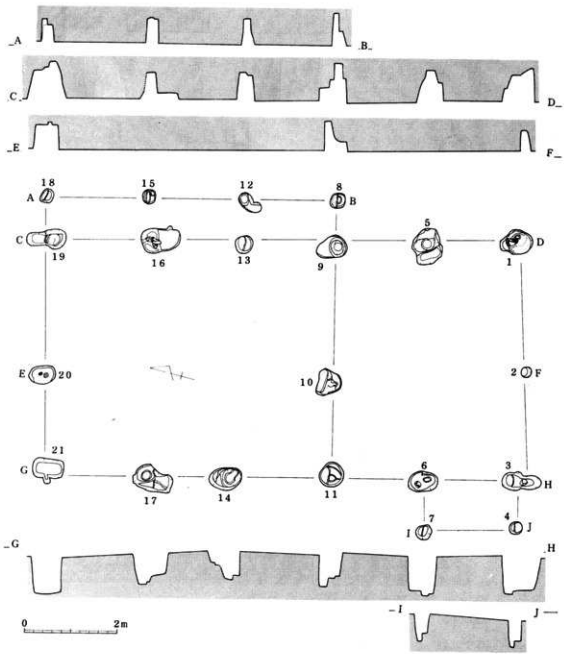


第25図　建　物　11　　15

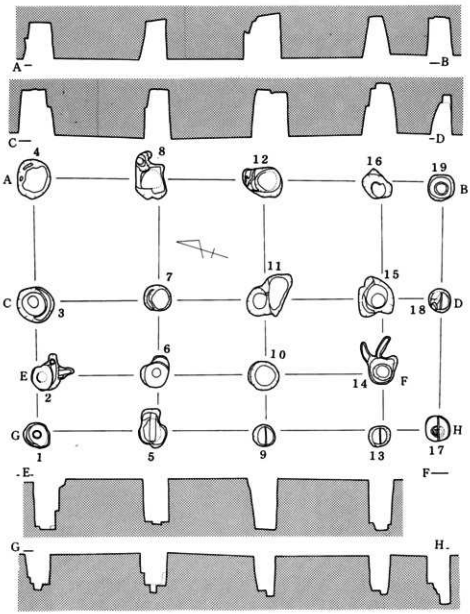


第26図 建　　物　　12

0　　2m

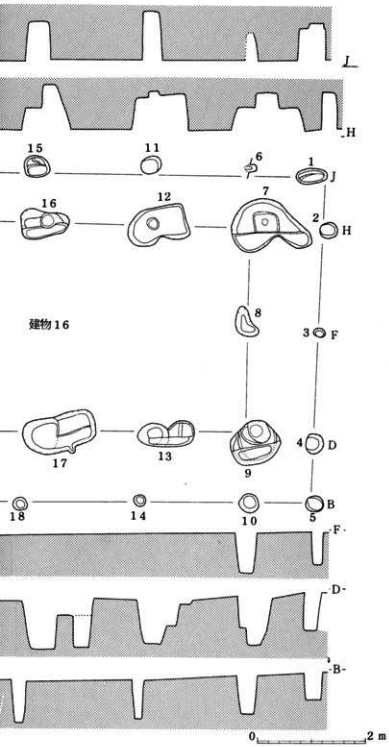


第27図 建　　物　　13

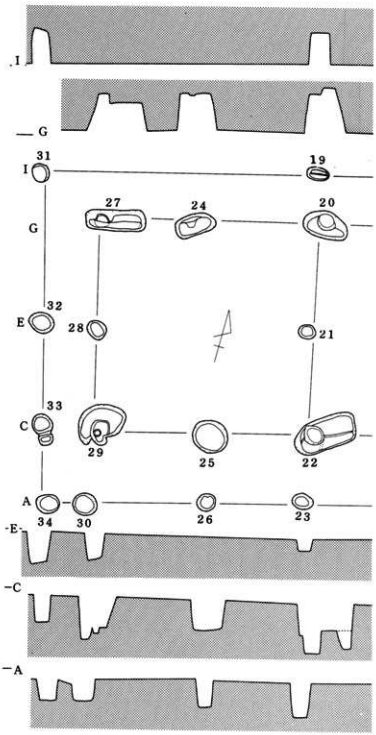


第28図　建　　物　　14

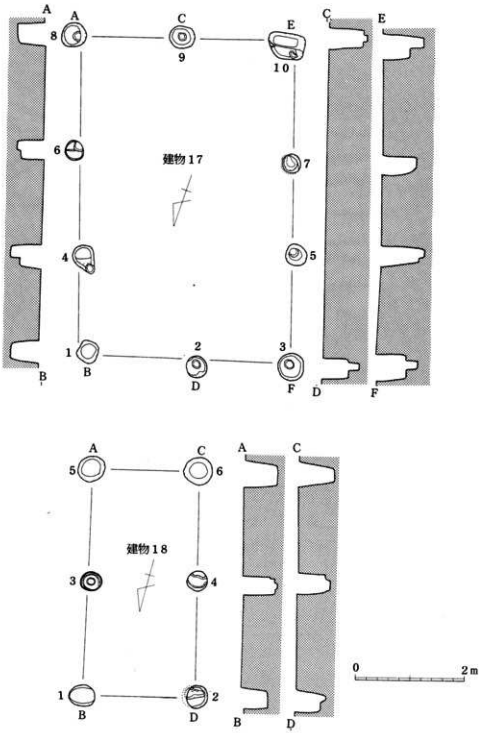
0　　2m



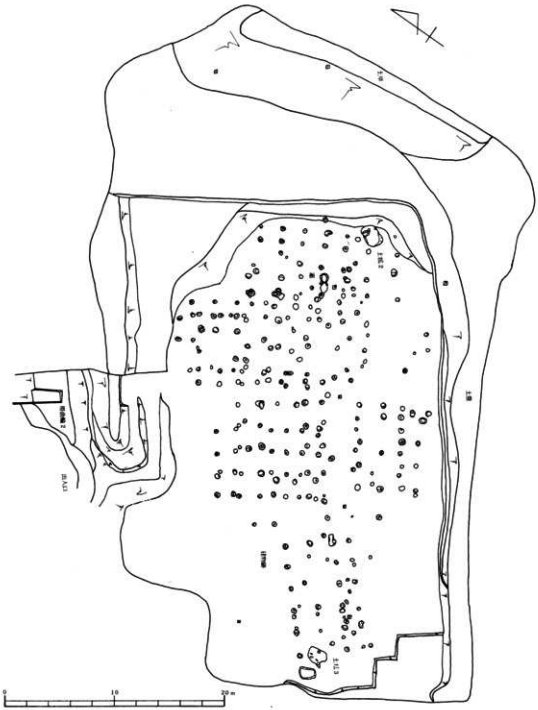
物　16

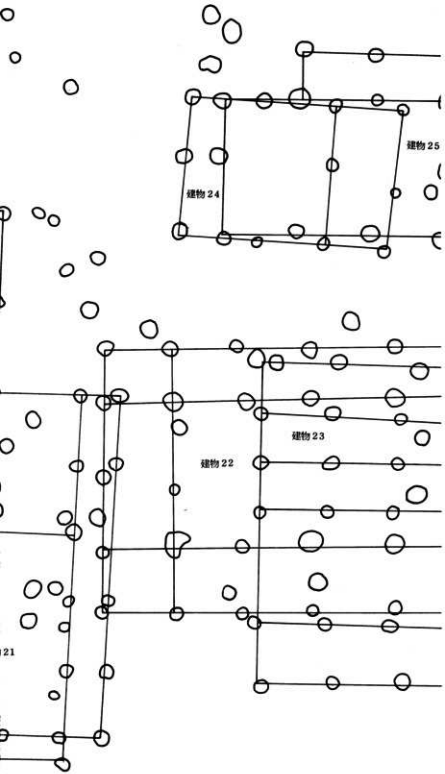


第29図　建

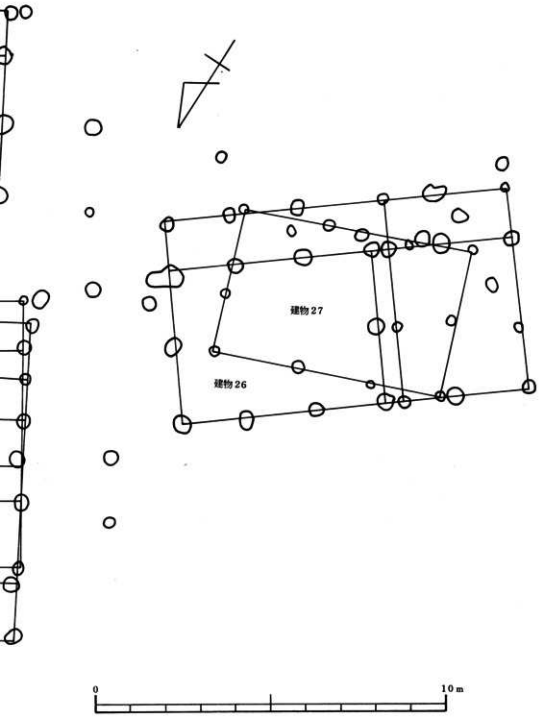


第30図　建　物　17　・　18


土塁
土塁
土塁



第32図　第 3 郭 の 建 物 跡 検 出 状 況



図

建物20
建物19
建物

建物22は梁間間４間で桁行間５間の建物である。上屋が２間×５間で東西に下屋がついている。上屋の間仕切り柱は北側に１本ある。東側の下屋は西側に比べ狭い。梁間間の長さは約6.56mで桁行間は約10.82mである。平均間の長さは2.12mである。桁行の方位はW125°である。

第21表　建物20の計測

建　物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出部
20	東３間	南４間	5.04m	1.53m	10.75m	10.84m	第３部
	西３間	北５間	5.00m	1.56m	10.82m	10.84m	方位 W 30°

上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間	
P２－３	2.58m	P１－２	1.56m	P２－６	2.96m	P１－５	3.00m
３－４	2.42m	17－18	1.53m	６－10	1.80m	５－９	1.84m
18－19	2.57m			10－12	1.94m	９－13	3.90m
19－20	2.47m			12－14	1.96m	13－17	2.10m
				14－18	2.16m		
				４－８	2.86m		
				８－11	2.69m		
				11－16	2.82m		
				16－20	2.38m		

柱穴の長径×短径×深さ(cm)		
P１	46×42×78	13 62×43×75
2	39×29×71	14 41×35×72
3	40×38×55	15 43×38×50
4	47×44×53	16 34×27×31
5	51×49×64	17 47×44×81
6	38×32×37	18 43×38×65
7	58×52×56	19 51×44×56
8	49×40×56	20 43×41×29
9	42×42×52	
10		
11	52×48×70	
12	50×46×51	

第22表　建物21の計測

建　物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出部
21	東３間	南６間	5.08m	1.18m 1.24m	10.67m	10.67m 10.67m	第３部
	西３間	北６間	5.15m	1.23m 1.12m	10.65m	10.65m 9.93m	方位 W 29°

上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間	
P５－６	1.45m	P27－28	1.23m	P８－13	1.94m	P７－14	2.04m
６－７	1.80m	30－31	1.12m	13－18	1.32m	14－19	2.03m
７－８	1.83m	１－２	1.18m	18－23	2.72m	19－26	3.93m
28－29	2.52m	８－９	1.24m	23－25	1.88m	26－31	1.93m
29－30	2.63m			25－30	2.07m	１－10	1.95m
				５－32	1.88m	10－15	2.15m
				32－33	2.16m	15－20	2.53m
				33－21	1.91m	20－27	4.04m
				21－24	2.03m		
				24－28	1.99m		
				２－５	0.70m		
				４－８	0.72m		

柱穴の長径×短径×深さ(cm)		
P１	49×41×54	20 33×31×48
2	45×43×85	21 38×30×47
3	33×31×47	22 39×38×36
4	37×33×64	23 42×41×82
5	45×42×51	24 40×39×53
6	68×58×39	25 35×29×80
7	38×27×71	26 34×31×53
8	33×31×83	27 39×31×52
9	41×40×80	28 39×34×50
10	46×38×52	29 53×46×69
11	49×45×66	30 36×35×50
12	51×43×38	31 50×31×76
13	39×34×76	32 46×41×60
14	42×35×71	33 47×44×57
15	36×35×33	34 39×31×57
16	45×44×53	
17	48×47×49	
18	34×30×57	
19	30×29×77	

第23表　建物22の計測

建　物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出郭	柱穴の長径×短径×深さ(cm)
22	南4間	東5間	4.31m	1.78m 1.51m	10.53m	10.50m 10.53m	第3郭	P 1 41×33×33　14 34×31×60
	北4間	西5間	4.41m	1.84m 1.97m	10.58m	10.58m 10.60m	方位 W 125°	2 40×39×44　15 61×58×85
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3 40×37×64　16 46×44×78
P23−24	2.38m	P1−2	1.78m	P4−8	2.01m	P5−9	1.98m	4 44×40×61　17 49×39×55
24−25	2.03m	22−23	1.84m	8−12	2.12m	9−13	1.85m	5 45×42×57　18 39×38×33
2−3	2.11m	4−5	1.51m	12−16	1.83m	13−17	2.14m	6 41×38×35　19 53×51×70
3−4	2.20m	25−26	1.97m	16−20	2.51m	17−21	2.42m	7 52×49×59　20 48×42×75
				20−25	2.11m	21−26	2.21m	8 54×50×83　21 42×38×41
				2−7	2.14m	1−6	2.18m	9 42×38×56　22 36×32×54
				7−11	1.86m	6−10	1.86m	10 36×32×64　23 41×40×68
				11−15	2.02m	10−14	2.05m	11 41×39×68　24 41×38×50
				15−19	2.40m	14−18	2.38m	12 47×45×73　25 37×30×37
				19−23	2.11m	18−22	2.03m	13 41×39×43　26 36×33×48
								27 33×32×53

建物23

建物23は総柱の建物で3間×6間で西側には2間間がある。桁行方位はW33°である。使用目的は倉庫と考えられる。

第24表　建物23の計測

建　物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出郭	柱穴の長径×短径×深さ(cm)
23	東3間	南5間	5.95m		9.84m		第3郭	P 1 43×41×38　14 44×34×62
	西3間	北5間	6.09m		9.03m		方位 W 33°	2 35×33×68　15 38×35×70
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3 47×44×90　16 44×41×60
P21−22	2.20m			P4−8	1.57m			4 55×41×45　17 36×34×62
22−23	2.36m			8−12	3.62m			5 35×32×58　18 43×36×68
24−24	1.53m			12−16	1.10m			6 40×35×62　19 33×31×48
1−2	2.17m			16−20	1.18m			7 43×38×65　20 32×31×64
2−3	2.06m			20−24	1.56m			8 41×39×50　21 53×50×70
3−4	1.72m			1−5	1.72m			9 32×31×67　22 46×44×67
				5−9	3.16m			10 33×31×70　23 48×43×47
				9−13	1.93m			11 50×40×31　24 46×44×45
				13−17	1.42m			12 46×44×63
				17−21	1.10m			13 44×41×83

建物24

建物24は第3郭に検出した。梁間間は2間で桁行間は3間である。その長さは梁間間の北側

が3.91m，南側が3.87mで，桁行間が約6.6mと4.36，2.72mである。平均間の長さは2.01mである。桁行の方位はW120°である。

第25表　建物24の計測

建　物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出郭	柱穴の長径×短径×深さ(cm)
24	南2間	東3間	3.94m		6.16m		第3郭	P 1　42×41×36　10 25×23×30
	北2間	西3間	4.05m		6.02m		方位 W 120°	2　47×42×66　11 34×36×38
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3　40×37×43
P 9－10	1.79m			P 3－5	1.98m			4　26×25×17
10－11	2.26m			5－8	2.04m			5　42×39×54
1－2	2.07m			8－11	2.00m			6　31×30×39
2－3	1.87m			1－4	2.33m			7　37×31×35
				4－6	1.97m			8　38×35×51
				6－9	1.86m			9　35×30×54

建物25

建物25は第3郭に検出した。梁間間が2間と桁行間が3間の上屋に梁間間半間と桁行間2間の下屋が東側についている建物である。上屋は約3.9m×6.6mで，下屋は約1.35m×4.36mと2.72mである。平均間の長さは2.06mである。桁行方位はW124°である。

第26表　建物25の計測

建　物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出郭	柱穴の長径×短径×深さ(cm)
25	南3間	東3間	3.87m	1.34m	6.65m	4.36m	第3郭	P 1　34×32×74　10 51×49×52
	北2間	西3間	3.91m	1.38m	6.52m	2.72m	方位 W 124°	2　45×43×13　11 57×50×62
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3　47×42×56　12 51×45×77
P 1－2	2.12m	P 5－6	1.38m	P 3－5	2.29m	P 6－9	2.13m	4　38×36×22　13 42×36×55
2－3	1.79m	12－13	1.34m	5－8	2.25m	9－13	2.22m	5　59×51×57
10－11	2.05m			8－12	2.11m			6　47×44×47
11－12	1.82m			1－4	2.20m			7　48×43×33
				4－7	2.16m			8　34×32×72
				7－10	2.16m			9　46×42×63

建物26

建物26は第3郭に検出した。梁間間は3間半約5.6m，桁行間は5間で約10mである。西側には半間間の下屋が付いている。上屋には北側3間と南側2間の間に2本の間仕切り柱がつき，桁行にも柱を増している。平均間の長さは2.18mである。桁行の方位はW132°である。

建物27

建物27は第3郭に検出した。梁間間は2間で4.24mと4.25m，桁行間は3間で6.71mである。平均間の長さは2.7mである。桁行の方位はW114°である。

第27表　建物26の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出郭	柱穴の長径×短径×深さ(cm)		
26	南3間	東5間	4.24m	1.43m	10.15m	9.92m	第3郭	P 1	49×45×62	14 37×36×44
	北3間	西5間	4.38m	1.99m	9.92m	9.90m	方位 W 132°	2	49×42×36	15 31×28×51
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3	不×47×45	16 43×40×50
P 1－2	2.21m	P 3－4	1.99m	P 3－6	1.88m	P 4－7	1.83m	4	49×37×46	17 33×30×64
2－3	2.03m	22－23	1.43m	6－9	2.05m	7－10	2.00m	5	46×38×71	18 47×45×51
21－24	1.80m			9－13	1.93m	10－17	2.43m	6	41×40×75	19 52×45×39
24－22	2.58m			13－19	2.06m	17－20	1.42m	7	40×34×63	20 70×37×40
				19－22	2.00m	20－23	2.02m	8	43×40×55	21 38×36×40
				1－5	1.91m			9	49×41×70	22 43×41×50
				5－8	2.03m			10	36×36×49	23 28×26×42
				8－11	2.02m			11	42×40×63	24 30×28
				11－18	2.05m			12	45×43×76	
				18－21	2.14m			13	40×40×82	

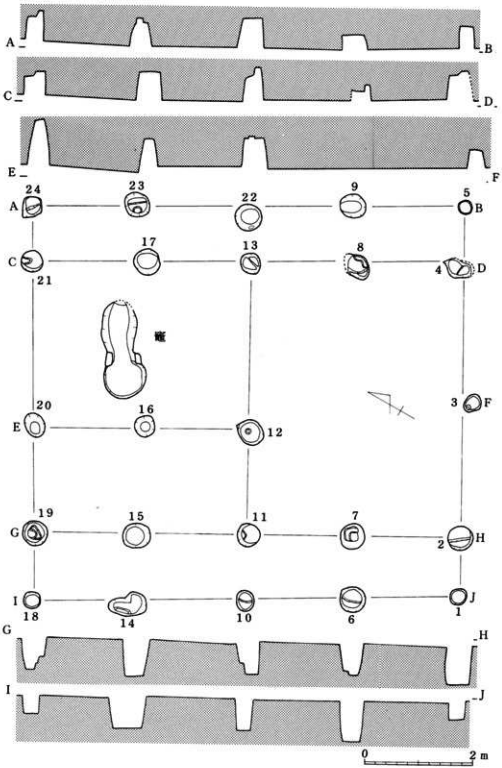
第28表　建物27の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出郭	柱穴の長径×短径×深さ(cm)		
27	南2間	東3間	4.25m		6.71m		第3郭	P 1	29×27×24	10 24×20×35
	北2間	西3間	4.24m		6.71m		方位 W 114°	2	27×25×23	
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		3	28×26×31	
P 1－2	2.20m			P 3－5	1.74m			4	38×35×21	
2－3	2.04m			5－7	2.41m			5	21×20×37	
8－9	1.64m			7－10	2.56m			6	35×32×37	
9－10	2.61m			1－4	2.06m			7	34×30×43	
				4－6	2.13m			8	27×25×50	
				6－8	2.52m			9	36×33×65	

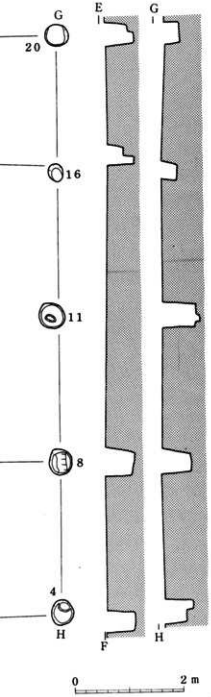
以上が堀立柱の建物跡である。柱穴は全体として第1郭に大きなものがあり，第3郭には大きなものはない。深さは全体的に深く1m位のものもある。飼石は軽石を使用し，2ないし3個入れる場合もあれば10～12個入れる場合もある。軽石の大きさは20～50cm位のものである。

建物跡は第1郭・第3郭とも重なり合っているものや方位がずれているものがある。先づ第1郭の地区は10棟のすべてがどれかに重なり合っている。建物1・2，建物3・4，建物4・3・5・6，建物5・4，建物6・3・4・7，建物7・6・8，建物8・7，建物9・10が互いに重り合っており，3棟重なるのもある。そして方位がずれるのは建物1・2・3・7・9・10に対し，建物4・5・6・8が若干北へずれている。

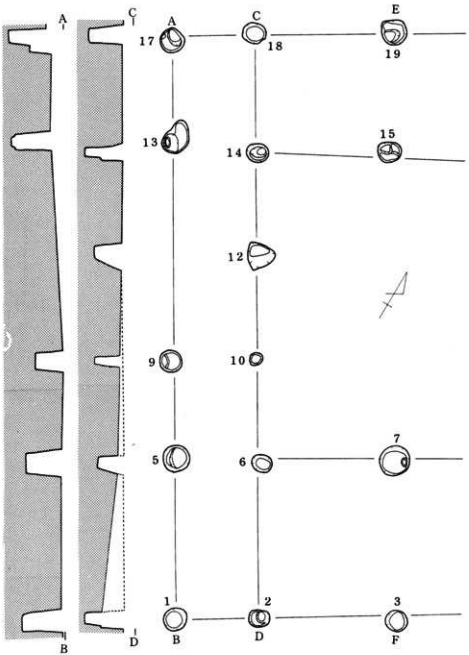
第1郭の南区は建物13と15が重なり合っているだけである。



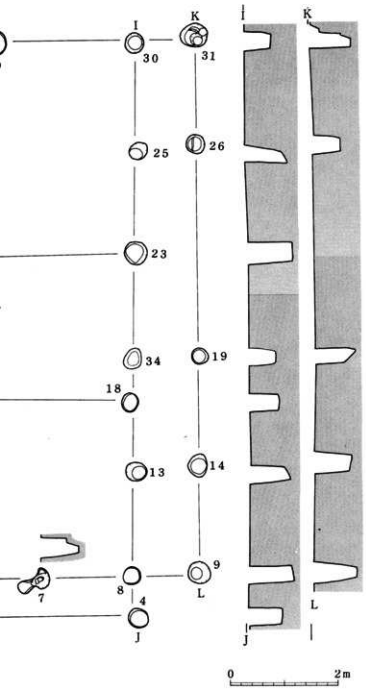
第33図　建　　物　　19



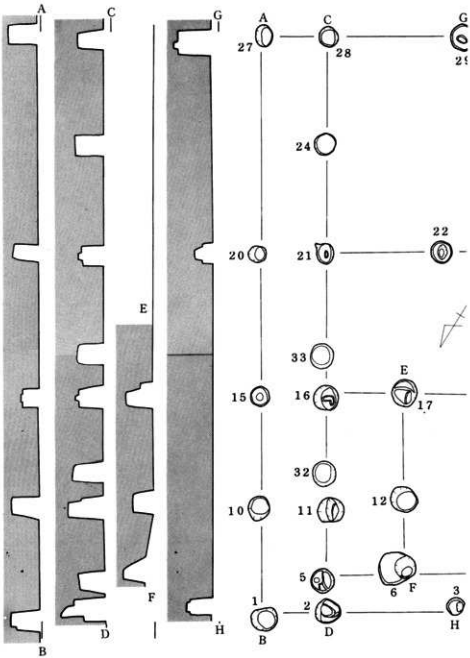
20



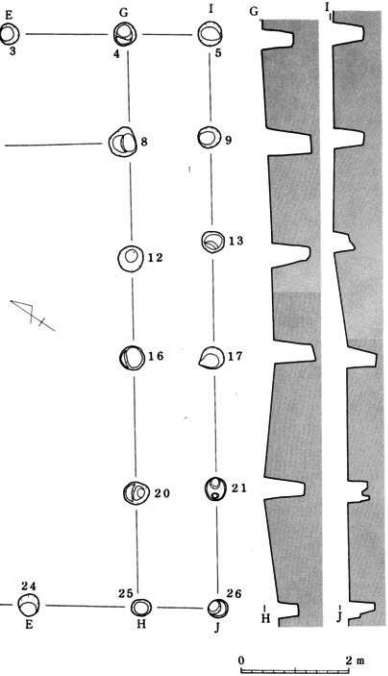
第34図 建　　物



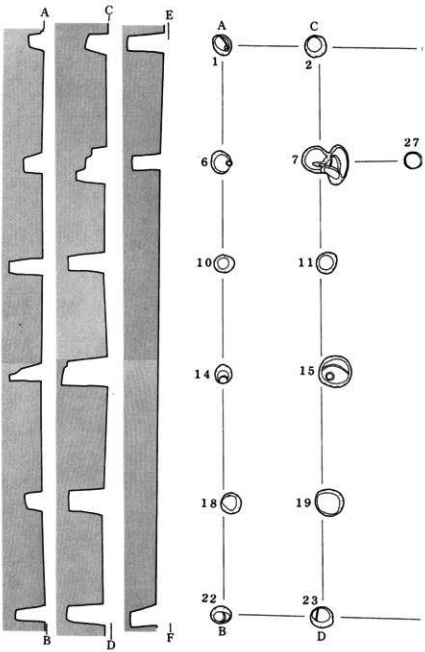
物　21



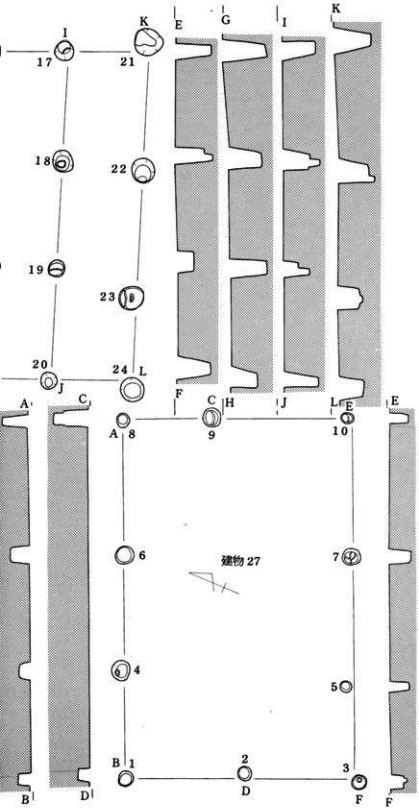
第35図　建

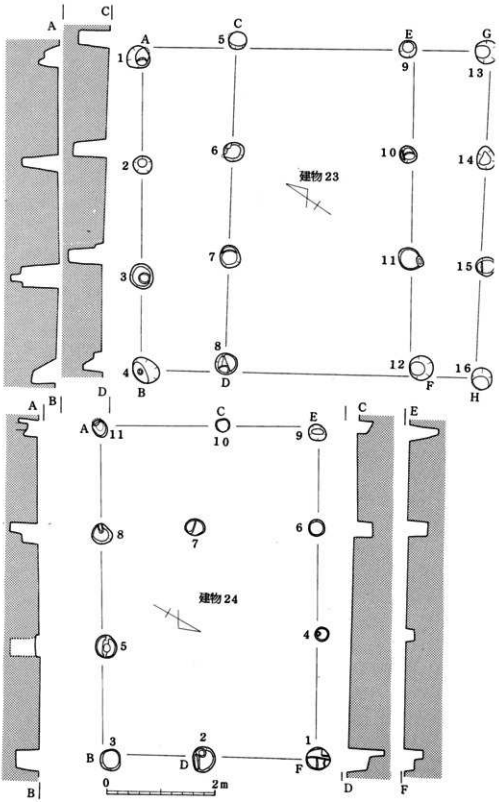


物　22

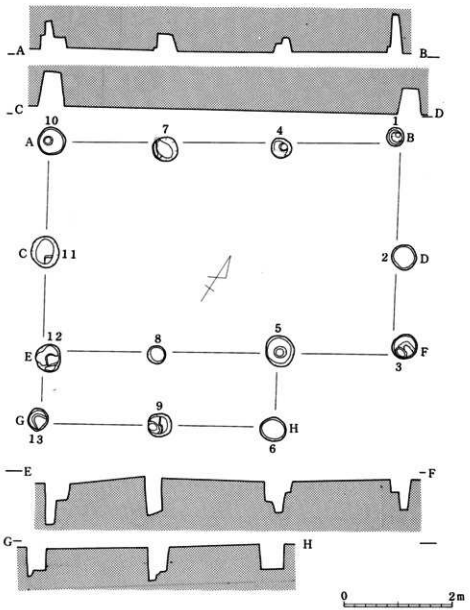


第36図　建

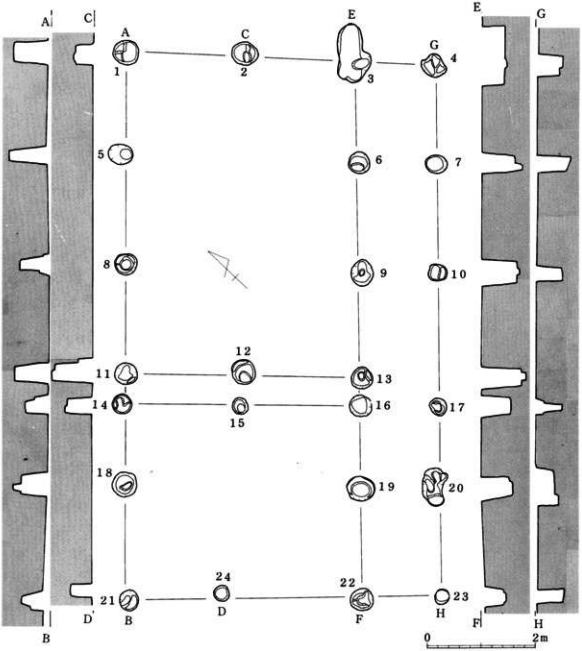

建物 27



第37図 建 物 23 ・ 24 ・ 27



第38図　建　　物　　25


A
C
E
E
G
A
C
E
G
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
D'
B
D
F
H
F
H
B
0
2m

第39図　建　　物　　26

第3郭は3棟重り合っているのが建物19・20・21と建物21・20・22と建物22・21・23であり他は建物23・22，建物24・25，建物26・27が2棟重り合っている。建物のずれは建物20・21・22・25・26に対し建物19・23・24・27が若干東へずれている。

これらの建物は全体として方位のずれと重り合いで2時期は確実と考えられる。しかし第1郭の北区では3回の重り合いがみられ，これを時期的なものか短期間の建て直しか判断は困難と考えられる。

2，第1・3・5郭の土坑と竈および水溜遺構

方形の土坑が5基検出した。第1郭の北区に1基，第3郭に2基，第5郭に2基であった。

第1郭の土坑は柱穴と切り合って検出した。15m×1.45mの方形で深さ50cmの竪穴である。遺物の出土はない。

第3郭の土坑は北東側と南西側にあった。角丸方形で1.7m×1.2mで深さ40cmであった。遺物の出土はなかった。南西側は1.3m×1.0mで深さは20cmであった。これには炭が多量にあった。この土坑は他の土坑と違って浅かった。

第5郭の土坑は北側と中央にあった。北側は2.4m×2.0mで深さ45cmであった。形は方形であり，出土遺物はなかった。

竈

第3郭に検出した。径70cm～75cmの円形の竈と60×80cmの灰溜の堀り込みがある。その境には石が両脇に立ててある。竈の深さは25cmで灰溜の深さは15cmである。竈の縁は2～5cmの厚味で焼土がみられる。赤燈色を呈している。そして石も焼けた状態で赤褐色を呈している。この竈の大きさは長さ1.7m，幅0.75mであると思われる。そしてこの竈は建物19に伴うと考える。

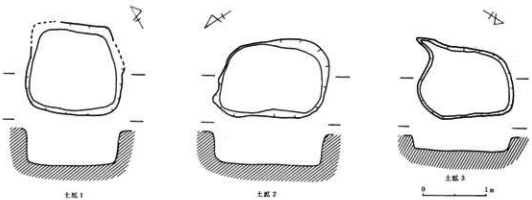
水溜遺構（水ノ手）

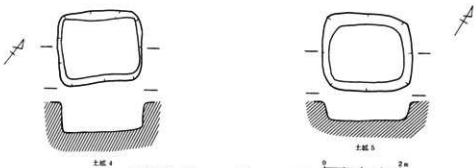
この遺構は谷部の下位に検出された。曲輪としては帯曲輪の中にあった。東西9m×南北8mの角丸方形で深さが約3mある。東西の両脇に2本づつ4本の溝があり，水を集めるための施設と考えられる。幅は約20cmで深さは約15cmのU字状の溝である。南側より両脇から上下道がつくられており水をくみ上げる通路の施設と考えられる。そして底の北側は一段浅くなっている。

遺物は鉄屑が1点出土した。鑑定の結果，カルシュウム分が非常に多く，中世末～近世にかけてのものであるということである。また自然産物として高師小僧が検出した。堆積状況は水酸化鉄の層が底面から中上面まで付着し，その中は青灰色のノロ状の土と，水酸化鉄の層の互層が多くみられた。よってこの遺構は水溜で有事の際の水ノ手と考えられる。

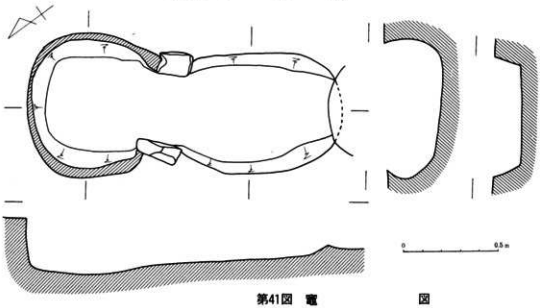
第3節　古代の炉跡

谷部の低いところで水溜遺構の北側に検出した。3ケ所の炉跡と4ケ所のピットが列状に検出した。炉跡は不定形で70～80cmの落ちこみ状で焼土がレンズ状にみられる。層位としては中世面より下であり周囲には成川式土器片，須恵器片，土師器片が出土している。土師器は奈良～平安時代のもので成川式土器は奈良以降のものと考えられる。そしてこれらの遺物は完形品が少なく少片が多かった。

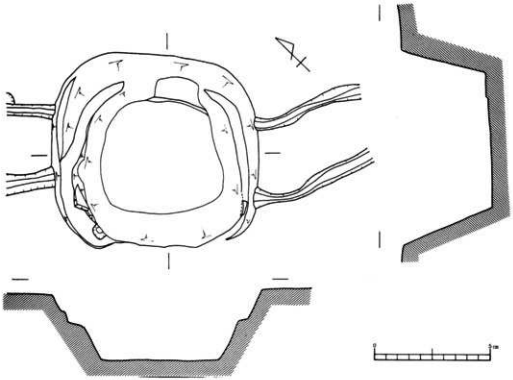




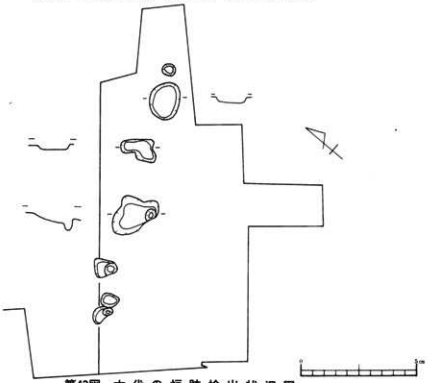
第40図　土　　坑　　図



第41図　竈　　図



第42図　水溜遺構（水ノ手）検出状況図

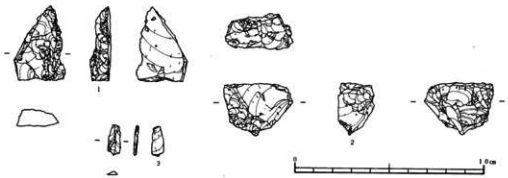


第43図　古代の炉跡検出状況図

第4節　出土遺物

1，旧石器時代（第44図　1～3）

第1郭8区8層より黒曜石の石核・剥片・フレークツール・マイクロブレードと土器片が出土した。第44図は，フレークツール・剥片・マイクロブレードである。一部，細部に調整痕がみられる。土器片は5点出土したが，いずれも0.5～1cmの細片であった。



第44図　旧石器時代の遺物

2，縄文時代　（第45・46図　4～18）

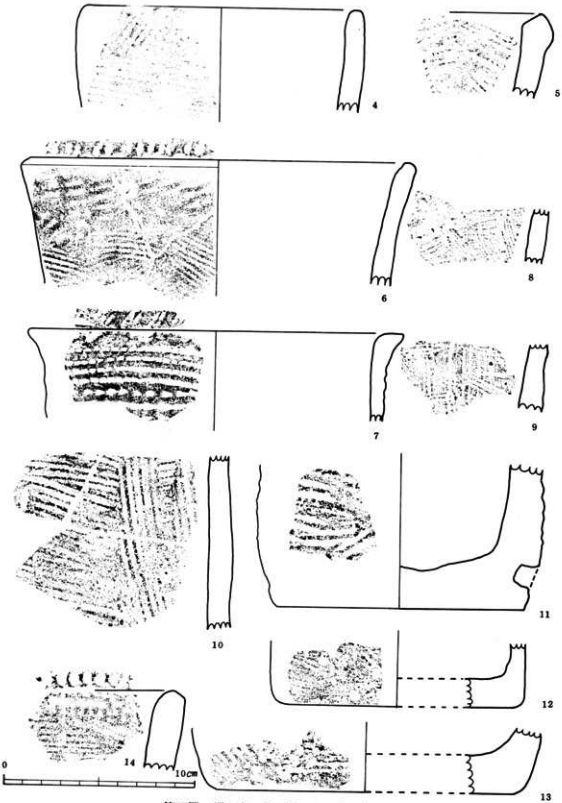
石坂系の土器と塞ノ神系の土器ならびに条痕土器が出土している。石坂系の土器は，口唇部が丸く仕上げられ，外傾する直線的な体部をもつ。条痕文を地文とする胴部は，厚手の底部へと続く。塞ノ神式土器は朝顔状に開く「く」の字状口縁を成し，いずれも胎土には，砂粒を含む。縄文時代早期に位置するものである。**16**は不明である。

3，古代（第47～50図　19～73）

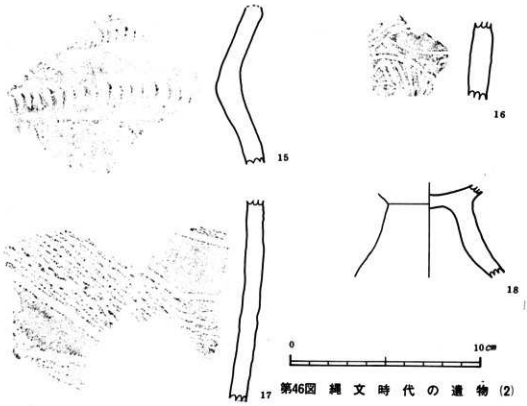
成川式土器系の甕形土器，奈良～平安時代にかけて土師器・須恵器が出土している。成川式土器はバケツ形の器形で新しい時期のものと考える。甕形土器は，やや外傾する直線的な口縁部をもち，くびれのない頸部には突帯文・刻目突帯文を廻す。底部は，丸底・中空で脚部の中央に突起のあるもの，ないものに分けられる。土師器は甕・坏・碗が出土している。甕の口縁部は，「く」の字状に外反する器形である。坏は，底部からゆるやかに口縁部に立ち上る**45**・**46**・**47**・**48**・**50**・**52**・**54**・**56**・**57**と，外傾する直線的な体部をもつ**44**・**49**・**51**・**53**・**55**・**58**・**59**がある。**45**・**47**は，上げ底である。底部切り離しは，篦切り・糸切り後，調整された2種類を確認できる。**60**・**61**は台付の坏で，**60**は上げ底である。これらは古墳時代～平安時代にかけての遺物である。

4，中世（第51～60図　74～163，古銭1～4，6～8）

土師器・瓦器・摺鉢・青磁・染付が出土している。土師器には坏・皿があり，胎土はともに良質土である。坏の体部は，底部から口縁部に内弯気味に立ち上る**74**・**75**がある。底部切り離しは，糸切り・その後，器面調整された2種を確認できる。皿の口縁部は丸く仕上げられ，完形品に近いものもある。器形は，底部から外傾する直線的な体部をもつ**80**・**81**・**83**・**84**・**87**，



第45図 縄 文 時 代 の 遺 物 (1)



第46図　縄文時代の遺物(2)

胴部に張らみをもつ82・85に分けられる。88～96は瓦質の火舎である。口縁部の器形は，口唇部が平坦で外開きの88。口唇部が平坦で断面三角形を成し，やや外反する89・91，前者に同類で内弯気味のもの90の３種類に分けられる。胎土には砂粒が含まれ，ナデ調整により器面を密にしている。体部文様は，突帯文・連子状文・帯状文の透し等が廻っている。97～104は摺鉢である。口縁部は内弯する97・100・101・102，外傾する直線的な体部をもつ98・99に分けられる。胎土は微密である。102・103・105等はやや大きめの砂粒を含むが，入念な器面調整が成され，滑らかな内器面をもつ。内器面下半部においては，かなり摺られたらしく，摩滅が著しい。かき上げ底の残りはよくない。これらの遺物は出土状況等から16世紀頃にあたるものと考えられる。青磁106～137は碗と皿に分けられる。器形は，端反りの口縁部から，張らみをもつ腰へ続くものが主体をしめる。浮き彫りを持つ蓮弁文106は13世紀の古手のタイプである。碗107～127は器形・文様・施釉法等より14世紀中～15世紀ごろの産物と考えられ，皿128～135は，上記の特徴より15世紀の遺物とされる。線描蓮弁文の文様をもつ碗136・137は，15世紀～16世紀初頭の遺物と考えられる。染付138～154には，碗・皿・盤がある。口縁部は，内弯気味のもの，直行するもの，外反するものに分けられ，安定した高台・蕎麦底へと続く。全体的に青色の発色物で界線・雷文・芭蕉文・玉取獅子・牡丹唐草文等の図柄が描かれ，いずれも16世紀の遺物である。153・154は時期不明である。

5，近世　(第61図　164～177)

碗・徳利・茶家・猪口・甕が出土した。

第29表　出土遺物一覧

番号	出土位置	器　種	特　　徴（文様と調整）	色　調	形式名	焼成
4	第3郭，南区	鉢，口縁	口縁部に綾杉状の貝殻刺突文を施し，その直下に2条の同施文具による横走の刺突文を施す外器面に貝殻調整痕を有す。	内器面，外器面ともに明茶褐色	石坂式	良好
5	第3郭，南区	鉢，口縁	山形口縁を有し，山形の部分のみ肥厚している。口縁部に6条の貝殻腹縁による横走の刺突文を有す。胴部に貝殻調整痕を有す。	内器面，外器面ともに明茶褐色	石坂式	良好
6	第3郭，南区	鉢，口縁	口外部にニス状の施文具による刻み目を有す。口縁部は貝殻腹縁による刺突文を有し，胴部にかけて貝殻条痕が施される。内器面は一部貼付部も確認され，何かでナデ調整された痕が確認される。	内外→黄褐色	石坂式	良好
7	第1郭	鉢，口縁	口縁，口外部にこすりつけたような浅い刻み目を有す口縁部には4条の貝殻腹縁による横走の刺突文を有し，その直下に左から右方向へ数条の横圧痕が見られる。内器面はヨコナデされている。	内外器面とも明茶褐色	石坂式	良好
8	第1郭，北区	胴部	一条の細隆起線文に刻み目を有し，器面には不規則な条痕が施されている。	内→灰褐色 外→明茶褐色	貝殻文	不良
9	第3郭，南区	胴部	外器面は不規則な条痕が施され，内器面は調整されており，滑らかである。	内→暗茶褐色 外→明茶褐色	貝殻文	不良
10	第3郭，南区	胴部	外器面は縦，横方向に貝殻条痕文が施され，内器面はナデ調整され滑らかである。	内→褐色 外→暗茶褐色	石坂式	不良
11	掘　3	鉢，底部	胴部，外器面は綾杉条痕を施文してある。内器面底部は指頭で調整されたような凹凸の面を有す。	内→暗茶褐色 外→赤褐色	石坂式	不良
12	第3郭，南区	鉢，底部	底部よりほぼ直角に口縁部に向う器形の平底である。外器面は貝殻条痕を有し，内器面ではナデ調整がかられる。	内→茶褐色 外→明茶褐色	石坂式	不良
13	第1郭，北区	鉢，底部	底部は滑らかで多少上げ底ぎみである。外器面は貝殻条痕を有し，内器面はナデ調整されている。	内→暗赤褐色 外→暗赤褐色	石坂式	不良
14	第3郭，南区	鉢，口縁	口外部に刻み目文，口縁部には数条の押圧連続文を有し，その直下から貝殻条痕文が施されている。内器面は条痕調整された後，ヘラ状の工具でヨコナデされている。	内→明茶褐色 外→明茶褐色	石坂式	不良
15	第1郭	鉢，口縁	「く」の字状の口縁部で，内外器面ともに，ナデ調整が施され滑らかである。口縁部の開いた部位に連続刻み目が施されている。	内→黄褐色 外→茶褐色	塞ノ神式	不良
16	第4郭	胴部	外器面は滑らかに調整され，その上から直線と曲線を組み合わせた沈線文を有す。内器面は凹凸あり。	内外→赤褐色		不良
17	第1郭	鉢，胴部	外器面，内器面ともに滑らかに調整され，外器面は沈線の区画内に燃糸文を施している。	内→褐色 外→明茶褐色	塞ノ神式	不良
18	第1郭	鉢，底部	内外面ともにかなり風化しており，器面観察はできない。	内外→淡黄褐色		不良
19	帯曲輪7	甕，口縁	口縁部はやや肥厚し縦毛目調整痕を有す。縁りのない頸部には貼り付け突帯をおき斜状の刻みを施す。内器面には横ナデの調整痕がみられる。	内→明茶褐色 外→赤褐色	成川式	不良
20	帯曲輪3の段状曲輪	甕，口縁	口縁部は角ばり，縁りのない頸部に貼り付け突帯を有し斜状の刻を施す。器面は条痕調整され，その上にヨコナデの調整痕がみられる。	内外→茶褐色	成川式	不良
21	帯曲輪4	甕，口縁	縁りのない頸部は断面台形状の貼り付け突帯を有す。口縁部にはヨコナデの調整痕がみられ，胴部では条痕による調整痕がからられる。内器面には晩状のものによる調整痕が施されされている。	内→黒褐色 外→褐色	成川式	不良
22	帯曲輪3の段状曲輪	甕，口縁	頸部には貼り付け突帯を有し，斜状の刻みを施す。外器面は条痕調整され，さらにヨコナデの調整痕がみられる。内器面は斜状の調整痕がみられる。滑らかに仕上っている。	内→灰褐色 外→明茶褐色	成川式	不良

番号	出土位置	器種	特徴（文様と調整）	色調	形式名	焼成
23	帯曲輪7	甕，胴部	一条の貼り付け突帯を有す。	内→黄褐色 外→茶褐色	成川式	良好
24	帯曲輪3の段状曲輪	甕，胴部	刻みを持った貼り付け突帯文を有す。	内外→明茶褐色	成川式	不良
25	帯曲輪7	甕，胴部	刻みを持った貼り付け突帯を有し，内外器面ともにヨコナデ調整痕がみられる。	内→赤褐色 外→明茶褐色	成川式	不良
26	帯曲輪4の段状曲輪	甕，胴部	斜状の刻みをもった貼付突帯文を有す。器面は内外共にヨコナデ調整され滑らかに仕上っている。突帯下には下から上へ向う刺突文が施され，その一部にはススが付着している。	内外→明茶褐色	成川式	不良
27	帯曲輪3の段状曲輪	甕，胴部	貼り付け突帯を有し，斜状の刻みを施す。突帯より上はヨコナデが施され下では条痕調整が残っている。内器面ではタテナデがみられる。	内→褐色 外→茶褐色	成川式	良好
28	帯曲輪4	甕，胴部	刻みを持った貼り付け突帯文をもつ。外器面ではヨコナデ，内器面では斜位の条痕調整が施される。	内外→明茶褐色	成川式	不良
29	帯曲輪4	台付甕底	中空の底部である。外器面はハケ目調整があり，内器面は縦ミガキ目が確認できる。	内外→明茶褐色	成川式	良好
30	帯曲輪4	台付甕底	中空の底部である。底部から脚台にかけて「く」の字状にくびれている。底部内器面にはヘソ状の突起がみられる。外器面は斜位，縦位にナデられ，内器面もまたナデ調整されている。	内外→明茶褐色	成川式	不良
31	帯曲輪3の段状曲輪	台付甕底	中空の底部である。器台内側に滑らかな張られをもつ。内外面ともにヨコナデの調整痕がみられる。	内外→赤褐色	成川式	良好
32	帯曲輪4	台付甕底	中空の底部である。器台内側にヘソ状の突起がみられる。外内器面ともにナデ調整されているが荒く仕上っている。	内外→明茶褐色	成川式	不良
33	帯曲輪4	底部	丸底である。外器面調整は成されているが雑である。 内器面は指頭状のもので調整が施されている。	内外→明茶褐色	成川式	不良
34	帯曲輪3の段状曲輪	底部	丸底気味の平底，外器面は研磨され一部ススが付着している。内器面はアバタ状になり，一部条痕調整もみられる。	内→赤褐色 外→灰褐色	成川式	不良
35	帯曲輪4	甕，口縁	頸部から口縁部にかけて外反する。内外器面ともにヨコナデの調整痕がみられる。	内外→淡黄褐色	口径24.6	良好
36	帯曲輪7	甕，口縁	頸部から口縁部にかけて外反する。内外器面ともにヨコナデの調整痕がみられる。	内外→明茶褐色	口径23.9	良好
37	帯曲輪7	甕，口縁	頸部から口縁部にかけて外反する。内外器面ともにヨコナデの調整痕がみられる。	内外→明茶褐色	口径19.0	不良
38	第4郭	甕，口縁	頸部から口縁部にかけて外反する。口縁部には内外面ともヨコナデの調整痕が施され，頸部から胴部にかけて条痕調整面となる。	内外→黄褐色 内面に一部褐色の部アリ	口径19.9	良好
39	帯曲輪3の段状曲輪	甕，口縁	頸部から口縁部にかけて外反する。内外器面ともにヨコナデの調整痕がみられる。	内外→黄褐色		良好
40	帯曲輪4 帯曲輪3の段状曲輪	甕，口縁	頸部から口縁部にかけて外反する。内外器面にヨコナデの調整痕がみられ，共に赤色顔料が塗られている。	内外→赤褐色		良好
41	帯曲輪3	甕，口縁	頸部から口縁部にかけて外反する。内外器面にヨコナデの調整痕がみられる。外器面の一部にススが付着している。	内→赤褐色 外→褐色		不良
42	帯曲輪4	胴部	外器面は格子目のタタキによる器面調整がなされ，その上からタテナデの調整が施される。内器面は粗雑である。	内外面とも淡黄褐色		良好
43	帯曲輪4	胴部	外器面は格子目のタタキによる器面調整が成されている。内器面にはナデ調整が施され，下部に黒色の付着物がみられる。	内→黒褐色 外→赤褐色		不良

番号	出土位置	器種	特徴（文様と調整）	色調	法量(cm)	焼成
44		坏	内外面ともにヨコナデ調整。	内外→淡黄褐色 及び黒色	口径・底径・器高 12×1.9×3	良好
45	帯曲輪４	坏	内外面ともにヨコナデ調整。底は糸切りをされた後，ナデ消されている。	内外→黄褐色	口径・底径・器高 10×7×3.5	甘い
46	帯曲輪４	坏	内黒土器である。外器面はヨコナデ，内器面は研磨されている。	内→灰色 外→黄褐色	口径・底径・器高 12.6×4×7	良好
47	帯曲輪４	坏	内外面ともにヨコナデの器面，調整底は荒切りされ，ナデ消されている。	内外→淡黄褐色	底径 8.0	甘い
48	帯曲輪４	坏	内外面ともにヨコナデの器面調整。	内外→淡赤褐色	口径12.7	甘い
49	帯曲輪４	坏	外器面はヨコナデ，内器面はナデによる器面調整が施されている。底は糸切りされた後，ナデ消されたものと思われる。	内外→淡黄褐色	底径 6.2	甘い
50	帯曲輪４	坏	内外器面ともにヨコナデ調整。底はヘラ切り。	内→淡赤褐色 外→淡黄褐色	底径 6.5	良好
51	帯曲輪４	坏	内外器面ともにナデ調整，底は荒切り。外器面には一部褐色の面がみられる。	内→淡黄褐色 外→黄褐色	底径 6.0	甘い
52	帯曲輪７	坏	内外器面ともにヨコナデ調整，底は荒切りされた後，ナデられたものと思われる。	内外→黄褐色	底径 7.2	良好
53	帯曲輪７	坏	内外器面ともにナデ調整されている。底はナデられている。	内→淡赤褐色 外→灰褐色	底径 7.6	甘い
54	帯曲輪４	坏	内外器面ともにナデ調整されている。底はナデられている。	内外→黄褐色	底径 5.3	甘い
55	帯曲輪４	坏	外器面はヨコナデ，内器面はナデ調整されている。底はナデられている。	内外→赤褐色	底径 5.7	甘い
56	帯曲輪４	坏	内外面ともにナデ調整されている。底はナデられている。	内外→赤褐色	底径 6.4	甘い
57	第１郭，北区	坏	内外器面ともに淡黄褐色。	内外→黄褐色	底径 7.3	良好
58	帯曲輪７	坏	外器面はナデ，内器面はヨコナデの器面調整がみられる。	内外→赤褐色	底径 6.8	良好
59	帯曲輪４	坏	内外器面ともにヨコナデ，底は起こされた後，ナデられている。	内外→赤褐色	底径 6.5	良好
60	帯曲輪３の段状曲輪	坏	外器面はヨコナデ，内器面はナデ高台内部	内外→赤褐色	底径 6.6	甘い
61	帯曲輪７	坏	内外器面ともにナデ	内外→淡黄褐色	底径 5.6	甘い
62	帯曲輪４の段状曲輪	壺，口縁	内外器面ともにヨコナデ	内→灰白色 外→赤褐色	口径35.9	良好
63	帯曲輪４	甕，口縁	内外器面ともにヨコナデ	内外→灰色	口径16.0	甘い
64	帯曲輪４	甕，底部	内外器面ともにヨコナデ	内外→灰色	底径 7.5	良好
65	帯曲輪１	甕，胴部	外器面は格子目叩き文，内器面には同心円文の上に平行叩き文を施す。	内→灰黄褐色 外→明茶褐色		良好
66	帯曲輪７	甕，胴部	外器面は格子目叩き文，内器面には同心円文を施す。	内→暗灰色 外→灰茶褐色		良好
67	帯曲輪４	甕，胴部	外器面は格子目叩き文，内器面には同心円文を施す。	内外→灰褐色		良好
68	第１郭，北区	甕，胴部	外器面は格子目叩き文，内器面には同心円文を施す。	内→暗灰色 外→灰黄褐色		良好
69	帯曲輪４	甕，胴部	外器面は同心円文，内器面には格子目叩き文を施す。	内→赤褐色 外→灰黄褐色		良好
70	帯曲輪３の段状曲輪	甕，胴部	外器面は平行叩き文，内器面は同心円文を施す。	内→灰色 外→灰黒色		良好
71	第１郭	甕，胴部	外器面は格子目叩き文，内器面は同心円文，平行叩き文を施す。	内→暗灰色 外→灰黄褐色		良好
72	第１郭	甕，胴部	外器面は格子目叩き文，内器面には平行叩き文を施す。	内→暗灰色 外→灰黄褐色		良好
73		甕，胴部	外器面は格子目叩き文，内器面には平行叩き文を施す。	内→灰黄褐色 外→茶褐色		良好
74	第３郭，南区	坏	内外器面ともにヨコナデ，底は糸切り。	内外→赤褐色	口径・底径・器高 12×7.8×4.2	良好
75	第３郭，南区	坏	外器面はヨコナデ，内器面はナデ，底は糸切り，内器面に一部褐色部分がある。	内外→赤褐色	口径・底径・器高 10.7×7×3.4	良好
76	帯曲輪２の段状曲輪	坏	内外器面ともにヨコナデ，底は糸切り。	内外→淡赤褐色	底径 6.5	甘い

番号	出土位置	器種	特徴（文様と調整）	色調	法量(cm)	焼成
77	第3郭，南区	坏	内外器面ともにヨコナデ，底は糸切り。	内外→赤褐色	底径 7.3	甘い
78	第8郭	皿	内外器面ともにヨコナデ調整，底は荒切り。	内外→淡黄褐色	底径13.9	甘い
79	第1郭	皿	内外器面ともにナデ調整。	内外→灰褐色	底径 8.5	甘い
80	第3郭	皿	内外面ともにヨコナデ調整。底は糸切り，内外器面一部に褐色の部分がある。	内外→赤褐色	口径・底径・器高 7.8×6×2.7	良好
81	第4郭	皿	外器面はヨコナデ，内器面はナデ，底は糸切り。	内外→赤褐色	口径・底径・器高 8×6×2.2	良好
82	第1郭	皿	外器面はヨコナデ，内器面はナデ，底は糸切りを行った後，荒扱のもので起こされている。	内外→淡黄褐色	口径・底径・器高 7.3×5.7×1.2	良好
83		皿	内外器面ともにヨコナデ調整，底は糸切りをした後，ナデ消されている。	内外→淡黄褐色	口径・底径・器高 7×5.5×1.8	良好
84	第1郭	皿	内外器面ともにナデ調整，底は糸切りをした後，ナデ消されている。	内→淡赤色 外→淡黄褐色	口径・底径・器高 6.7×5.3×1.7	甘い
85	第1郭	皿	内外器面ともにナデ調整，底は糸切りをした後，ナデ消されている。	内外→淡黄褐色	口径・底径・器高 6.7×4.8×1.6	良好
86	第1郭，南区	皿	内外器面ともにヨコナデ調整，底は糸切り，内底中央部はもり上っている。	内外→淡黄褐色	底径 5.2	良好
87	第1郭	皿	内外器面ともにナデ調整，底は荒切り。	内外→淡黄褐色	口径・底径・器高 7.4×5.7×1.6	甘い
88	第1郭，北区	鉢	底部付近に一条の貼付突帯をもつ。内外器面ともにナデ調整されているが外器面はやや荒く，内器面は丁寧に仕上っている。厚手	内→灰黄褐色 外→淡黄褐色	口径35.2	甘い
89	第1郭，北区	大舎	口縁部は肥厚し，その直下に1本の貼付の突帯とX字状のスタンプ文がある。一条の突帯の下には縦位の浅線文をもつ。内器面・外器面共にヨコナデの器面調整が施されている。	内外→赤褐色	口径42.0	良好
90	第1郭，北区 帯曲輪7	大舎	口縁部は肥厚し，その直下に2本貼付の突帯とX字状のスタンプ文がある。外器面はヨコナデ，内器面は荒状のもので，斜位に調整され，その後ヨコナデの器面調整が施されている。	内→褐色 外→灰茶褐色	口径43.2	良好
91	第1郭，北区	大舎	肥厚する口縁部の直下にX字状のスタンプ文が施されている。外器面，内器面共にヨコナデの器面調整が施されている。	内外→赤褐色	口径25.0	良好
92	帯曲輪4		断面$\frac{1}{4}$円形の突帯を横位に廻す。その真下3cm程の断面三角形の突帯を縦位にすきまなくめぐらす。外器面はナデ，内器面は荒状のもので器面調整されている。	内外→灰黒色		甘い
93	第1郭，北区	大舎	断面$\frac{1}{4}$円形の突帯を横位に廻す。その真上に断面三角形の突帯を縦位にすきまなくめぐらす。外器面はナデ，内器面は荒状のもので器面調整されている。	内外→灰黒色		甘い
94	第1郭	大舎	断面半円形の突帯を横位に廻す。その真下に菱形のスタンプ文がある。外器面はヨコナデの器面調整が成されている。	内外→灰黒色		甘い
95	第1郭	大舎	一条の貼付突帯の下に縦位の浅線文がある。外器面はヨコナデの器面調整が施される。内器面はまず斜位に条痕調整され，さらにナデによる器面調整が加えられている。	内→褐色 外→灰茶褐色		良好
96	第1郭，北区	大舎	2本の断面半円形の突帯をもち，その間に菱形のスタンプ文がある。外器面はヨコナデの器面調整が成されている。	内外→灰黒色		甘い
97	第1郭	擂鉢	口縁部に注口がある。内外器面ともにナデ調整，内器面に数条の櫛目のかき上げを施す。	内外→黄褐色	口径30.5	甘い
98	第1郭，北区	擂鉢	内外面共にヨコナデが施されている。外器面は荒仕上げである。内器面には数条の櫛目のかき上げを施す。	内外→淡黄褐色	口径42.3	良好
99	第1郭，北区	擂鉢	内外面ともにナデによる器面調整が成されているが荒仕上げである。内器面には櫛目のかき上げを施してある。	内外→淡黄褐色	口径27.0	良好
100	第1郭，北区	擂鉢	内外面ともにナデによる器面調整が成されている。内器面では数条の櫛目のかき上げが見られる。	内外→淡黄褐色	口径23.0	良好

番号	出土位置	器種	特徴（文様と調整）	色調(胎土)	法量(cm)	焼成
101	第1郭	摺鉢	外器面は縦位に条痕調整された後，ナデ調整されている。内器面にはヨコナデ器面調整した後で，櫛条の櫛目のかきあげを施してある。	内外→黄褐色		甘い
102	第3郭	摺鉢	外器面の口縁部下に断面三角形の貼り付け突帯を有す。器面にはヨコナデ調整痕を施してあるが荒仕上げである。その器面には赤色顔料が塗られている。内器面はヨコナデの器面調整が成され，櫛目の櫛条のかき上げが見られる。	内→灰黄褐色 外→赤褐色	口径33.0	良好 堅い
103	第1郭	摺鉢	外器面はヨコナデによる器面調整が成されているが，荒仕上げである。内器面ではヨコナデの器面調整がなされ，消らかに仕上がり，櫛条の櫛目のかき上げが施されている。	内→灰黄褐色 外→赤褐色		良好 堅い
104	第1郭	摺鉢	内外器面ともにナデによる器面調整が成されている。内器面にはかき上げがみられる。	内外→黄褐色	底径15.0	甘い
105	第1郭	摺鉢	内外器面ともにヨコナデ，器面調整痕がみられる。	内→灰茶褐色 外→茶褐色	口径30.1	良好 堅い
106	第3郭	碗	直行する口縁部で，体部には浮き彫りされた蓮弁文を施す。光沢のある淡緑色の釉が施される。	灰　色	口径14.0	良好
107	第1郭	碗	端反りの口縁部から張らみをもった腰へと続く。高台は竹の櫛高台である。畳付と高台内部以外は薄手の灰色釉が施される。見込には一本の沈線がある。外面は荒調整痕が残る。	灰白色	口径16.1 底径 6.2 器高 6.1	良好
108	第1郭	碗	丸味をもった端反りの口縁部から張らみをもった腰へと続く。にぶい光沢をもったうすでの灰色釉は全体的に施されるが，見込中央のスタンプ文，高台外から畳付にかけて釉のかかっていない部分もある。外底中央部はやや張らみをもち釉が施される。貫入あり。	灰白色	口径14.2 底径 6.0 器高 6.4	不良
109	第3郭	碗	畳付，高台内部以外は薄手のくすんだ緑色の釉を施す。見込には一本の沈線がみられる。内外器面ともに荒調整痕が残る。細かい貫入あり。	灰白色	底径 6.4	良好
110	第5郭	碗	見込から高台内側にかけて，くすんだ緑色の釉が施される。外底は露胎である。細かい貫入あり。	赤褐色	底径 6.3	不良
111	第1郭，北区	碗	口縁部を「く」の字状に折り曲げてある。体部ではくずれた蓮弁文を確認できる。光沢のある厚手の青白色釉が施され，一部釉のかからない所あり。細かい貫入あり。	灰白色	口径12.1	良好
112	第4郭	碗	端反りの口縁部である。光沢のある薄手の淡灰色釉を施す。細かい貫入あり。	灰　色	口径14.9	不良
113	第1郭	碗	端反りの口縁部である。光沢のある灰色釉を施してある。貫入あり。	灰　色	口径16.1	良好
114	第4郭	碗	端反りの口縁部である。光沢のある灰色釉を施してある。貫入あり。	灰　色	口径13.1	良好
115	第1郭	碗	口縁部がやや肥厚する端反りの口縁部である。光沢のある灰色釉を施してある。貫入あり。	灰白色	口径15.9	良好
116	第1郭	碗	端反りの口縁部から張らみをもった腰へと続く。光沢のある灰色釉を施す。貫入あり。	灰　色	口径17.0	良好
117	第3郭	碗	肥厚した端反りの口縁部は，張らみをもつ腰へと続く。光沢のある灰色釉を施す。細かい貫入あり。	灰白色	口径14.2	良好
118	第1郭	碗	肥厚した口縁部は直行する。鈍い薄手の黄緑釉を施す。	灰白色	口径16.9	良好
119	第3郭	碗	端反りの口縁部である。光沢のある厚手の若草色の釉を施す。細かい貫入あり。	灰白色	口径14.8	良好
120	第1郭，南区	碗	見込みから高台内側にかけて光沢ある厚手の暗緑色釉が施される。外底中央部はやや張らみ，釉が施されている。	灰白色	底径 6.3	良好
121	第3郭，2ピット	碗	直行する口縁部から張らみをもつ腰へ続く。全体に光沢のある厚手の緑色釉が施される。一部に気泡がある。貫入あり。	白っぽい	口径15.0	良好

番号	出土位置	器種	特徴（文様と調整）	色調(磁胎)	法量(cm)	焼成
122	第1郭	碗	直行する口縁部である。全体に鈍い灰色釉を施す。細かい貫入あり。	灰白色	口径16.1	良好
123	第1郭	碗	直行する口縁部である。線描蓮弁文を有す。光沢のある若草色の釉を施す。	灰白色	口径15.6	良好
124	第1郭	碗	見込みから高台内側にかけて光沢のある灰手の緑色釉が施される。一部に気泡がみられる。貫入あり。	白っぽい	底径 7.0	良好
125	第1郭	碗	見込みから高台内側にかけて光沢のある黄褐色釉が施される。見込みには重ね焼きの後と釉が施された部あり。外底中央部はややもり上り釉が施される。高台脇にヘラ等による細線で表現された蓮弁文がある。	淡橙色	底径 4.4	良好
126	第1郭	碗	高台脇にヘラ等による細線で表現された蓮弁文。内底にはスタンプ文がある。見込みから高台内側にかけて若草色の釉が施される。外底中央部はややもり上り釉を施す。貫入あり。	白っぽい	底径 4.7	良好
127	第3郭	碗	光沢のある薄手のくすんだ緑色釉は見込みから高台外部にかけて施されており，内底高台はわずかにヘラ切りされている。畳付は露胎である。露胎部では施調整痕が確認される。	灰白色	底径 5.8	不良
128	第1郭	皿	口唇部は波をうち外反する。口縁内側に，数本の沈線があり光沢のある若草色の釉が施される。貫入あり。	灰　色	口径11.6	良好
129	第3郭	皿	口縁部は外反し，張らみをもつ腰へ続く。高台内側から内器面まで光沢のあるくすんだ緑色釉が施される。内底，外底は露胎であり，中央部に釉を施す。内底に重ね焼きの後あり。貫入あり。	灰　色	口径11.3 底径 6.0 器高 3.7	良好
130	第3郭，南区	皿	口縁部は外反し，張らみをもつ腰へ続く。高台内側から内器面まで光沢のある灰色を施す。内外底は露胎である。細い貫入あり。	灰白色	口径11.8 底径 6.4 器高 4.0	良好
131	第3郭，南区	皿	口縁部は外反し，張らみをもつ腰へ続く。外底以外に光沢のあるくすんだ緑色釉を施す。貫入あり。	灰白色	口径11.2 底径 5.8 器高 3.9	良好
132	第1郭	皿	肥厚した口縁部はやや外反し張らみをもつ腰へ続く。畳付から見込まで内外底を除く面に光沢のあるくすんだ緑色釉を施す。貫入あり。	灰白色	口径11.2 底径 6.6 器高 4.0	良好
133	第4郭	皿	口縁部は直行し，張らみのある腰へ続く。外底を除く面ににぶい光沢の青白色釉を施す。	灰白色	口径12.6 底径 8.2 器高 2.9	良好
134	第3郭	皿	畳付から内器面まで光沢のある淡緑色の釉を施す。露胎である内底中央部に釉があり，露胎部に施調整痕が残る。貫入あり。	灰白色	底径 6.0	良好
135	第1郭	皿	露胎である内底を除き，高台内側までにぶい光沢の淡緑色釉を施す。露胎部に施調整痕が残る。貫入あり。	灰白色	底径 5.9	良好
136	第1郭	碗	口縁部は内弯ぎみ。体部には幅の狭い線描蓮弁文を有す。光沢のある淡い緑色釉を施す。貫入あり。	灰白色	口径11.9	良好
137	第3郭	碗	腰に張らみをもつ青磁碗である。体部にヘラ等による細線の蓮弁文をもつ。光沢のある暗緑色釉を施す。貫入あり。	灰　色		良好
138	第1郭	碗	内弯気味の口縁である。内外の口縁部に界線をもつ。外面口縁部に文様を，腰部に芭蕉文を描く。気泡混りの光沢のある青白色の釉を施す。	白　色	口径13.9	良好
139	第4郭	碗	口縁部は内弯する。口縁部の内外に界線を施し体部に蝶をあしらった昆虫文を描く。薄手の白色釉がかかる。細かい貫入あり。	白　色	口径13.1	良好

番号	出土位置	器種	特徴（文様と調整）	色調(磁胎)	法量(cm)	焼成
140	第1郭，北区	碗	直行する口縁部である。口縁部内外に界線をもつ，外器面口縁部の2本の界線の間に雷文が施される。体部には草花文を描く。光沢のある青白色の釉を施す。	白色		良好
141	帯曲輪4	皿	畳付は露胎の蛇笏底である。体部には複数の界線をもち芭蕉文が施され，見込みの二重圏文中に沢潟文を描く光沢のある青白色釉を施す。	白色	底径 7.5	良好
142	第1郭，北区	碗	内弯気味の口縁部である。口縁部内外に界線をもち，体部には草花文が描かれる。光沢のある灰色釉がかかり一部に釉斑がある。	淡赤褐色	口径11.0	良好
143	帯曲輪3の段状曲輪	碗	口縁部は直行する。口縁部外面に界線を施し，体部では曲線，斜線による文様を描く。光沢のある青白色釉を施す。	白色	口径 9.5	良好
144	帯曲輪3	皿	口縁部は内弯する。内底は露胎でありその中央部はややもり上り，円形の渦文を描き釉が施される。内器面には曲線文が見られ，内底部，高台外から畳付にかけて露胎である。光沢のある白色釉が施される。	白色	底径 4.9	良好
145	第1郭，北区	碗	内底部には中央に施された釉と重ね焼きの後がみられる。見込に二重円圏線，体部に界線を施す。青白色釉は，内器面から高台外まで施釉され，高台，外面には釉斑がある。貫入あり。	白色	底径 5.2	良好
146	第1郭	皿	外反した口縁部は，張らみのある腰へと続く。口縁内外，高台付根に界線をもつ体部には，牡丹唐草文，見込みには二重円圏文中に玉取獅子を描く。畳付を除く全面に青白色釉が施される。外底には釉斑もある。	白色	口径11.6 底径 5.9 器高 2.5	良好
147	第1郭	皿	外反した口縁部は，張らみのある腰へと続く。口縁，内外，高台付根に界線を描く。体部には牡丹唐草文，見込みには二重円圏文中に玉取獅子が描かれる。高台外からは畳付を除く面に白色釉が施される。細かな貫入あり。	淡黄白色	口径12.1 底径 6.1 器高2.65	良好
148	第1郭	皿	外反した口縁部は，張らみのある腰へと続く。口縁内外，高台付根に界線を描く。体部には牡丹唐草文，見込みには二重円圏文中に玉取獅子が描かれる。高台外中間から畳付を除いて青白色釉が施される。	白色	口径13.2 底径 7.9 器高 3.1	良好
149	第1郭	皿	外反した口縁部は，張らみのある腰へと続く。口縁内外に一条の界線文，高台付根に二重界線文，界線をもつ体部には牡丹草文，見込みには二重円圏文中に玉取獅子を描く。畳付を除く全面に青白色釉が施される。一部に気泡がみられる。外底には釉斑もある。	白色	口径11.8 底径 6.3 器高 2.7	良好
150	第4郭	皿	外反した口縁部である。口縁内外に界線をもち，体部には唐草文を施す。	白色	口径12.1	良好
151	第1郭	皿	口縁部は内湾する。口縁内には界線があり，口縁外は二重線の間に連点文が描かれる。体部には芭蕉文が施される。畳付以外は釉が施され，一部釉斑がある。外底部中央は張らみをもつ。蛇笏底皿。	灰色に黄味を帯びる	口径10.4 底径 4.1 器高 3.5	良好
152	帯曲輪4	皿	器形はひずんでいる。内器面には円形文，連点文を，見込みには二重円圏文を描く。体部に2本の界線と高台外に二重界線，高台付根に1本の界線を設ける。畳付を除きうすでの青白色釉が施される。	灰白色	底径 7.3	良好

番号	出土位置	器種	特徴（文様と調整）	色調(磁胎)	法量(cm)	機成
153		盤	「く」の字口縁は張らみのある腰へと続く。口縁内部に設けられた2本の界線の間に文様を描き，見込みの二重円圏文中には花文が設けられている。うすでの青白色釉が施される。	白　色	口径13.5	良好
154	帯曲輪3の段状曲輪	盤	「く」の字口縁である。口縁内の界線上に渦巻文を描く。内底には花文が設けられる。薄手の青白釉が施される。	白　色	口径17.2	良好
164	第1郭	碗	端反りの口縁部で頸部がややくびれている。器面には調整痕があり，光沢のある薄手の黄白色釉を施す。細かな貫入あり。	黄味を帯びた灰色	口径16.1	良好
165		碗	腰に張らみをもつ底部である。薄手の黄白色の総釉で高台脇は荒削りの露胎である。細微貫入。	白　色		良好
166	第1郭	碗	端反の口縁部である。光沢のある薄手の黄白色の釉を施す。細微貫入。	白　色	口径11.9	良好
167	第1郭，北区	碗	高台脇から外底にかけて無釉である。畳付はやや削られている。外底は削り出しにより逆円錐状を呈し，その中心部に「上」という文字が記載される。高台脇から見込にかけて薄手の黄白色釉が施される。細かな貫入あり。	白　色	底径 6.0	良好
168	第1郭，北区	碗	内湾する口縁部である。縁に刻線を施す。薄手の灰色釉が施され釉垂れをみる。細かな貫入あり。	赤褐色	口径12.9	良好
169	帯曲輪3の段状曲輪	捷　利	口縁部は肥厚する。内外面ともに光沢のある黒緑色釉を施し，一部に釉斑あり。	灰黒色	口径5.85	良好
170	帯曲輪4	茶　家	頸部に半円形の穴をあけ楕円形状の盤を巻きその上の空部に蓋を取りつけるための円孔のある把手をつけ注口としている。褐色の総釉であるが完全にとけていない所もある。	赤褐色		良好
171		茶　家	胴部に径7mmほどの円孔を3ヶ所設け，そこに注口を付けてある。光沢のある褐色の釉を施す。	赤褐色		良好
172	帯曲輪4	茶　家	口縁部から体部にかけて薄手の褐色釉が施してある。	茶褐色	口径 6.5	良好
173	帯曲輪4	猪　口	体部にはヨコナデ調整痕がある。黄褐色の総釉であるが解けていない。	黄白色	底径 3.0	良好
174		茶　家	口頸部は露胎であり黒色の付着物がある。外耳面は，光沢のある暗緑色の施釉となる。細かい貫入あり。	赤褐色	口径 6.5	良好
175	帯曲輪4	甕	逆L字状の口縁部である。口頸部に露胎部があり，ヨコナデ調整痕を確認できる。器面にはつやのない褐色釉が施される。口頸部に重ね焼きの跡がみられる。	灰黒色	口径28.3	良好
176	第4郭	碗	外反気味の口縁部は頸部でくびれ，張らみをもつ胴部へと続く。内外器面ともに黒色釉が施される。	灰　色	口径14.1	良好
177	帯曲輪3の段状曲輪	碗	「く」の字形に外反する口縁部は張らみをもつ胴部へと続く。口縁部内側から腰部にかけて薄手の緑色釉が施される。細かい貫入あり。	灰　色	口径10.1	良好

6．その他の製品（第59図　155～163）

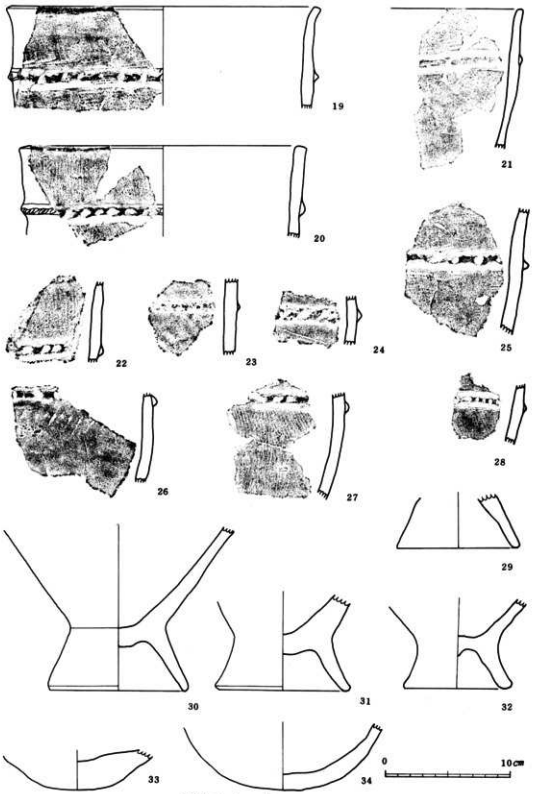
墨書土器**155**は，帯曲輪４から出土した坏の土師片である。胎土は微細質土で，ヨコナデの器面調整が成された外器面に「本」らしき文字の一部が逆に書かれてある。土錘**156**・**157**は，第３郭表層，内城の段状の曲輪より出土する。土師質に焼けた黄褐色の製品である。前者は，縦3.5cm・横1.8cm・後者は縦３cm・横1.4cmで，円柱状・楕円形状を成す完形品である。砥石は，第１郭表層より出土した。石は天草石である。四面ともかなり利用されたらしく，摩滅が著しい。端から中央へ大きく弯曲するカーブを描く。縦3.1cm・横12.5cm・高6.7cmを測る。鉄製品**159**・**160**・**161**・**162**・**163**は，内城の段状の曲輪より出土し，かなり腐食している。**159**は，現存長８cm・幅0.8cmを測る。胴部より上端へかけて弯曲し，著しく幅が広くなる。先端に向うに従い徐々に細くなる。断面は長方形で，上端・先端部は，途中で折れている。用途は不明である。**160**・**161**はＬ字状の大形の釘である。**160**は長さ10cmを測り，先端は折れている。先端は先細りで，断面は幅0.7cmの方形である。**161**は長さ8.5cmで，ほぼ**160**と同型である。他に小形の釘で現存長4.1cm・幅0.3cm程のものもある。**162**は現存長5.1cmを測る。先端から上端へゆるやかに弯曲し，上端部で張らみをもち，断面は幅0.5cmで方形に近い。上端・先端ともに折れている。用途は不明である。**163**は刀子である。現存長9.4cm・身の長さ2.9cm・幅0.3cmを測る。他にも鉄は出土しているが，現形をとどめていない。

7．古銭（第60図・第30表）

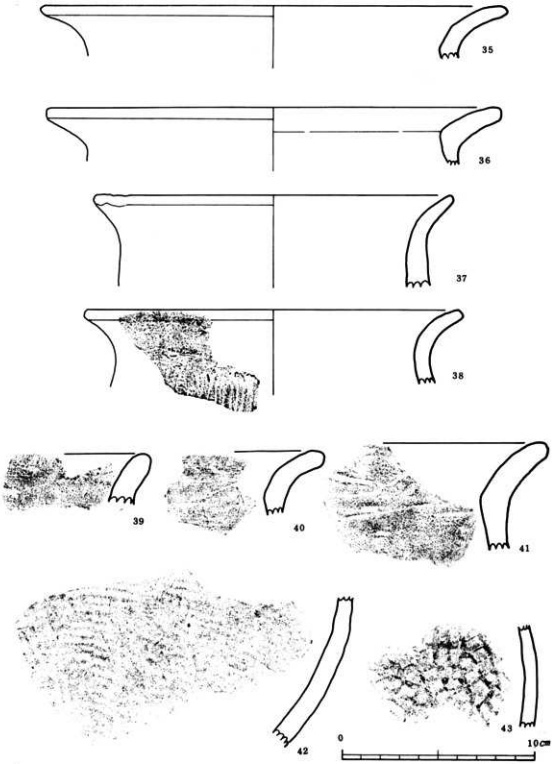
古銭は総計15枚出土した。第８郭通路上より天聖元宝１枚，帯曲輪３と帯曲輪４に挟まれた段状の曲輪の上段より咸淳元宝１枚・洪武通宝３枚・寛永通宝１枚・帯曲輪４より寛永通宝２枚，不詳７枚が出土した。古銭の出土状態に，これといった特徴はないが，帯曲輪４で２枚の鉄銭の間に４枚の銅銭が斜めに重なり合い銭穴に紐ズレのある銭が見られる。古銭は，銅銭・鉄銭の２種類である。銅銭は陽刻された文字等により，年代・鋳銭地を確認できるものもあるが，鉄銭は腐食が進み，それらを判断できるものはない。

第30表　古銭一覧

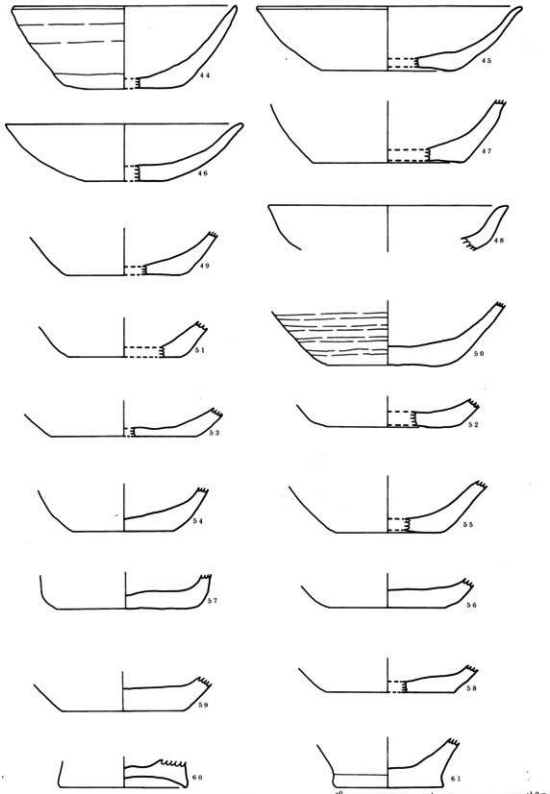
番号	出土曲輪	類	時代	古銭名	金属	初鋳造年　西暦	字体	径mm	備考
1	８郭(通路)	1	北宋	天聖元宝	銅	天聖年間　1023～1031	篆	2.49	腐食が進み読みとりにくい。背無
2	内城の段状の曲輪	2	南宋	咸淳元宝	銅	咸淳年間　1265～1272	楷	2.46	腐食が進み読みとりにくい。
3	＊	3	江戸	洪武通宝	銅	永樂、宣德、寛永13年　1368～1636	楷	2.34	背面に「私鋳銭」と文字が記されてある。
4	＊	3	不明	洪武通宝	銅	不明	楷	2.37	④⑤は重なり合っているため④の背面は確認できない。⑤は背面のみ確認でき，背に「他」らしき文字が記されてある。⑤は加治木銭（私鋳銭）である。
5	＊	3	江戸	洪武通宝	銅	永樂、宣德、寛永13年　1368～1636	楷	2.32	
6	帯曲輪４	4	＊	寛永通宝	銅	寛文年間、寛文８年　1668	楷	2.55	武蔵国江戸亀戸谷「鋳銭地」である。
7	内城の段状の曲輪	4	＊	寛永通宝	銅	慶安13～元禄１年　1636～1687	楷	2.47	背無
8	帯曲輪４	4	＊	寛永通宝	銅	＊	楷	2.47	背無
9	＊	5	不明	不明	銅	不明	不明	不明	鉄銭２枚の間に４枚の銅銭⑨～⑫が斜に重なっている。鉄銭の銭穴は円形・四角のもの各１点ずつである。
10	＊	5	＊	＊	銅	＊	＊	＊	
11	＊	5	＊	＊	銅	＊	＊	＊	
12	＊	5	＊	＊	銅	＊	＊	＊	
13	＊	6	＊	＊	鉄	＊	＊	2.42	
14	＊	6	＊	＊	鉄	＊	＊	不明	
15	＊	7	＊	＊	鉄	＊	＊	＊	半欠，腐食がかなり進んでいる。



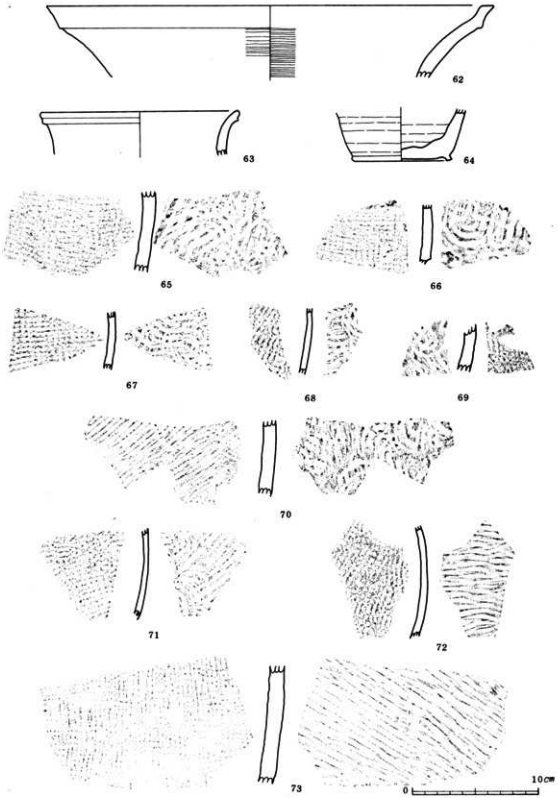
第47図 古 代 の 遺 物 (1)



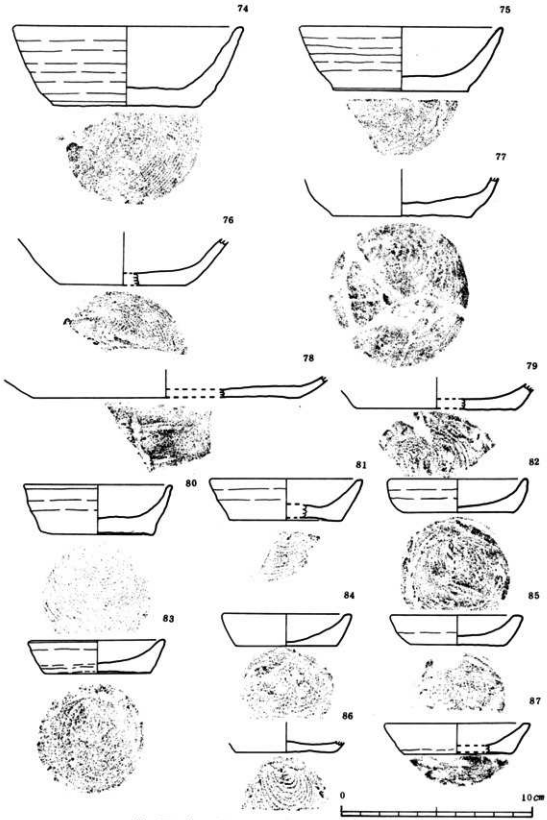
第48図 古 代 の 遺 物 (2)



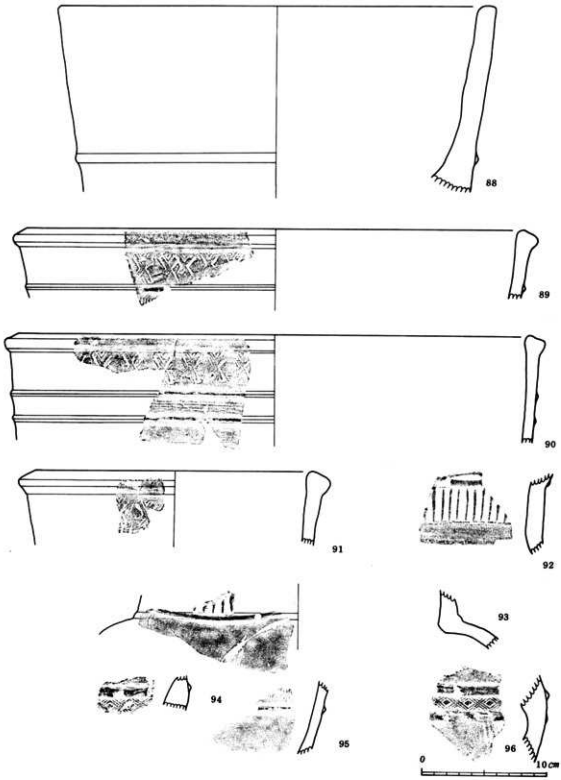
第49図 古 代 の 遺 物 (3)



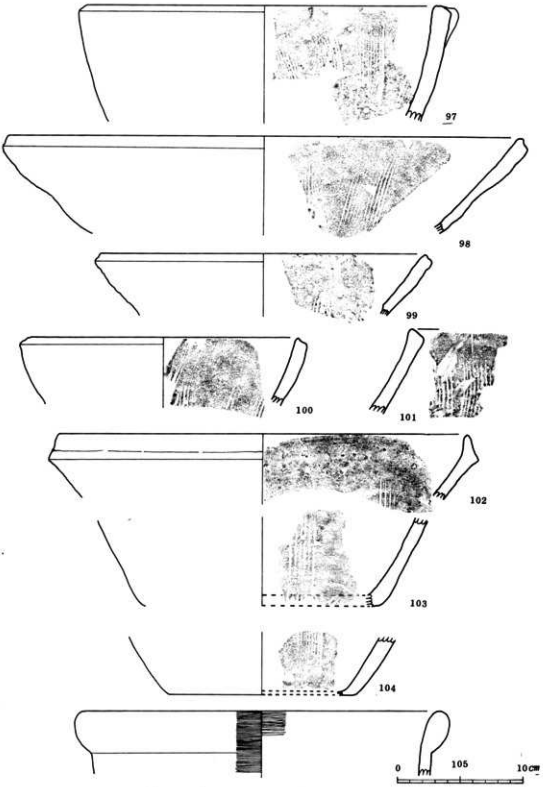
第50図 古 代 の 遺 物 (4)



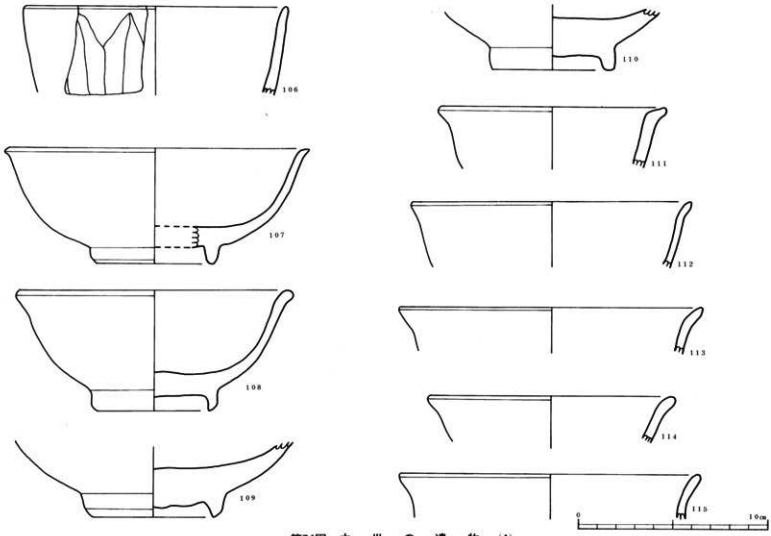
第51図 中 世 の 遺 物 (1)



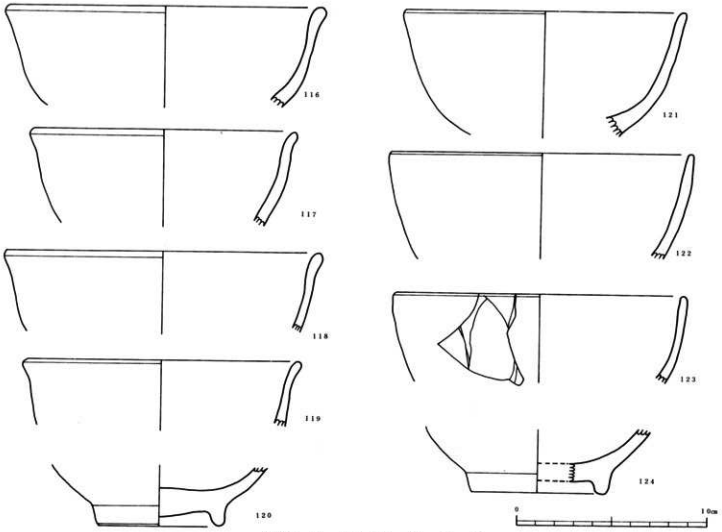
第52図 中 世 の 遺 物 (2)



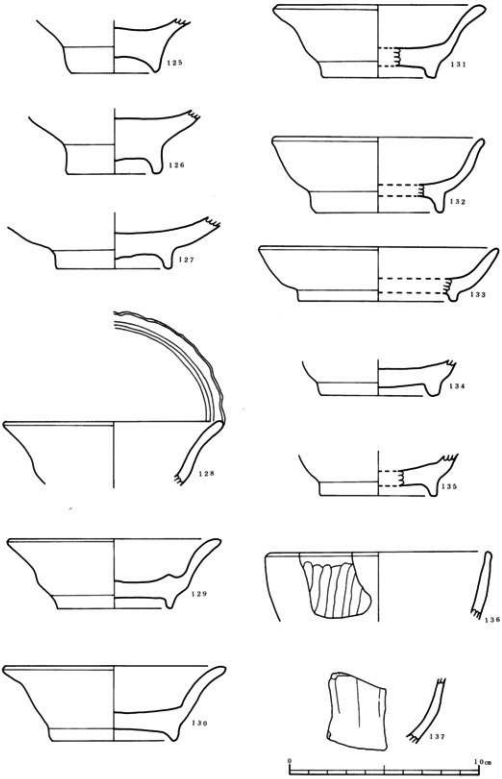
第53図 中 世 の 遺 物 (3)



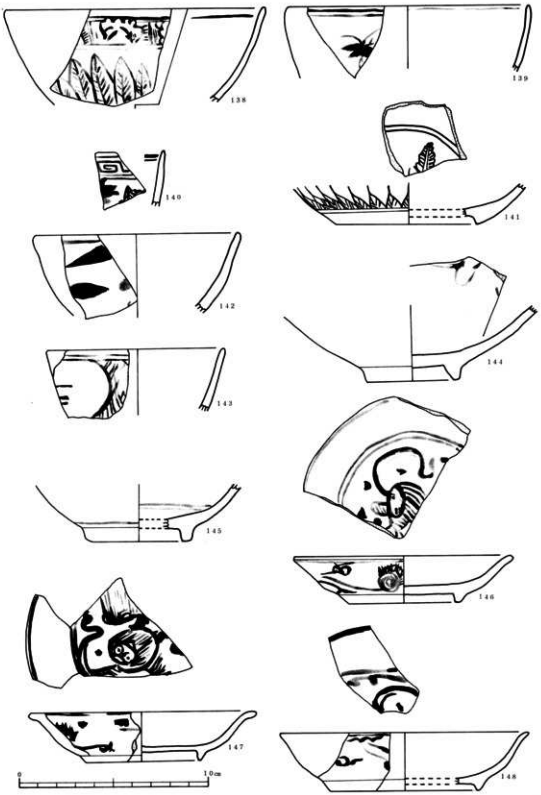
第54図 中 世 の 遺 物 (4)



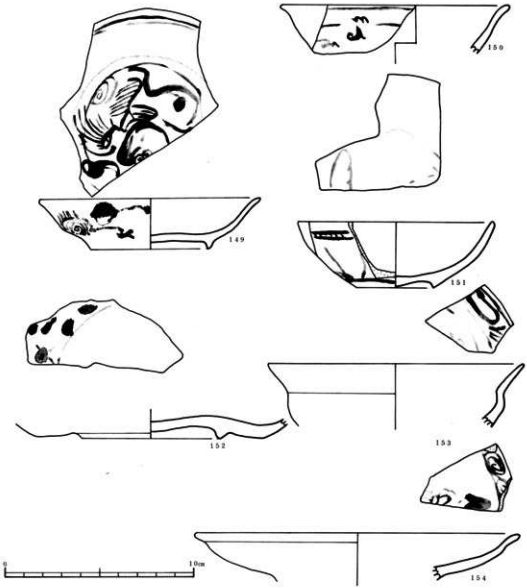
第55図 中 世 の 遺 物 (5)



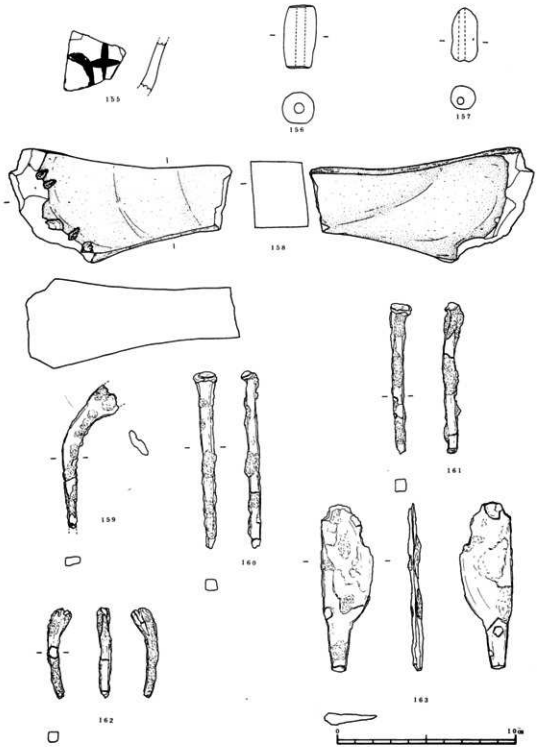
第56図 中 世 の 遺 物 (6)



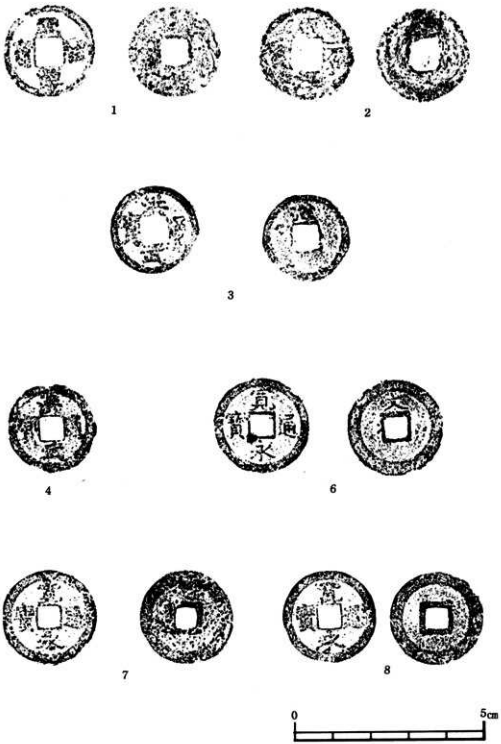
第57図 中 世 の 遺 物 (7)



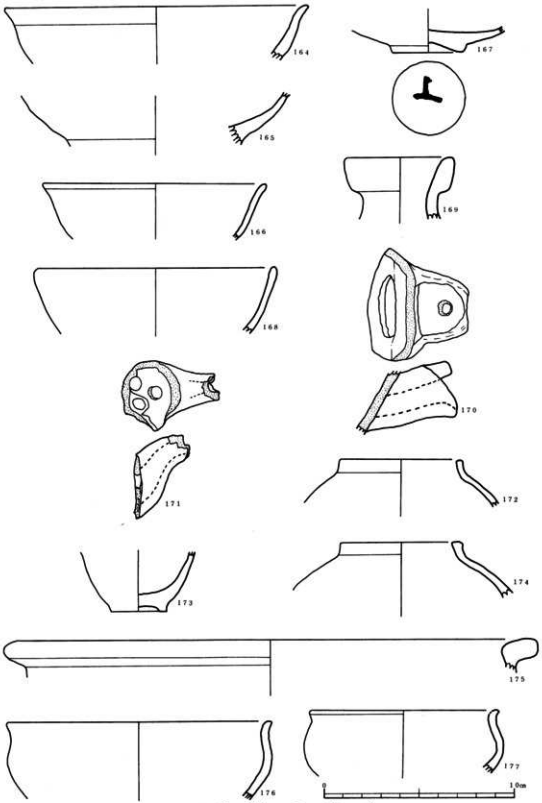
第58図 中 世 の 遺 物 (8)



第59図 中 世 の 遺 物 (9)



第60図 中 世 の 遺 物 (10)



第61図 近 世 の 遺 物

第Ⅴ章　まとめにかえて

苦辛城は文献的には大永７年（1527）～天文８年（1539）に登場する城で城主が平田宗秀である。位置に関する文献は谷山諸記や鹿児島県地誌もあるが本藩人物誌に「皇徳寺後ノ山ナリ」と記載されている。この山は現在外城・内城の通称名で呼ばれ，内城は小字名である。

この苦辛城は東側に永田川と湿地帯，南側に山之田川があり，西・北側は谷を境として山陵になり，自然の防備を考えている。この地域の小字は内城のほか大城戸・杉ノ馬場等城との関係がある地名も残っている。大城戸は城の入口を考えられる。西端にあたり前を南北に蛇行しながら流れている突出部にある。微高地で現在大城戸橋がかかっている。

また「牧田の墓」という記録が鹿児島県地誌に記載されている。これは小字名で牧田ケ宇都という所があり，南側の丘には土墓をもつ郭が２ケ所みられた。

苦辛城の縄張は郭15ケ所，堀20ケ所が主である。郭には土墓がみられ，郭を補助するため要曲輪，帯曲輪や段状の曲輪が各所にみられた。この苦辛城は連郭式山城であり，中心部は第１郭で最頂部にあたる。また各郭には各種の出入口がみられ，重要度にそった規模に造られていた。そして，この山城では通路が残っており，各郭や各曲輪の関連等が解明できた。

苦辛城の広さは420000㎡におよびその中で人工的な面（郭・曲輪・堀）は，その１割で42000㎡にあたる。もちろん牧田の墓も苦辛城の一郭にあたる。

遺構は堀立柱の建物が第１郭と第３郭に27棟検出され２時期の建物跡が確認された。他に，土壇・水溜遺構・竈等が検出した。

遺物は青磁・染付・土師器・摺鉢・火舎等が出土した。青磁は13世紀末～16世紀まであり，染付は16世紀であった。また古銭も出土している。

中世の遺物の他に旧石器時代の遺物や，縄文時代の遺物，奈良・平安時代の遺物が出土している。旧石器時代は確実な包含層で細石刃やブランク，スクレイパーが出土している。また小片であるが５～６点土器片も出土した。

縄文時代は包含層はなく，散布状況で表土に出土した。遺物は早期である。奈良・平安時代の遺物は土師器や須恵器，成川式土器片で谷の低いところで出土した。

以上の様に苦辛城跡の台地は旧石器時代から中世・近世までの生活跡がみられた。最後に山城の平時の館跡は，皇徳寺の上の段の俗称仮屋跡といわれる池のある所が有望視される。以前ここは平田氏の地番となっていた。

よってこの山城は自然の要害（川や崖や谷等）を利用した中世の連郭式山城で，その縄張や遺構・建物は中世末期のものが中心と考えられる。

参考文献　　日本城郭史　　鳥羽　正雄・大類　伸　昭和52年　雄山閣
日本城郭大系18　鹿児島県　三木　靖　昭和54年　新人物往来社

苦辛城跡全景（真上より）

苦辛城跡全景（南より）

図版2

第1郭全景（真上より）

第1郭全景（西より）

第2郭・第3郭・第4郭全景（真上より）

第3郭全景（西より）

図版4

第5郭・第6郭・帯曲輪・水ノ手全景

第11郭・第12郭・第13郭全景

図版5

第1郭建物13全景

第1郭建物12全景

図版6

第1郭建物16全景

第1郭建物17・18全景

図版7

第1郭中央出入口遠景

第1郭中央出入口近景（南区より）

図版 8

第 1 郭中央出入口（北区より）

第 1 郭中央出入口（外耕形より）

図版 9

第 1 郭西北角出入口（上より）

第 1 郭西北角出入口（下より）

第 3 郭 建 物 跡 全 景

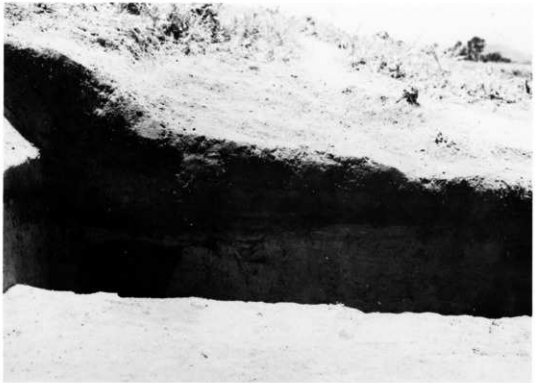
第 3 郭 竈

堀 1 遠 景

堀 1 近 景

図版12

堀 1 断 面



第 1 帯 曲 輪 断 面

堀　3

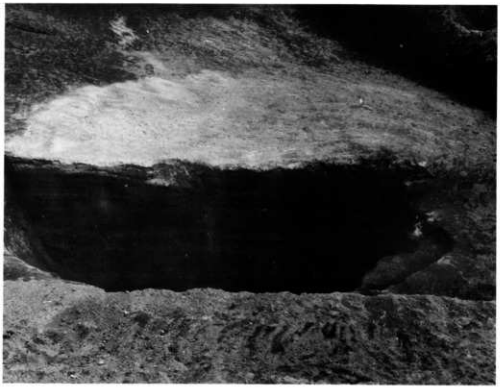
堀　9

堀　8

堀　2

図版15

水溜遺構（水ノ手）



水溜遺構断面

図版16

水溜遺構（高子小僧）

旧石器時代の遺物出土状況

図版17

石器出土状況（旧石器時代）

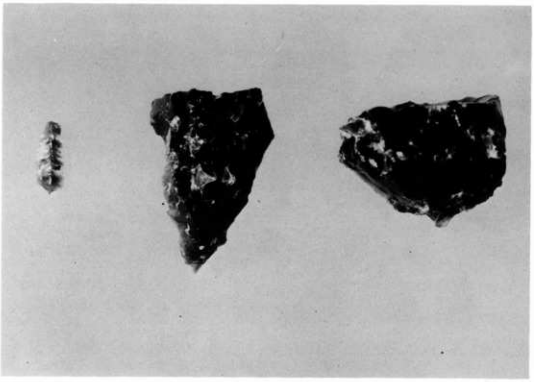
石核出土状況（旧石器時代）

図版18

苦辛城跡調査前全景（南より）

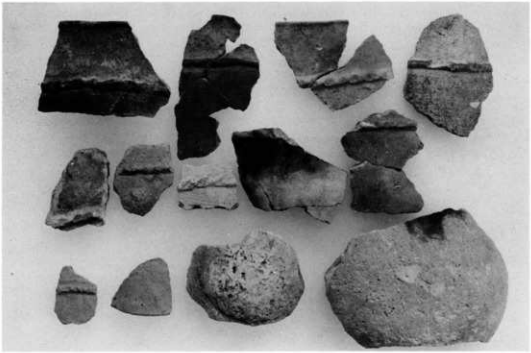
苦辛城跡調査前全景（北より）

図版19



旧石器時代の遺物

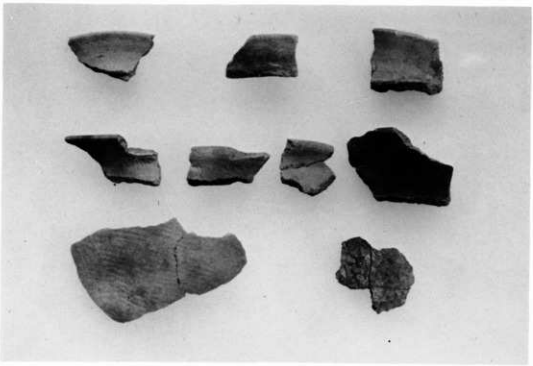
縄文時代の遺物



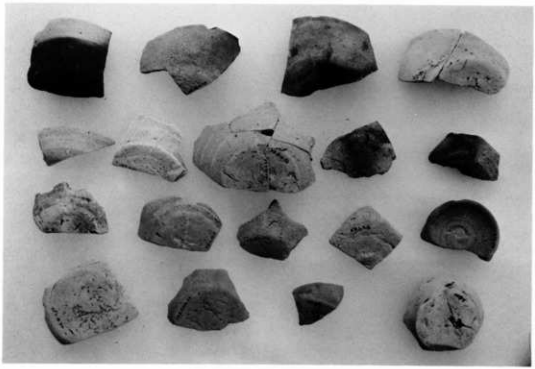
古　代　の　遺　物

古　代　の　遺　物

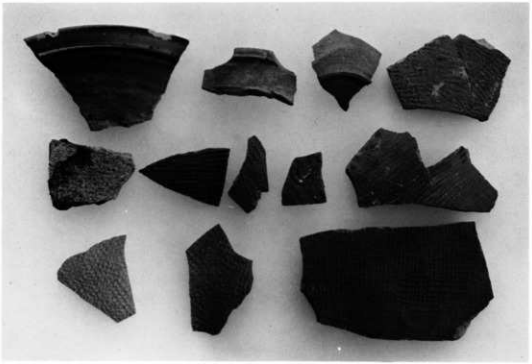
図版21



古　代　の　遺　物



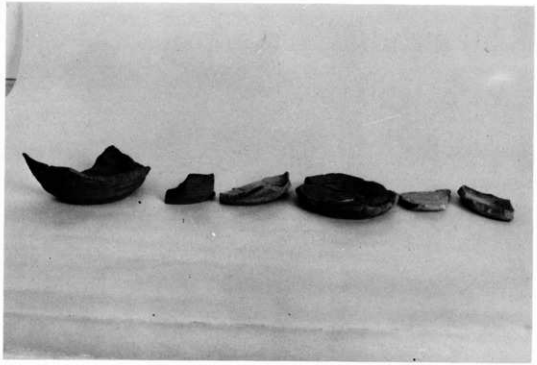
古　代　の　遺　物



古　代　の　遺　物

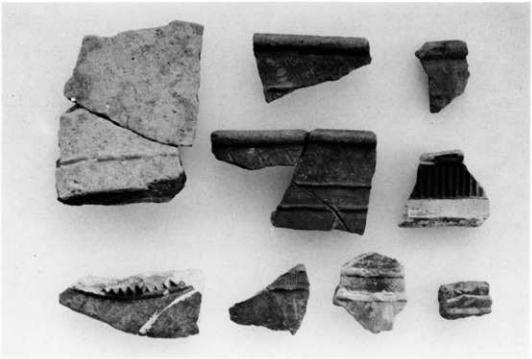
中　世　の　遺　物

図版23



中　世　の　遺　物

中　世　の　遺　物

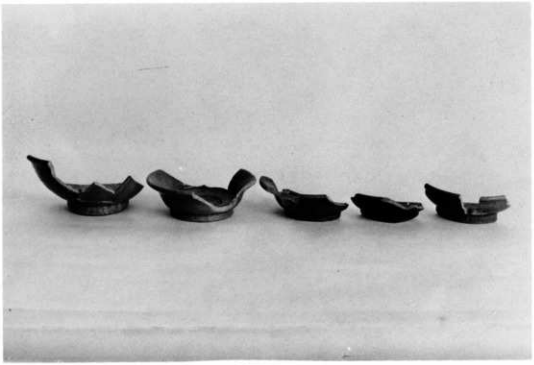


中　世　の　遺　物

中　世　の　遺　物

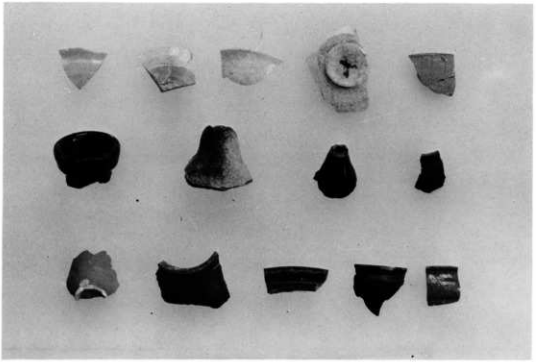
中　世　の　遺　物

中　世　の　遺　物

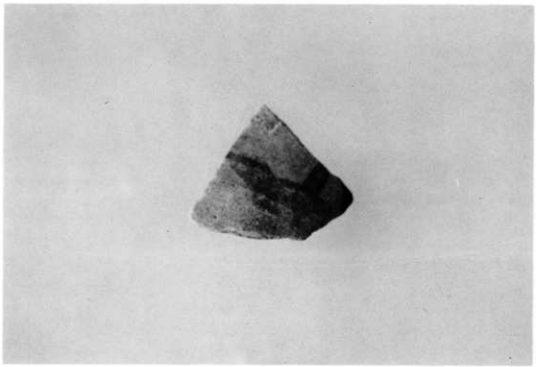


中　世　の　遺　物

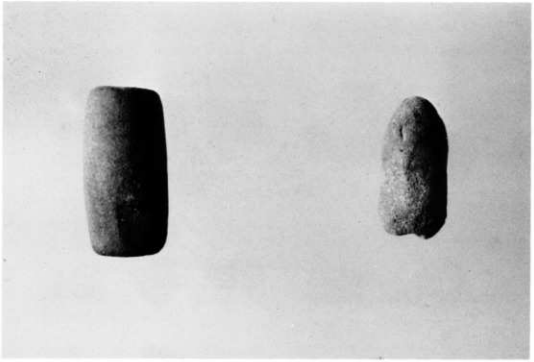
中　世　の　遺　物



近　世　の　遺　物



図版28



土　　垂

と　　石

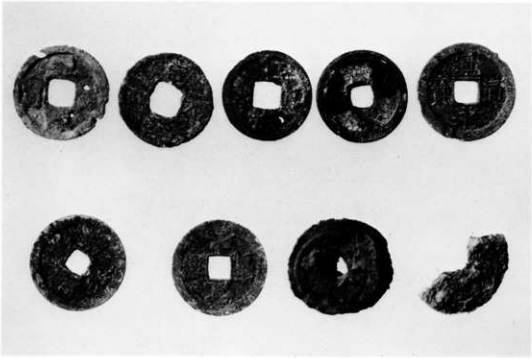
谷山郡山田と苦辛城

―史料にみる苦辛城―

三　木　　靖

図版29

鉄　製　品



古　　銭

1　地名「くらら」

(一)

まず，中世の地名「くらら」関係史料をとりあげ，その地域と名辞の変遷について検討したい。

〔1〕

「谷山皇徳寺文書」につぎの文書がある。

(ア)　「皇徳寺領　　在所山田内

在判「好久」

桑迫井上薗1ケ所　同前田1町2反　岩瀬戸2反　河原田冊　榎田8反　門前3反

新寄進

中村内

砂町1町

合3町2反

山野さかい

東ハ岩瀬戸の田のしもなわてより西田のうしろ山のほりのとをり

南ハ門のほりのミそのとをり

西ハたたらのうとのほり，くらららの尾たてのとをり

北ハ巻田のうとの山のお峯のとおり，岩瀬戸田の下なわてまてなり

比内ハ寺山也

御判「熙久」　」

(イ)「皇徳寺寺領　　在所山田内

(花押)「久豊」

(花押)「用久」

桑迫井上薗1ケ所　同前田1町2反　岩瀬戸2反　河原田冊　榎田4反　門前3反

新寄進

中村内

砂町1町

合3町2反

山野さかい

東ハ岩瀬戸の田のしもなわてより西田のうしろの山のほりのとをり

南ハ門のほりのミそのとをり

西ハたたらのうとのほり，くらららの尾たてのとをり

北は巻田のうとの山のお峯のとをり，岩瀬戸田の下なわてまてなり

比内ハ寺山也

(花押)「久豊」

「裏判」　（花押）
「 同 」　（花押）

(ア)・(イ)の文書に「くらら」の文字がみえる。本文書は，皇徳寺領の所領目録とその寺山の範囲を示すためであろうか年月日の記載がみえない。そこでまず作製年次について考えたい。

(ア)は，島津藩の史書編集にあたった伊地知季安・季通の編になる「旧記雑録」に掲載されたもの（鹿児島県維新史料編さん所編『鹿児島県史料・旧記雑録前編２』の 131 頁より 132 頁にかけての№ 453 ）で，編者はこの文書の前後に至徳４年（1387）の文書を置いているから，その年次は至徳４年とみなしていることになる。

さらにこの文書に関連をもつ皇徳寺文書をみると，当文書に見える桑迫井上薗・同前田・岩瀬戸・河原田は至徳元年（1384）10月忠信により皇徳寺へ寄進され（前掲書 126 頁，№428），砂町は至徳４年（1387）忠信により同寺へ寄進されているので（前掲書 131 頁，№452），至徳４年より以後でそれ程時を経ていない時期と考えられる。

また，明徳３年（1392）10月７日の皇徳寺文書に当文書に署名している好久と照久が別の２人と共に署名しており，それに「皇徳寺領田薗等事注文在別紙」すなわち皇徳寺領の所領目録は別紙に書いてあるとしてある。ここにいう別紙の注文（目録）という標題と，当文書の内容とは完全に対応しているのである。

なお，明徳３年（1392）10月７日の文書に「先例の如く」とあるので，至徳４年（1387）よりは後で，しかも明徳３年（1392）10月７日以前とみることもできる。

(イ)は前掲書(298頁から299頁にかけての№ 956 ）前後に応永24年(1417)の文書が置かれているので，その年次は応永24年（1417）とみなされていることになる。

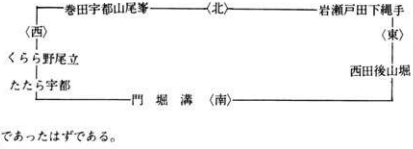
この文書は，(ア)のように他の文書よりその年次を考える手懸をえられないが，寺領の田積を書いているという点で同一内容をもつ文書（前掲書 299 頁，№ 957 ）と対になる文書（前掲書 299 頁，№ 958 ）（前文書が公事免の田積であることを示しているのに，後文書は公事の負担がある田積であることを示している）に応永24年（1417）とあることからその年次が考えられたものである。

なお，参考までに(ア)・(イ)の田積についていえば，前記の至徳元年（1384）10月の寄進状（前掲書 126 頁，№ 428 ）及び寺田注文（前掲書 299 頁，№ 957 ）を見ると分かるように，(ア)の岩瀬戸２反は２反10，桜田８反は４反がそれぞれ正しく，(イ)の岩瀬戸２反は２反10が正しい。

つぎに(ア)と(イ)の皇徳寺の寺山の範囲を示す堺線について検討しよう。まず書かれている内容を北を上に取って図にしたのが第１図である。書かれている個有名詞と思われるものに一部漢字をあて，「より」「まで」「とをり」「の」などを省いてある。

この堺線に囲まれた内部が皇徳寺の寺山すなわち境内であり，この堺線は当時の通例によると自然地形上，目立っている所が選ばれているので，ここでも地形的には際立って見

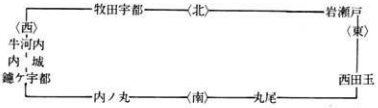
第　1　図



える所であったはずである。

ところで現在鹿児島市山田町に，一般に皇徳寺と呼びならわされている地域がある。その地域の小字地名を鹿児島市役所市民局谷山支所市民税務課の御好意で見た「鹿児島市山田町地籍図」と皇徳寺ＮＴ建設工事共同企業体の御好意で見た「トデック製作寄せ字図」とにより収集したのが第２図である。この図は第１図に対応させるため，関連する小字地名の位置関係のみを示したものである。

第　2　図



第１図と第２図とを比らべて見ると，東と北の交点にあたる地点に岩瀬戸の地名があり，東の堺線上に西田の名称があることで共通していることが分かる。また，西の堺線上に前者で「たたら宇都」があり，後者で「鏈ケ宇都」(たたらがうとと発音する）があり，北の堺線上に前者で「巻田宇都」があり，後者で「牧田宇都」(まきたがうとと発音する）があり，発音上共通するものがある。

この対応関係によって第１図と第２図とはほぼ同位置を示しているものと考えることが可能となる。それでは，以上はっきりと共通する４か所以外はどうみられるのか。

南の堺線の現行小字地名内ノ丸と丸尾の付近は，地元の通称は門前である。第１図の門の堀の溝の「門」と共通している。ここは小字地名とは対応しないが通称地名と第１図のものとのとが対応するのである。また，この内ノ丸付近を通過している道路の南側部分の水田となっている所はかつて小川（水路）であったと内ノ丸に居住の川原繰氏の話であり，この小川（水路）が第１図の門の堀の溝の「堀の溝」とつながりがあると考えてよい。したがって，南の堺線の門の堀の溝と内ノ丸・丸尾は発音上でも地名上でも関連はないが，実際的には対応関係があるとみられる。

西の堺線の現行小字地名は内域（うっじょう）と牛河内（うしかわうち）とである。この小字地名内域の現地をみるとその地勢は西向きの傾斜であり，牛河内は東向きの傾斜地

であって頂点となる地点は内城に含まれている。堺線は先に述べた通り地形的に際立っている所を通しているものであるから内城に含まれている頂点となる地点が選ばれたと思われる。第1図のくららの尾立という表現も地勢上頂点地域を意味しているとみられ，前者はそれにふさわしい。したがって西の堺線のくらら野の尾立と内城・牛河内は発音上でも地名上でも関連はないが，実際的には対応関係があるとみられる。

皇徳寺は，弘和3年（1383）没した懐良親王の位碑を安置した曹洞宗総持寺の末寺で，明治2年（1869）廃寺となった（『谷山市史』）。その関係遺跡は（黒木弥千代「皇徳寺跡」鹿児島市教育委員会『鹿児島市文化財調査報告書第3集』）すべて第2図の範囲内にある。この範囲は第1図に示した(ア)と(イ)にみえる皇徳寺の寺山の範囲と完全に一致している。これは，至徳4年（1387）頃から応永24年（1417）頃にかけての皇徳寺の寺山が，明治2年（1869）の同寺境内とほぼ範囲を同じくしていたことを意味している。

以上より，谷山皇徳寺の文書(ア)・(イ)に見える地名「くらら」は14世紀末から15世紀初頭の現状を反映しており，鹿児島市山田町の小字内城，または内城の一部，または内城とその隣接小字の付近に現地比定されるものであると結論することができる。

〔2〕

天文8年（1539）3月13日または14日に，島津実久方と島津貴久方との間で行われた谷山合戦についての7点の史料がある。その内容の検討は後で行なうので省略し，ここでは地名「くらら」に関係する文字のみとりあげるので，それについて整理すると次のようになる。

記号	記載	典拠	頁	No
(ウ)	苦辛城	『津国史』巻之16	768	2339
(エ)	苦辛城	「蓑輪伊賀覚書」	772	2345
(オ)	苦辛城	「貴久公記」	772	2346
(カ)	倉良	「樺山善久玄佐日記」	773	2348
(キ)	苦辛城	「貴久公御譜」	774	2350
(ク)	蔵良之城	「忠房臣伊集院某書出」	776	2356
(ケ)	鞍良之城	「忠房臣伊集院某書出」	776	2358

この7点は『鹿児島県史料・旧記雑録前編2』に掲載されているので，その頁とNoとを示してある。

この整理により「くらら」について見ると，すべて漢字で表記されており，苦辛が(ウ)・(エ)・(オ)・(キ)の4点，倉良が(カ)の1点，蔵良が(ク)の1点，鞍良が(ケ)の1点となり，4種の表記方法があった。このうち，苦辛は読みにくいためか，「クララ」「久良良」とふりがなの付けられているものがある。この4種の表記方法の性格をみるため，それぞれの出典史料の成立事情とその時点についてまとめていきたい。

(ウ)の『島津国史』は，島津家の正史に相当し，島津斉興の命により山本伝蔵正誼が享和

2年（1802）に編纂したものである。本書は「新編島津氏正統系図」「続編島津氏正統系図」「島津支流系図」「島津世家」などをもとにしながら儒教的名分論を強く打ちだしている。したがって島津氏の歴代についての島津家で編集したものとは不離不即の関連があり，(オ)の貴久公記や(キ)の貴久公御譜とも密接なつながりがあったものと思われる。しかも本書の成立は天文8年（1539）当時より263年後であり，さらに本書はどの項も出典を記しているが，本項には(カ)の樺山善久玄佐日記によったとの注記もあるので，天文8年(1539)当時の地名表記の史料としては間接的なものとみなければならない。

これに対し(エ)の要輪伊賀覚書，(カ)の樺山善久玄佐日記，(ク)・(ケ)の伊集院某書出は，それぞれ当時の経験を後年自から書き出したものと思われ，天文8年（1539）当時の地名表記の史料としては価値があるものとしなければならない。また，伊集院某書出は(ク)・(ケ)と2回引用されているが，同一書でありながら蔵良と鞍良の2種の表記をしている。

史料の成立事情と性格についてまとめをもとにすると，くららの漢字表記としては単純な数の多きでは苦辛が多いけれども，当時すなわち天文8年（1539）の漢字表記は苦辛・倉良・蔵良・鞍良があったとするべきであろう。そして，その4種には優劣はなかったのであり，(ク)・(ケ)のように同一史料でも異なる表記がありえたのである。

以上により，天文8年（1539）当時くららは地名として存在はしていたが，発音が先行しており，漢字表記はまちまちで固定的ではなかったことが分かる。当然のことではあるが，この結論が正しければ，くららの漢字表記は前述の4種のみであるということは正しくないのであり，他の漢字が用いられた可能性がある。

〔3〕

以上中世の地名「くらら」関係史料をとりあげての検討である。検討を要約すると次のごとくなる。

(1) 中世の地名「くらら」関係史料として検討したものは9点であるが，中世の地名に関して価値をもつのは5点である。

(2) 地名「くらら」は至徳4年（1387）頃から応永24年（1417）頃にかけてくらら野の尾立として見えるのと，天文8年（1539）にくらら城として見えるのとある。すなわち14世紀末から15世紀初期と，16世紀中期の2回の時点である。

(3) 地名「くらら」は至徳4年（1387）頃が初見で，「くらら」野の尾立を皇徳寺の寺山の西の堺線が通っていた。

(4) 地名「くらら」は天文8年（1539）が最後で「くらら」城があった。「くらら」は漢字で表記される際，苦辛・倉良・蔵良・鞍良などいろいろで固定していなかった。ひらがなで表記されることもあった。

(5) 中世の地名「くらら」は，現在の鹿児島市山田町の小字内城とその付近の地域を指していた。

(二)

つぎに「くらら」について近世に入って作製された史料を検討してみよう。

まず，関係史料をあげる。すでに述べた(ウ)の『島津国史』

「(天文８年) ３月13日，公敗島津実久軍於紫原，多斬獲。(拠大中公旧譜，黄套軍記，樺山玄佐自記。旧譜，軍記並云，谷山紫原之戦多斬獲。自記撃谷山軍於紫原，多斬獲。今従之。谷山軍即実久軍也。) 苦辛城主平田式部少輔宗秀。(玄佐自記作備中守。拠平田監物系図。宗秀初称式部少輔，後改備中守。) 因伊集院忠朗，乞降，迎 公入城 公遣兵衆戍谷山本城。(同上。苦辛城遺墟在谷山地頭館西北一里有余，係山田村。苦辛読曰久良良。拠公遣兵衆戍谷山本城，則本城已下矣。樺山玄佐自記則曰，且舎谷山本城，向神前城，与此不同。)」(『鹿児島県史料，旧記雑録前編２』768頁，№2339)

同じく(オ)の「貴久公記」

「一天文８年已亥３月13日，谷山紫原之軍ニ敵余多討取，然者翌日平田式部少輔苦辛之城ヘ貴久様ヲ被申請，次日本城ヘ番衆被籠」(『鹿児島県史料，旧記雑録前編２』772頁，№2346)

また，(キ)の「貴久公御譜」

「天文８年已亥３月13日，於谷山紫原遂一戦，討殺数多逆侍，而当都入貴久之手裏，翌日，平田式部少輔請待貴久於苦辛城，故往其地，而明日入守辛於本城」(『鹿児島県史料，旧記雑録前編２』774頁，№2350)

(コ)「西藩野史」

「(天文) ８年已亥

○春３月，日新公貴久公谷山ヲ定ム先是実久谷山ヲ掠取リ神前城ヲ（一説和田城トモ云和田ニアリ）谷山駿河守伊集院山城守松崎丹後守河野太郎左衛門（通能）苦辛（くら）城ヲ（皇徳寺ノ西ニアリ）平田式部少輔ニ守ラシム。日新公谷山ヲ復センコトヲ謀リ河野ガ弟和泉守通吉（日新公ノ近臣）ニ命シテ通能ニ通セシム通能密ニ命ヲ奉シ神前城ヲ陥テ公ノ軍ヲ納ン事ヲ謀ル発覚ス実久通能ヲシテ城中ニ自殺セシム（伝云邑人通能ヲ十一面観音トス石像今ニ存ス坂ノ下ニアリ邑人ノ云古ハ城ノ西ノ原ニアリ野火其所ヲ焼クユヘニ爰ニ堂ヲ移ス石像破損ス木像ヲ以テコレニ代フト石像モ亦堂内ニ納ム家ノ伝記ヲ考フルニ通能勝久公ノ命ニ由テコノ城ニアリ弟通吉，日新公ニ近侍スユヘニ疑ハレテ勝久公自刃ヲ賜フ子アリ伊勢松丸ト云トキニ九歳家人抱キ云テ通吉ニヨル　日新公ニツカヘ名ヲ又九郎ト賜フ後ニ筑後通泰ト云フ天正14年筑前国岩屋城ニ戦死ス）今年実久谷山ニアリ貴久公鹿児島ニ入紫原ニ軍ス（３月13日）実久麾ヒ至ル　公親ラ先登シ軍ヲ督シテ是ト戦フ実久敗走スル平田式部少輔実久ニ背キ密ニ　公ニ通ス　公苦辛城ニ入ル（３月14日）兵ヲ本城（慈現寺ノ北ニ在リ）ニ屯シテ神前城ヲ攻メントス谷山駿河守等ノ三将風ヲ臨テ降ル（３月24日）」(『新薩藩叢書，第２巻』西藩野史巻11，180～181頁)

(サ)『本藩人物誌』

「一平田備中守宗秀（右京亮式部少輔民部少輔トモ，子孫平田強太郎「又ハ強之助」)

○安房介宗知子ナリ（平田２世美濃守重宗２男民部少輔宗保其子右京亮重頼其子宗知ナリ「法号悦山加世田竜徳院ニ葬ル」）○谷山山田苦辛（クララ）城主也薩州家ヨリノ川辺地頭トアリ父代ヨリ谷山山田致領知居城苦辛城（皇徳寺後ノ山ナリ）島津実久江致随身居候処天文８年「３月３日」紫原合戦翌日　貴久公ヲ苦辛城江申請「伊集院忠朗ヲ頼ミ」降参仕リ次日本城ヘ番兵ヲ被籠10日余ニシテ神前城入御手候

○宗秀ハ実久講代ノ家臣ナリ然ニ　日新公ヨリ御味方ニ於罷成ハ被召仕候女房ノ娘ヲ嫁シ片腕ノ御頼可被成ノ旨再三密々ニ以縢状雖被仰越承引不致然処此段薩州家ヘ相聞得成敗可有之ト内々其手当有之風聞ニ付宗秀其難ヲ遁レン為参上シ公ヲ城ヘ奉申請ナリ天文23年10月12日於岩剣戦死」（鹿児島県史料15『本藩人物誌』巻之12，219頁）

(シ)「平田監物家由緒書」

「宗保四代之孫式部少輔宗秀事ハ島津実久ニ属谷山之内山田を領苦辛城ニ罷居候処ニ天文８年３月13日太守貴久公於谷山紫原実久方と被遂御一戦被得御勝利谷山御手ニ入候故右式部少輔降参仕貴久公を苦辛城ニ奉請候儀相見得申候其後23年岩剣御合戦之節致戦死候由自家之系図ニ記置申候」（「諸家由緒書」）

(ス)『谷山諸記』

「山田村之内　一，苦辛城　高サ六拾間余横拾弐間流五拾三間，右城主平田式部少輔ト申伝候地頭仮屋ヨリ亥ノ方壱里程」（谷山郷土誌資料集(二)『谷山諸記』４頁）

(セ)『三国名勝図会』

「（谷山）本城　（中略）天文８年３月13日（中略）当邑苦辛城主平田式部少輔宗秀降を乞ひ，公を迎ふ，公其城に入り，兵を遣して当（谷山本）城を戍らしむ。（中略）城砦沿記　苦辛城　山田村にあり，大永７年，島津実久当村を掠取り，平田宗秀をして当城を守らしむ，天文８年，宗秀　大中公に降る」（『三国名勝図会』巻之19，三巻本上巻340頁）

この史料の性格について順にみていこう。(ウ)・(オ)・(キ)は前述したので省き，(コ)は宝暦10年（1760）の序文がある得納通昭の島津氏初代から宝暦５年（1755）までの編年史書で，民間の歴史を交えているので『島津国史』と対照されたものであり，(サ)は幕末に島津藩の手で編集された，主に戦国・織豊期の島津氏関係の武将の略歴辞典であり，(シ)は幕末に島津藩が編集した島津氏関係の武将家の由緒書の集成であり，(ス)は幕末谷山郷関係者の手で整理された谷山の地誌であり，(セ)は天保14年（1843）島津斉興の命で五代秀堯が総裁となり編集した島津藩の地誌である。すなわち(ウ)と(コ)は島津氏関係史で，(サ)は伝記集で，(オ)と(キ)と(シ)は由緒書で，(ス)と(セ)は島津藩の地誌であり，特に(ウ)・(サ)・(セ)は島津藩政期に藩が正規に編集した権威ある書物であった。

これらに見える「くらら」は全部が苦辛城となっていた。また，内容的にもすべて天文８年（1539）という中世に属する年次の事件に関するものであった。したがって近世の島津藩政期にかかわる出来事は含まれておらず，城跡として，廃墟として存在していたと述べられているに過ぎない。

以上により，くららはすべて苦辛と漢字表記されていたこと，それはすべて城と結びついており，天文8年（1539）関係のことであることが分かった。すなわち，くららは中世末までは漢字表記はまちまちであったが，近世すなわち島津藩政期以降苦辛の漢字が用いられることとなったのである。

「くらら」について近世に入って作製された史料をとりあげての検討は以上の通りである。検討の結果を要約すると次のごとくなる。

(1) 近世に入って作製された史料として8点をとりあげた。

(2) 「くらら」は全部苦辛の漢字で表記され，それはすべて城と結びついていた。

(3) 苦辛城は，すべて天文8年（1539）にかかわっており，近世にはその城跡があるだけであった。

(4) 苦辛城址の内容にふれたものは(3)のみである。

この結果，現在まで苦辛城の漢字表記が一般的となっているわけである。しかし，中世の地名としては「くらら」の発音が先行していたので，中世の地名としては「くらら」という表記に意味があることを忘れてはならない。

2 苦辛（くらら）城

(一)

地名「くらら」の検討から，「くらら」城は近世島津藩政期に苦辛城という漢字で表記されることとなっているので本稿もこれによるが，それは中世当該期に使用されていたとは必らずしも言えぬものであることをお断わりしておかねばならない。

まず当城の成立について，この地の小字地名である内城の語をもとに考えてゆきたい。

一般的に内城という語は，有力な領主がその所領支配のために本拠とする居城の意味で用いられる。島津氏本城の御内や志布志城，平山城，赤尾木城，沖永良部城などに内城が用いられているのはその例である。もっとも城内の一つの曲輪の名称として用いられることもあった。

当城について領主の動向が明確となる天文8年（1539）頃の様子は後述するが，この時点で当地域の所領支配をするためその本拠を当城としたという可能性はない。もちろんこれ以後にはこのような居城が成立するはずもない。したがって，当城が内城と呼ばれたのは，戦国期以前のことである。

そこで当城を本拠とする領主の存在について考えてみなければならないが，それは当城のある山田地区を本領とした領主について考えてみることになる。

中世に当城を含む山田地区を本領とした領主としては，薩摩国守護で島津荘惣地頭の島津氏の一族が考えられよう。そこで『鹿児島県史料・旧記雑録前編』・『薩摩国山田文書（鹿児島県史料 Ⅴ）』・『山田聖栄自記（鹿児島県史料 Ⅶ）』によってこれについて概要を見てゆきたい。（『鹿児島県史　第1巻』・『中世の荘園と社会』参照）

谷山郡司の谷山氏は鎌倉時代中期には谷山本城を居城としたと思われるが，これに対し島津氏第２代忠時は，忠時の子忠継の子である忠真に自己の相伝した谷山郡地頭職を譲与した。惣地頭が所領支配を徹底するために一族庶子を子地頭として各地に配置していくことがこの時期の通例で，この場合もその一事例であった。忠真は所職を分割して譲与し，惣領土用熊丸に谷山郡地頭職を，二郎宗久に郡内山田・上別府村地頭職を，三郎直久に郡内宇宿村地頭職を譲った。これも一郡一地頭から各村地頭への分立化という所領支配強化策採用の一事例であり，ここに谷山郡地頭職は細分され３人に分割された。この３人のうち宗久が父忠真の後を継いだ。谷山郡地頭職のうちこれが一番重要視されたためである。

宗久が山田・上別府村地頭職を譲られたのは建治２年（1276）９月13日であった。宗久のあとは忠経・久興と継がれ貞治６年（1367）までその地頭職の譲状がある。ところが応永18年（1411）両村を本領としてその領有を認められながら大隅国市成へ配置替されると，山田氏はこの両村とは実質上，切り離されてしまう。

この間，弘安３年（1280）より山田宗久方と谷山郡司資忠方との間に激しい大がかりな論争が始まり延慶２年（1309）まで続いたし，正安２年（1300）の文書を初見とし山田殿の名称が見られるようになり，宗久の代から山田を本拠とし，当地で領主支配を確立して行き，久興の貞治年中まで続けられた。

当時，自分の本領の地名を姓とするのが領主の通例であったので，地頭である島津氏一族の谷山郡支配は，鎌倉後期に山田を中心として形成され，南北朝中期まで続いたと見てよく，その核となったものが山田氏を呼称したのであった。(「島津山田氏系図」が忠継から山田に居住したので山田と号した，とするがこれは事実とはみなせない。)

地頭山田氏は，この鎌倉後期から谷山郡司により多数の地頭屋敷を構え，何人もの代官を置き，郡内の百姓を使役していると批難されており（『鹿児島県史料・旧記雑録前編１』332～334頁，№884。394～407頁，№1050）山田と上別府（上別府とは現五ヶ別府町をいうとされている）の地に地頭屋敷が設置され，これが所領支配の鍵となったのである。

その地頭屋敷の一つが山田町小字内城に置かれた可能性があり，敵対していた谷山郡司の拠城である谷山本城を望むこの地には最も重要な地頭屋敷が置かれたとみなしてよい。

この地頭屋敷は，鎌倉後期という時代であるから地頭山田氏にとって中心的なものであったとしても館城的な性格のものであったと考えてよいであろう。当館城は，山田氏の内城的役割を荷っていたと思われる。そして，南北朝中期まで地頭山田氏の内城的な性格をもっていたが，山田氏の配置替でその役割は低下した。

その後，山田は明徳３年（1392）10月４日元久らにより皇徳寺へ寄進され（『鹿児島県史料，旧記雑録前編２』144頁，№492）応永24年（1417）９月５日久豊により福昌寺へ寄進され（『前掲書299頁，№958），明応４年（1495）４月17日忠昌により吉田孝清へ与えられるなど（『前掲書』567頁，№1735）守護島津氏の所領として存在していた。

山田氏と厳しい対決をしていた谷山郡司も忠高を最後とし室町時代に入るとその姿を消し

てしまい谷山郡全体が守護島津氏の所領となっていった。守護島津氏領下で，館城としての地頭屋敷は，山城的な様相を色濃くし，小字内城のそれは山田と上別府の内城とされて行ったと思われる。

以上により小字内城の地は，山田氏による山田・上別府の所領支配の拠点として鎌倉後期に地頭屋敷が設置された所であること，それは南北朝中期まで山田氏にとっては内城的な役割をもっていたこと，室町期に入って守護島津氏がこの地を所領とすると山城的な様相を強めて山田・上別府の内城へと変化したことが明らかとなった。

(二)

つぎに，当城が脚光をあびる天文8年（1539）の様相について，薩摩国の戦国動乱期のなかに位置づけ，かつ当城をめぐる動向に関する史料でそのニュアンスをつかみ，城主について考えてゆきたい。まずは戦国期の主要な変遷をとらえてみよう。

明応年中（1492～1501年）以降，この地を所領としてきた守護島津氏の領国体制は崩壊して行った。(『島津氏における領国制形成の課題』)(『鹿児島中世史研究会会報15』)(参照)守護島津氏の本領である薩摩国でも出水亀ヶ城を中心に勢力を拡大した分家島津薩州家の実久，伊作亀丸城による伊作家の忠良，加世田別府城を中心とする相州家運久の分家による所領拡大があり，また，入来院清色城から出て川内の永利城へ本拠を移した入来院氏ら国衆も勢力を拡大しており，永正7年（1510）以降は『島津国史』が「三州大乱」と表現する戦国騒乱の世となった。（巻之13）

大永年間（1521～1528年）になると北薩の実久と南薩の忠良とが守護島津氏の当主勝久を圧倒してしまう。実久は姉を勝久の室とし，勝久に替って島津本家のあとを継ごうとしていたし，伊作家から出て相州家を併せた忠良は自分の子貴久を島津本家の後嗣としようとしていた。

大永6年（1526）11月27日，実久に手を焼いた勝久は貴久に守護職を伝え，鹿児島と伊作とを交換し，貴久とその後見人である忠良とが島津本家の本城である鹿児島清水城に入ったと『島津国史』はいう（巻之15）。下剋上の戦国時代の歴史と，この前後の鹿児島をめぐる功防によれば，この正史の記述は薩摩の実際の覇者実久と忠良の両者が勝久のもつ守護職と本城清水城とをめぐる激烈な戦いの中で理解されなければならない。（前掲書巻之15，16，17）この激烈な戦いは，天文2年（1533）から同8年（1539）にかけての正面衝突ののち，忠良の勝利で終わるが，この間忠良の子貴久は大きく成長する。そして忠良のあとをついだ貴久が名実ともに薩摩の戦国大名となるのは天文19年（1550）であった。「三州大乱」がこの新しい戦国大名によって鎮静化するには，さらに20年が必要であった。『鹿児島県史料・旧記雑録後編』1及び2）

その一連の段階のうちで最初に来たのが天文2年（1533）以降の薩摩半島をめぐる忠良方と実久方との正面衝突の段階であった。『島津国史』によって，そのあらましをみて行きたい。

天文2年（1533）3月29日，忠良方は実久方の南郷城桑波田氏を討ち，南郷を手に入れ，12月，日置城山田氏が降り日置を領した。忠良方が実久勢を追放し少しずつ勢力を拡大して行く第1歩であった。翌年（1534）10月25日，谷山皇徳寺において守護として存在したことのある島津本家勝久の側近末弘伯耆守が，実久方川上昌久らにより討たれた。これに対し天文4年（1535）4月3日，勝久は鹿児島大興寺で，昌久を自刃させている。そこで怒った実久は，勝久の居城鹿児島を焼き払った。9月30日に勝久方祁答院重武らが反撃し，実久を谷山神前城へ追いだした。これを見て谷山本城の福元勢が重武を襲い，それを破った。実久は谷山に居たが，10月10日に勝久を帖佐へ追いだし自ら鹿児島へ入城した。鹿児島城での実久はあたかも守護のようであった。

天文5年（1536）忠良は，実久方町田氏の守る伊集院一宇治城を襲い，3月7日にこれを落城させた。忠良はひき続いて9月23日には太田墨を抜き，11月28日には長崎墨，29日には神殿墨，さらに天文6年（1537）1月7日には竹山墨，2月には福山墨，犬迫墨とあいついで撃破し，伊集院の地から実久方を追い，その全域を自己の所領とした。

このように忠良が西南側より鹿児島を包囲しようとしたので，実久は鹿児島を出て，谷山へ逃れ，さらに川辺へと走ったのである。3月12日には，南下しようとする貴久と川辺・谷山を防衛線としながら鹿児島をめざし北上しようとする実久とが紫原で合戦した。

一息おいて，忠良は加世田攻めにかかる。すなわち天文7年（1538）12月18日より取りつき始め翌年（1539）1月1日に落城させた。この城は島津相州家の本城だったので忠良・貴久にとっては帰城と思われたであろう。

3月13日，貴久方と実久方とは紫原で合戦した。貴久の戦果は大きかった。翌14日，実久方の谷山の苦辛城の平田宗秀が貴久に降り，貴久は同城へ入城した。ついで貴久は谷山本城へ兵を出した。24日には貴久は谷山の神前城を攻め島津忠悟を降し，28日には忠良が川辺高城，平山城の鎌田氏を降した。

これで忠良・貴久方は薩摩半島の実久勢のすべてを追いだしたことになった。この後貴久は北へ転じ関6月17日に市来平城，8月28日に本城を攻め，実久の弟忠綱を斬った。かくして9年にわたった薩摩国南部をめぐる忠良・貴久と実久との一連の攻防は忠良・貴久の勝利により幕が引かれた。（以上『島津国史』巻之16。『薩摩島津氏』参照）そして，この薩摩国南部から実久方が一掃されると，忠良・貴久と実久との衝突も終ることとなった。

以上により，忠良・貴久と実久との一連の衝突の最後の年に谷山の苦辛城がその攻防の舞台となったことが分った。

つぎにこの苦辛城をめぐる合戦関係の動向を検討しよう。まず，その史料は(ウ)から(グ)としてすでに触れあるが，ここでは原文を掲げ，それぞれの史料としの性格を理解理しておきたい。

(ウ)「島津国史」

「3月13日，公敗島津実久軍於紫原，多斬獲（據大中公旧譜，黄奎軍記，樺山玄佐日記，旧

講・軍記並云，谷山紫原之戦多斬獲，自記撃谷山軍於紫原，多斬獲，今従之，谷山軍即実久軍也）苦辛城主平田式部少輔宗秀（玄佐自記作備中守，據平田監物系圖，宗秀初稱式部少輔，後改備中守）因伊集院忠朗，乞降，迎　公入城，公遣兵衆戍谷山本城（同上，苦辛城遺址在谷山地頭館西北一里有余，係山田村，苦辛読曰久良良，據公遣兵衆戍谷山本城，則本城已下矣，樺山玄佐自記則曰，且舎谷山本城，向神前城，與此不同）宗秀，平田氏之支庶也，（據平田監物系圖，平田重宗次子日民部少輔宗保，宗秀，宗保之曾孫也，重宗見第8巻応永17年）公進攻神前城，24日，城主島津駿河守忠栝降，以次子直久為賀，（據大中公旧講，黄套軍記，止称駿河守，今挨島津支流系図寺山氏講，具書姓名，而旧講作谷山駿河守非，直久出為寺山氏嗣，称出羽守）忠栝，薩州家之支庶也。

(エ)「**贄輪覚書**」

天文8年癸巳3月13日，於谷山紫原，相・薩両家之者共，互に相戦と云ヘトモ，実久勢敗北せり，其翌日，平田式部少輔（後備中守宗秀）谷山苦辛（クララ）ノ城ニ貴久朝臣ヲ奉請シ，是ハ川辺ノ地頭職安房守平宗康カ子也，実久善代ノ為家臣，相模入道蜜ニ可相語ノ牒状再三ニ及ヒ，日新ノ姿ノ娘ニ式部少輔ヲ嫁して，可相成腕（カトモ歟）之旨，頻ニ雖被仰遣不承引，然ニ此事薩州ニ相告ク，彼実ハ雖有不事二君之賢旨，相州以相謀ラハ，遂ニハなとか不相順，先是を可誅（疑クハ謀ルカ）とて竊ニ被計ノ由風聞す，式部少輔其難を遁シニハ相州（日新公）に参ランニハシカジトテ，苦辛城ニ奉請入レ，同26日，神前ノ城和談にて地頭大野駿河守，出水衆に伊集院山城守・松崎丹波守・勝部兵庫允・市来縫殿助・高城右衛門尉・長井大炊介其外侍数多，貴久ニ被参ケル，其折節頴娃小四郎・喜入三郎四郎（忠房）御慈（ミカタ）に被参ける。

(オ)「**貴久公記**」

天文8年己亥3月13日，谷山紫原之軍ニ敵余多討取，然者翌日平田式部少輔苦辛（クララ）之城へ貴久様ヲ被申請，次日本城へ番衆被籠，従其10余日有テ，24日神前之城議ニ成テ被渡，城主駿河守，和泉衆伊集院山城守・松崎丹波守其外余多有。

(カ)「**玄佐自記**」

貴久様上之山へ被成御発足，於紫原谷山衆出合軍有り（天文8年3月13日也）貴久様月毛之御馬ニ而被成御下知，実久衆本城之人躰袴寝播磨を初として数10人打取，うすく（宇宿）波之平なと云所迄追下り被打破，其騒倉良平田備中守・伊集院大和守迄申子細有，予薩州年来之者ニ而，親之時より加世田之觸なり，頃阿多源太左衛門ニ被取替事非本意，願は貴久様へ御奉公望之由申入，大和守頷掌して，以武略民以下を手ニ付，倉良を夜中ニ仕取，貴久様御出張なれは，平田備中守舎弟六彌太同懸御目，されは本城ハ打捨，神前へ被指寄，其折喜入三郎四郎殿（忠房後忠俊也）是も内々伊作へ被申通，以筋目此折隣所をも不見合，谷山坂之上迄放火仕被　馳参，其時近所之人衆も不残御奉公と也，されば（天文8年3月24日ノコト也）神前之城駿河守殿二男を召取，妻子等迄無何事被受取，従加世田日新様鹿籠・山田・河之辺御知行，神前江ハ貴久様御座候所江，始肝付・祢寝・伊地知

参上（天文８年３月カ）其折安芸守従生別府本田を調儀仕，本田為使本田又八被進，安芸守を伊作・田布施へ参上，長吉江右馬頭殿江モ参，典廐者於加世田御合戦ニ御手ニ切痕深，其ころ迄御手不自由，それより伊集院へ貴久様御陣なれハ，彼方へ参上，逗留中ニ本田紀州・同刑部太輔出頭，芸芸守申調，剰向之嶋を本田可致返上之旨を兼々少度申置，此度頻ニ申調へ，本田御暇被申折に，彼嶋の上山・横山・萩原３人を鹿児島へ召寄，大和守殿江引付，それより嶋御知行なりし。

(キ)「貴久公御譜中」

天文８年己亥３月13日，於谷山紫原遂一戦，対殺数多逆侍，而当郡入貴久之手裏，翌日，平田式部少輔請待貴久於苦辛城，故往其地，而明日入守卒於本城，纔到10日，神前城請和，同月24日降参也，城主谷山駿河守及伊集院山城守・松崎丹後守（３士共実久之旗下出水之人也）厥外士卒咸屬旗下矣。

(ク)「喜入領主忠房臣伊集院某申状」

谷山神前之城を可責落御相談，相図之日限ニ，義運様者喜入を御立候，其時迄茂御供ハやうやう右申上候30余人也，就夫之勢夜中ニ為可相立，右之内少シ被召残，30人程ニ而御立候，雖無勢候上下共運之極ニ出立候事，頼母敷見得たりとなり，又十郎事ハ先ニ掛通，平川障子川坂之上迄を焼払，神前之城江近付，大音ニ而名乗申候者，嶋津三郎四郎　虎寿様へ申合，只今寄来候，御陣者蔵良之城，合戦ハ明日たるへし，城を乗取ん事案之内たる由申嘱候，蔵良之城よりも如相図之村々へ火を掛名乗合候由候，其夜者両陣相堅メ明ルを御待候処ニ，喜入人数百余人未明ニ参陣仕候，敵何と思ひ候哉，させる戦茂なく下城之由候，其より三郎四郎殿事，御陣へ被為参御祝言御三献之時，御腰物御拝領為被成之由候，又十郎儀茂御三献ニ罷出，御長刀一揮・御感状拝領仕，于今子孫所持仕候，御感状ハ喜入美作様御病中被成御覧，御跡ニ見得不申候，義運様被召列候人数，頭立候者江者御酒為被下由候，其より守護方々へ，泉も次第ニ伊作御手ニ入，勝久公ハ他出之由候。

(ケ)「忠房臣伊集院某書出」

貴久公　勝久公御弓箭之時分，谷山者鹿児島御方ニ而取籠候，就夫ニ忠俊より貴久公御味方之御内通伊集院又十郎エ被仰付，堂の尾山ヲくくり度々御内證之使相勤申候，其内川辺谷山之敵逆瀬川・山口名字之士ニ行合，其身ニ茂疵を請申候得共，主従二人ニ而敵２人討果し其場ヲ通為申由候，其後谷山神前之城ニ忠俊少人数ニ而，夜中ニ押寄心安く責落シ，貴久公御陣鞍良之城へ忠俊参上ニ而，御勝利之御祝儀被申上候節，民部少忠節之次第并子孫迄不相替趣被申上，忠俊エ長光之御腰物拝領，又十郎エ者御長刀拝領仕候云々。

この７点の史料はいずれも天文８年（1539）の苦辛城について述べているが，(ウ)〜(キ)は当城をめぐる戦いについて述べているのに対し，(ク)・(ケ)は神前城攻めに関連し当城が扱われている。特に(エ)・(オ)・(カ)・(キ)が詳しいので，まずこれらを中心として苦辛城をめぐる動きを整理したい。事件発生日は，(エ)・(オ)・(キ)は３月14日のこととしているが，(ウ)は３月13日のこととしているという違いがある。

苦辛城主が平田宗秀であること，宗秀が実久方であったこと，３月13日に貴久が実久を紫原で破ったこと，その後宗秀が貴久へ内通したこと，貴久を当城に迎えたこと，以上の点は(エ)〜(キ)に共通している。

宗秀の貴久への内通の理由は(エ)と(カ)に見え，(エ)では忠良が宗秀を誘い，これが実久に聞え，その怒りをかったため忠良方へ付くこととしたとあり，(カ)では宗秀は実久により加世田の触を阿多源太左衛門に替えられ，その不満から貴久へ付くこととなったとある。

貴久への仲介者を，(カ)は伊集院忠朗としており，(ウ)はこれを踏襲した。他は仲介者について述べていない。

そして貴久は，すぐに兵を出し谷山本城を手に入れたと(オ)と(キ)にあり，(ウ)はそれを踏襲した。さらに貴久は24日，神前城攻めにかかっていった。これはすべてにみられるが，日付は(エ)が26日とし，(ク)・(ケ)は日付がない。後２者は，神前城攻めの記事であり，貴久が当城に居城していることが述べられているものである。

以上の整理により，苦辛城がすべて貴久と実久の衝突のなかに登場していて，３月13日の紫原での貴久の勝利によって実久方の平田宗秀が貴久へ内通したとなっていたことが分かった。ちなみに，紫原は苦辛城の北で当城から望見できる台地である。そして，当城へは貴久が入城したことも共通している。当城の貴久は，実久方の神前城攻めに10日近かくを要している。これも当城から東方に望見できる台地にあった山城である。

以上により，天文８年（1539）に薩摩国をめぐる島津忠良・貴久と島津実久との衝突が最終段階をむかえたこと，その舞台の１つとして苦辛城が史料に登場したこと，具体的には実久方の苦辛城主平田宗秀が貴久へ内通したこと，そして，貴久自ら即日苦辛城へ入城したことが史料に登場する原因となったことが明らかとなった。

(三)

苦辛城が史料に登場したのは，当城主平田宗秀の行動によっているので，平田氏及び宗秀についての検討をしておきたい。そこでまず，平田氏の系譜について考えてみたい。

(ソ)「君家累世御城代御家老記」（『鹿児島市史Ⅲ』433〜453頁）は平田氏を，

親宗――重宗――氏宗――兼宗――昌宗――光宗――歳宗――増宗

としている。

(タ)「諸家譜略　下」（140枚目裏）は

平田家
嫡流平田氏者平内府宗盛之嫡流平田太郎左衛門尉増宗及嫡子宗次代断絶　家嫡ニ世右馬助重宗入道玄親（元久公御家老）二男之家筋ナリ

平田右馬介重宗二男

イニ美濃守重宗トアリ

○平　宗保――宗頼――宗知――宗房――宗茂――宗張――宗乗――
　　民部少輔　右京亮　安房介　備中守（イニ秀）　安房介　日新公御家老　二代仮名不詳

宗次――宗浄――位充
　　弥七右衛門六兵衛

としている。

(コ)の「西藩野史」（巻之８，『新薩藩叢書第２巻』157頁）は，

内大臣宗盛之三子宗政ノ裔，薩州ニ臣トシ仕ヘ，平田氏ヲ以テ氏トス

親宗――重宗――氏宗――兼宗――昌宗――光宗――歳宗――増宗
　　新左衛門　氏久公老中　右馬介　元久公老中　美濃宗　忠国公老中　兼宗孫　右馬介　美濃守　美濃宗　左近将監　太郎左衛門

としている。

以上ともに近世島津藩政期に記録されたものであるが，当該期の史料は存在していないので，これら近世の記録，すなわち(サ)・(ソ)・(タ)・(チ)によって平田氏の系譜関係を整理すると，次のようになろう。

祖・平　宗盛……親宗――重宗┬氏宗――兼宗――昌宗――光宗――歳宗――増宗――宗次
　　┬宗保――宗頼――宗知――宗秀――宗茂――宗張――宗乗
　　└宗次――宗浄――位充

この平田氏は，(ソ)によると，親宗は守護島津氏第６代氏久家老，第７代元久家老，重宗は元久家老，第８代久豊家老，氏宗は第９代忠国家老，兼宗は忠国～第11代忠昌家老，昌宗は第14代勝久家老，第15代貴久家老，第16代義久家老，光宗は貴久家老，義久家老，第17代義弘家老，第18代家久家老，歳宗は義久家老，家久家老，増宗は貴久家老，義久家老，義弘家老，家久家老とあって，親宗より増宗までの歴代が守護島津氏により家老とされていたことになる。これは，(サ)に親宗は氏久執事，重宗は久豊執事，氏宗は忠国家老，兼宗は立久家老，昌宗は貴久家老，光宗は義久家老とあるのと大筋で一致しており，(タ)に重宗は元久家老とあるのにも一致している。

このうち，家老といい執事というのは近世島津藩での呼称で，中世には，この語はほとんど用いられておらず正規の役職名とはいえない。しかし，中世の文書類でみると，親宗は，島津元久の知行宛行などに関与しており（『島津家文書１』），また，樺山氏や山田氏などと守護方被官として契状を結んでおり（『旧記雑録前編』巻24，『山田文書』，）重宗は守護方被

官として山田氏，伊作氏と契状を結んでおり（『島津家文書１』，『山田文書』），氏宗は，忠国の知行宛行に関与しており（『旧記雑録前編』巻25），兼宗は，忠国・立久の知行宛行などに関与していた。これより，福島金治氏は平田氏が文明19年（1487）までは村田氏と共に守護島津氏の老名の中心であったとしている（「室町・戦国期島津氏の領国支配機構」（『九州史学』第63号））。

また，兼宗は「行脚僧雑録」（『雲遊雑記伝』）では「御内之方々　串良仁平田左馬助兼宗（当奉行）」とあり文明６年（1474）頃，守護島津氏の中核家臣団であり（稲本紀昭氏「中世後期島津氏の権力構造」（『史林』第51巻第３号）・『薩摩島津氏』），平田氏が守護島津氏の家臣団中に大きな比重をもっていたことは疑いないところである。

ちなみに，重宗は，当時谷山郡の山田の地に包摂されているか，いないとしても直接に関連した「中村」の地の水田１町歩を福昌寺に寄進しており（『旧記雑録前編２』385頁№1216），平田氏本家は谷山郡内に所領を有していたことが確認できるのである。

なお(ハ)は，昌宗は島津勝久が鹿児島を去った時，末吉へ逃がれたが，天文年中に島津貴久の時，鹿児島に戻り，のち義久の時，政治に功績があって帖佐の地頭となったとし，勝久の家老に平田清春（平田兼宗の子で，「玄佐自記」に見える左馬介），平田貞宗（系図に見えるが時代不明。清貞か，右馬介，美濃守）をあげている。

また，重宗以来東串良を領し岩弘城に居城したとの伝えもある。（『日本城郭大系第18巻，鹿児島県』446頁）。

これに対し，重宗二男家の宗保一流については，宗知までは事績が分からない。いわば宗秀が突如として登場してくるのである。そして，その子の宗茂は(ｻ)によれば，「安房介。入道清甫。初め新左衛門。宗清。宗秀の子。川辺，加世田地頭。日新公家老」とあり，光宗については「美濃宗。入道舜芦。初め新七。左馬介。実は宗秀二男。天正３年（1575）より義久家老。郡山，西別府を賜。帖佐，肥後八代地頭」とある通り，平田氏の本家と二男家の中興の祖ともいうべき役割を荷っているのである。

このように，重宗二男家の場合，宗秀以前は明きらかな史料はないので，宗秀の活躍によって谷山郡山田を領するところとなったものと考えることが妥当であろう。この山田を所領としたのは，平田本家の昌宗の代に相当すると思われるので，島津勝久の永正年中（1504～1521）と推定しておきたい。問題はその宛行主体であるが，それは島津守護家であったとしておきたい。

かくして平田氏の分家である二男家は，山田領知のため山田の地の内城である苦辛城へ入城し，これを拠城とした。しかるにこの山田を含む谷山郡をめぐって，島津守護家と島津薩州家とが激しい抗争を始めた。

元来は，島津守護家領であったはずであるが，大永６年（1526）には島津相州家領となっており，翌年には島津薩州家実久がこれを攻略している。そして，天文４年（1535）には，その実久が谷山郡を拠城としているのである。したがって，この前後に苦辛城の平田氏は，

苦辛城跡出土滓の調査

昭和５８年３月５日

大　澤　正　己

島津薩州家実久方となったのであろう。

しかし，(ロ)で平田氏の分家重宗二男家は実久の譜代と記載されており，早い時期とするという見方もあれば，(ハ)にみられる忠良方の誘いかけ方や，貴久が宗秀の内通があると即日苦辛城へ入城し，かつこれを拠城としていることからみると実久との臣従は深かったとはいえず，遅い時期とするという見方もありうるので，これについては今後の検討を待ちたい。

以上により，苦辛城に関係したのは島津守護家の重臣であった平田氏の重宗二男家であり，島津守護家より山田を宛行われ当城に入城し，平田宗秀の時，実久方より貴久方へ内通したのであって，この苦辛城主平田氏が実久方となったのは，大永7年（1527）または天文4年（1535）頃と思われるということが明らかとなった。

苦辛城について中世及び近世の史料をとりあげての検討は以上の通りである。検討の結果をもとに苦辛城について要約すると次のごとくなる。

(1) 苦辛城には，館城相当期と山城期とがあり，一時期重なって存在していたと思われる。前者は鎌倉後期から室町初期までであり，後者の形成は南北朝期に始まり，形をととのえたのは戦国期で，山城として機能を備えていたのは天文19年（1550）頃までである。

(2) 城主は，建治2年（1276）頃から応永18年（1411）頃までは，島津守護家一族で山田，上別府村地頭山田氏，応永18年（1411）頃からは島津守護家領であるが，城主は不明。永正年中（1504～1521）頃より天文年間中期（1540年代）頃までは，守護島津家の臣平田氏で，その後天文19年（1550）頃までの城主は，在城したかどうか不明である。

(3) 城主平田氏は，永正年中（1504～1521）頃から大永6年（1526）頃までは，島津守護家方で，大永6年（1526）からは島津相州家方となり，大永7年（1527）または天文4年（1535）頃からは，島津薩州家方実久に属した。天文8年（1539）戦国大名として領国形成中の島津忠良・貴久方となった。その後平田氏は，天文中期（1540年代）頃からは戦国大名島津氏の，大隅国での領国拡大のための合戦に従うこととなった。

(4) 山城としての苦辛城は，平田氏入城前に成立していたが，永正年中（1504～1521）平田氏によってそれが継承され，戦国期的山城として基礎を固めることとなった。大永6年（1526）頃より平田氏により，合戦にむけて戦国期的山城として，本格的に整備され始め，大永7年（1527）または天文4年（1535）頃にその整備が終った。さらに天文8年（1539）頃より，再度合戦に対する施設として補強され，天文19年（1550）頃まで山城として存続した。

本稿は極めて限られた史料による苦辛城についての略報であり，今後の研究の一里塚としたい。誤りと誤解等がありはしないかと恐れているが，鹿児島県教育庁文化課の方々，鹿児島市役所谷山支所の方々，平田宗光氏，平田盛家氏，吉元正幸氏，川崎大十氏などお世話になった多くの方々へのご報告の気持と先学のご教示を願う気持とをこめて筆を擱くこととする。〈昭和58年2月8日〉

1．はじめに

苦辛城跡は鹿児島市山田町に所在し，16世紀前半代（1553年廃城，25年間使用）に活動した中世の城郭である。ここより出土した滓1点についての調査依頼を鹿児島県教育委員会より受けたので，鉱物組成と化学組成の金属学的調査を行なったので報告する。

なお，比較検討試料として市内の尚古集成館保管の反射炉滓と，肝属郡串良町の柳田遺跡出土の精錬鍛冶滓（大鍛冶滓）を加えている。

苦辛城出土滓は，鉄分10%以下で造滓成分（$SiO_2+A\ell_2O_3+CaO+MgO$）が90.57%というガラス質スラグを主成分とするもので，たたら鉄滓や鍛冶滓の範ちゅうから外れるものであった。

この造滓成分中の酸化カルシウム（CaO）は，18.5%と高目で媒溶剤（滓の流動性を高め，比重を小さくして鉄との分離をよくする）としての石灰石の添加が予測される。

鉱物組成としては，石灰焼結鉱などでみられるモノカルシウム・フェライト系(Monocalcium ferrite：$CaO\cdot Fe_2O_3$）が検出され，従来の古代から近世にみられるたたら製錬滓や，鍛冶滓とは異なる組成であった。

この種の滓の調査は初めてであり，今回の報告では最終的な結論を出すまでに至っていないが，砂鉄製錬系銑鉄を鋳造した際の鋳物滓ではないかと考えている。

2．調査方法

(1) 供試材

Table. 1に供試材の履歴及び調査項目について示す。

Table 1　供　試　材

符号	遺跡名	所在地	区分	推定年代	調査項目			
					顕微鏡組織	化学組成	SEM	粉末X線回折
2G−821	苦辛城跡	鹿児島市山田町	鋳物滓?	中世	○	○	○	
8Q−91	集成館	鹿児島市吉野町	反射炉滓	幕末	○	○		○
2Z−6	柳谷	肝属郡串良町	精錬鍛冶滓	近世?	○	○		

(2) 試験方法

(i) 肉眼観察

(ii) 光学顕微鏡組織

各滓は水道水で充分に洗滌して乾燥後，二分割して片方の中核部を検鏡試料とした。(残余部分は化学分析用)。検鏡試料は，ベークライト樹脂に埋込んだ後，エメリー研磨紙（コランダム：$A\ell_2O_3$に磁鉄鉱を含んだ黒灰色の結晶の粉末砥石を膠質の接着剤で塗布している）の#150，#320，#600，#1,000を使用して荒研磨し，次にアルミナ（$A\ell_2O_3$）粉末

溶液（アルミニウム塩の沈澱物を焼成して作られた六方晶形細粒粉末の水溶懸濁液）をバフ布に注ぎながら被研面を仕上げて構成鉱物の同定を行なった。アルミナの粒子は，5 μ と10 μ を2回に分けて使用している。

(iii) 化学組成

Table. 2に示した苦辛城跡出土滓，集成館反射炉滓及び王子遺跡出土滓らは下に示す分析方法をとっている。

重量法……二酸化珪素（SiO_2）

赤外吸収法……炭素（C），硫黄（S）

原子吸光法……全鉄分（Total Fe），酸化アルミニウム（$A\ell_2O_3$），酸化カルシウム（CaO），酸化マグネシウム（MgO），二酸化チタン（TiO_2），酸化クロム（Cr_2O_3），バナジウム（V），銅（Cu）

酸化第2鉄（Fe_2O_3）は計算値による。

比較参考値の柳谷遺跡出土精錬鍛冶滓は，次の方法をとっている。

蛍光X線法……SiO_2，$A\ell_2O_3$，CaO，MgO，MnO，TiO_2，S，P_2O_5

容量法（湿式）……TotalFe，FeO，V，Cr_2O_3，Cu

(iv) 走査型電子顕微鏡（SEM：Scanning Electron Microscope）による面分析

この装置の原理は，電子線を絞って試料面に照射し，ここより発生する電子線によって情報を得る装置である。

(v) 粉末X線回折（X−ray diffractometer）

X線回折とは「単結晶，または粉末試料にX線を照射すると，それぞれ固有のX線が回折する現象」をいう。X線回折分析法とは，この回折角と回折強度から物質を同定する方法である。この分析法の基本は状態分析法であり，物質中の構成元素を求めるものではなく，あくまでも形態とその量を知ることである。

試料調整は分析用に粉砕した試料の一部をさらにメノウ乳鉢で細粒化（325メッシュの篩を通る程度）している。鉱物組成の同定にはＡＳＴＭカードと比較する方法をとった。ＡＳＴＭカードは，ASTM X−ray Probe Data File と呼ばれ，ASTM(American Society for Testing Materials）から発行されている。

3．調査結果

Photo. 1に顕微鏡組織を，Photo. 2に走査X線像（SEM：Scanning Electron Microscope）分析結果を，Table. 2に化学組成を示す。さらにFig. 1に粉末X線回折図を提示した。

(1) 苦辛城跡出土滓（2G−821）

(i) 肉眼観察

全体的に鉄分の存在を感じさせない青灰色から灰黒色を交じえたスポンジ状多孔質な滓である。表皮の一部に鉄錆じみた茶褐色薄層を有しているが磁性はない。大きさは140

×70×80mmで，重量は560 gであった。

Ⅱ 顕微鏡組織

Photo. 1に示す。鉱物組成は，白色微小結晶のマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）と淡灰色の半自形結晶として晶出したモノカルシウムフェライト(Monocalcium ferrite：$CaO \cdot Fe_2O_3$)，それに基地の暗灰色ガラス質スラグから構成されている。石灰焼結鉱でやや酸化度の高い場合にみられる組織に近似する。

Ⅲ 走査型電子顕微鏡（SEM）による面分析

走査X線による面分析を行なった。その結果を下表とPhoto. Ⅱに示す。Photo. Ⅱは，元素存在の有無を輝点集中度により判定している。

検出された元素は，造滓成分系の珪素(Si)，アルミニウム(Al)，カルシウム(Ca)，マグネシウム(Mg) らが主体で，いずれも酸素(O)と結合した酸化物である。また，鉄(Fe) もマグネタイト(Magnetite：Fe_3O_4)や，モノカルシウムフェライト(Monocalcium ferrite：$CaO \cdot Fe_2O_3$)系の化合物である。チタン(Ti)がわずかに存在するのは，溶融鉄に砂鉄を原料としたもので，その痕跡が現われたのであろう。

SEM面分析結果

検出元素	未検出元素
Si, Al, Ca, Mg, Fe, Ti, O	Mn, P, S, Cu, Ni, Co, Cr, V, Zn, Zr, W, Na, K

Ⅳ 化学組成

Table. 2に示す。全鉄分(Total Fe)は非常に少なく8.14%であり，このうち酸化第1鉄(FeO)が5.75%，酸化第2鉄(Fe_2O_3)が2.31%の割合である。この滓の主成分は，やはり造滓成分($SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO$)で90.57%を占めている，この造滓成分のうち，酸化カルシウム(CaO)が18.53%と多く，CaO/SiO_2で表示される塩基度は0.43であった。これに対して近世たたら滓（製錬滓：Table. 2の注5)の塩基度は0.15～0.32である。両者を比較すると，苦辛城跡出土滓は明確に塩基度の高いもので，こういった傾向の滓は他に類例がみられないものである。

他の微量元素はおしなべて低目であり，二酸化チタン(TiO_2)が0.73%，酸化マンガン(MnO)が0.14%，酸化クロム(Cr_2O_3)が0.012%，硫黄(S)が0.003%，五酸化燐(P_2O_5)が0.073%，バナジウム(V)が0.032%，銅(Cu)が0.002%であった。

わずかながら二酸化チタンとバナジウムが検出され，またPhoto.2の走査X像でチタン(Ti) の確認のできたことを考え合わせると，砂鉄製錬滓鉄と分離した滓であろう。

集成館反射炉の概略

苦辛城跡出土滓が従来のたたら滓と異なる組成であったので，反射炉滓がいかなる性状のも

のであるか比較検討試料として加えた。現在迄反射炉についての研究は，大橋周治『幕末明治製鉄史』アグネ社らの優れた研究があるが，反射炉滓まで言及していない。

まず，集成館反射炉について簡単にふれておく。反射炉は伝統的なこしき炉に比べて巨大溶解炉であり，原料の高炉銑中の炭素を酸化除去する精錬的役割を一部で果すものである。

炉は，高さ10数メートルの耐火煉瓦積みの構造物であり，自然通風により溶解酸化精錬を進行させる燃突の機能をもたせた部分と，底部の一部分に燃焼室と銑鉄の溶解室を別々に設けて燃焼炎が溶解銑鉄に直接触れさせない反射熱を利用した構造になっている。（集成館の反射炉は木炭を燃料に使用したと報告されているが，多くは石炭を用いたので，石炭中の硫黄分が銑鉄に入って脆性を与えるので，これを防ぐ)。

集成館反射炉は安政３年（1856）から７年間の操業と報告されている。この反射炉に用いられた高炉銑は，同じ集成館内に構築された水車送風の洋式高炉で木炭ないし石炭を還元剤とし，鉄鉱石を原料として製錬されている。（大橋周治氏文献）

(2) 尚古集成館採取反射炉滓（8Q−91）

① 肉眼観察

表皮は淡茶褐色を呈し，粘稠質であるが，なめらかな流出状の肌を有した滓である。裏面は茶褐色と淡褐色を混じてやや凹凸面をもっている。破面は茶褐色で３～５mm径の気泡が散在するが緻密で比重が大きい。また，新しい破面は局部的に白色光沢を発する個所が存在するが磁性はほとんどない。古い破面は鉄錆と緑青が認められる。大きさは破片であるが135×135×４ｔで，重量は1,200ｇあった。

② 顕微鏡組織

鉱物組成は，組織写真中央部の白色部がヴスタイト（Wüstite：FeO）の小結晶凝集部であり，暗灰色盤状部がフェアライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$），それに暗黒色がラス質スラグから構成されている。（灰色粒状結晶の同定不明)。

③ 粉末Ｘ線回折（X−ray diffractometer）

Fig. １にＸ線回折図を示す。同定された主成鉱物相は，フェアライト（Fayalite：Fe_2SiO_4→ASTMカード20−1139），ヴスタイト（Wüstite：FeO→ASTMカード６−0615），マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4→ASTMカード19−629）らであった。

④ 化学組成

Table. ２に示す。酸化精錬を行なっているので鉄分が非常に多い。全鉄分（Total Fe）が49.5%，そのうち，酸化第１鉄（FeO）が57.9%，酸化第２鉄（Fe_2O_3）が6.43%であった。造滓成分は23.37%で，このうちの酸化カルシウム（CaO）はほとんど含有されずTrace（痕跡）程度である。

随伴微量元素のうち，二酸化チタン（TiO_2）は0.11%，バナジウム（V）が0.40%と，砂鉄成分系は低く，緑青で表われていたように銅（Cu）が2.10%，硫黄（S）が2.91%と他

の鉱滓でみられぬ高さである。集成館高炉で製錬された鉱石は，含銅硫化鉄鉱系のもので，鉄鉄に銅と硫黄が多く含有され，これが反射炉で溶解精錬された際に多く残留したのであろう。

酸化マンガン(MnO)が0.14%，酸化クロム(Cr_2O_3)が0.012%と低目であり，五酸化燐(P_2O_5)は0.078%で通常であった。

(3) 柳谷遺跡出土精錬鍛冶滓（大鍛冶滓、2Z－6）

Ⓘ 肉眼観察

黒褐色を呈し，粗鬆な肌を有する鉄滓である。形状がやや楕円形で裏面が球状に近い。鍛冶炉の炉底に集積した滓で俗にいう椀形滓である。破面は気泡少なく黒色緻密で，局部的に金属鉄と錆と木炭の噛み込みがみられる。大きさは80×60×30㎜で，重量は225gであった。

Ⓘ 顕微鏡組織

鉱物組成は白色粒状のヴスタイト(Wüstite：FeO)が多量に晶出し，これに灰色木ずり状のフェアライト(Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$)が，基地の暗黒色ガラス質スラグ中に存在する。

Ⓘ 化学組成

全鉄分(Total Fe)が49.7%あり，そのうちの酸化第1鉄(FeO)が37.21%，金属鉄(Metallic：Fe)が0.33%，金属鉄の風化した酸化第2鉄(Fe_2O_3)が29.18%である。造滓成分($SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO$)はやや低目で22.87%である。酸化カルシウム(CaO)は試材で3.28%程度である。

砂鉄製錬滓を原料とした素材の精錬鍛冶で生成した滓であるので二酸化チタン(TiO_2)を含み3.68%，バナジウム(V)が0.19%を示した。また，他の微量元素は，酸化マンガン(MnO)が0.29%，酸化クロム(Cr_2O_3)が0.018%，硫黄(S)が0.041%，五酸化燐(P_2O_5)が高目で0.665%，銅(Cu)が0.004%であった。

4．考察及びまとめ

苦辛城跡出土の鉱物滓は，造滓成分($SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO$)が90.6%と高目で，特に酸化カルシウム(CaO)が18.53%と高く，今までにみられなかった成分系であった。

鉱物組成は，二元系カルシウム・フェライトが同定され特異である。近世たたらの製錬滓を含めて古代製鉄の鉄滓は，一般に酸化カルシウムが低く8%以上は存在しない。これは媒溶剤を添加しない為である。

これに対して今回の苦辛城跡出土滓は，非常に高い。現代の溶鉱炉においては，鉄と鉱滓の分離をしやすくするため，鉱滓は流動性に富み，比重を小さくする成分系にもってゆく。鉱石の不純物もコークスの灰分もともに酸性のものが多く，そのまま溶融しても粘稠性スラグとな

る。このため石灰石を投入して塩基性成分にかえる。目標として塩基度CaO/SiO_2＝1～1.3になる様に成分配合している。

Table. 2の参考値から塩基度をとってみると下表の如くなる。苦辛城出土滓が人為的に石灰石を添加した滓であることは明らかである。中世の鉱滓で石灰石を添加されたものは，管見では他に類例をみない。

苦辛城出土滓が間違いなく中世に属するものであれば，これだけ明確に石灰石添加傾向を示す鉱滓として初例であろう。

鉱滓の塩基度（CaO/SiO_2）

苦辛城出土滓	たたら製錬滓	幕末高炉滓	現代高炉滓
0.43	0.16, 0.15, 0.27, 0.32	0.59, 0.61	1.3, 1.2, 1.0, 1.2

このように苦辛城出土滓が，あまり類例をみない特殊成分であったので比較検討試料として，幕末反射炉である集成館採取滓の組成を調べてみた。鉱物組成はフェアライト（Fayalite：Fe_2SiO_4），マグネタイト(Magnetite：Fe_3O_4)，ヴスタイト（Wüstite：FeO)らで構成されている。

化学組成も鉱物組成に見合ったもので鉄分が50%含有され，造滓成分(SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO)が23%代と低目で，かつ酸化カルシウム(CaO)は痕跡(Trace)という傾向を示していた。また，素材銑鉄原料が含銅硫化鉄鉱が装入された影響からか，銅(Cu)と硫黄(S)の両者がそれぞれ2%代と高目であった他は，苦辛城跡出土滓と似通った組成のものであった。

また，柳谷遺跡出土の大鍛冶滓である精錬鍛冶椀形滓の調査結果及び次回発行予定の王子遺跡出土鍛錬鍛冶椀形滓（小鍛冶滓→弥生中期後半に比定され，鉄滓では現在のところ列島内最古のもの，化学組成のみ記載）の結果を参考までに載せている。

これ等三者を比較しても，苦辛城跡出土滓が特異な位置づけにあることが理解されるであろう。以上のことにより，苦辛城跡の明確な結論は出せなかったが，近世幕末の鉱物滓の紛れ込みでなければ，中世の鋳物滓の可能性が濃厚であるというところで筆をおくことにする。

※補足（集成館反射炉用銑鉄の原料問題）

集成館の高炉の原料としては「砂鉄鉱としては頴娃郷又は志布志郷等の産或は諸縣郡吉田郷所産の磁鉄鉱を以って試験するに頗る良銑を得た」とある。(市来広貫『島津斉彬言行録』岩波文庫，昭和19年刊行)。この磁鉄鉱の賦存する吉田郷は宮崎県西諸県郡真幸町付近の真幸鉄山ではないかと，東北大学選鉱製錬研究所の岡田広吉先生のご指摘がある。真幸鉄山の褐鉄鉱と赤鉄鉱の分析値は，(野呂景義「本邦製鉄事業の過去と将来」『鉄と鋼』大正5年2月号）に記載されている。→東京工業大学飯田賢一先生のご教示。

真幸鉱石は今回調査の反射炉滓の含銅硫化鉄鉱系とは直接つながらない。反射炉滓の原料については依然として明瞭な回答は得られず，今後の研究課題として残る問題である。

真幸鉱山の鉱石分析値

鉱石＼成分	Fe	Mn	Si	S	P	Cu
褐鉄鉱	53.1	0.5	7.7	1.0	0.05	ナシ
赤鉄鉱	61.0	Trace	3.1	0.1	0.17	Trace

Tadle. 2 供試材の化学組成

番号	遺跡名	鉄滓区分	推定年代	全鉄分 Total Fe	金属鉄 Metallic Fe	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	二酸化珪素 (SiO_2)	酸化アルミニウム (Al_2O_3)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	造滓成分 Total Fe	造滓成分 Total Fe	TiO_2 / Total Fe	注
2G-821	苦辛城跡	鉄滓?	中世	8.14	—	5.75	2.31	43.2	24.03	18.53	4.81	0.14	0.73	0.012	0.003	0.073	0.050	0.032	0.002	90.57	11.127	0.0897	1
8G-91	尚古集成館	反射炉滓	近世	49.5	—	57.9	6.43	20.06	2.96	Trace	0.35	0.043	0.11	0.057	2.91	0.078	0.58	0.40	2.10	23.37	0.472	0.0022	2
2Z-6	柳谷	精錬鍛冶滓	*	49.66	0.33	37.21	29.18	14.40	3.49	3.28	1.70	0.29	3.68	0.018	0.041	0.665	0.319	0.190	0.004	22.87	0.46	0.074	3
2F-821	王子	鍛錬鍛冶滓	弥生	48.2	—	50.0	13.27	21.22	8.24	4.23	1.01	0.080	0.32	0.006	0.052	0.20	0.13	0.009	0.002	34.68	0.720	0.007	4
	笠牧水軍砦	製錬滓	近世	30.38	—	—		25.44	8.01	4.13	7.46									45.04	1.483	—	5
	塩屋オンナ村	*	*	28.37	—	—		28.76	8.87	4.34	6.70									48.67	1.716	—	*
	炭屋	*	*	32.39	—	—		21.25	7.60	5.74	3.93									38.53	1.190	—	*
	二川水軍砦	*	*	35.97	—	—		19.46	6.48	6.16	6.15									38.25	1.063	—	*
	八幡	高炉滓	現代					33.0	15.4	42.0	4.0									93.5		—	6
	*	転炉滓	*	15.00				10.0	1.0	45.0	3.0	6.0	1.0		0.1	3.0				59.0	3.933	0.067	*
A		高炉滓	*	0.78				34.7	13.9	40.4	6.4	0.44	1.3		—	Trace							7
B		*	*	—		0.40		38.23	15.8	38.12	0.53	0.53	0.45		0.84								*
C		*	*	—		0.4		33.4	14.5	41.0	6.0	0.7	1.5		1.0								*
	奥津	*	近世	1.68	0.50	1.44	0.11	44.3	12.75	25.67	1.87	0.48	6.20		0.058	0.010		0.005					*
A	横野3号炉	*	*	42.80	0.13	45.98	9.91	25.24	5.43	3.43	2.82	0.48	2.43		0.013	0.085		0.002					*
B	*	*	*	—		2.29		49.52	12.44	29.32		0.93	—		0.15								*
C	*	*	*	—		2.00		49.72	10.80	30.20		0.89	—		0.07								*

Table. 2 の注

1．鹿児島県教育委員会発掘調査試料
2．尚古集成館より研究試料として分けて頂いたサンプルである。昭和56年4月5日入手，反射炉跡土台横より採取。
3．大澤正己『渡名喜島遺跡発見の鉄滓について」(沖縄県下出土の鉄滓の調査）『渡名喜島の遺跡Ⅰ』沖縄県渡名喜村教育委員会　1979
当報告では柳谷遺跡採取鉄滓を製錬滓で報告していたが，精錬鍛冶滓（椀形滓）にあらためる。
4．鹿屋市王子遺跡出土鉄滓。弥生中期後半（山ノ口式土器共伴）に比定され，現在のところ列島内最古に属する。S58年度報告書予定
5．窪田蔵郎『鉄の考古学』雄山閣　1972
6．新日鉄㈱八幡製鉄所のデーターより引用
7．窪田蔵郎『現代のスラグ・古代の金属」『金属』Vol. 50　NO. 6，June　1980　68頁

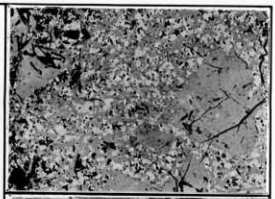
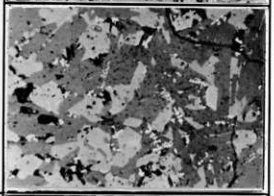
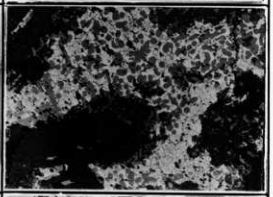
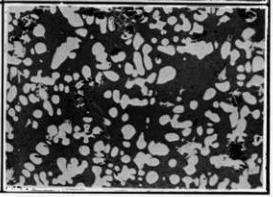
2G--821 苦辛城跡出土 鋳物滓？ 外観写真 1/25 多孔質個所を示す		×100→   ×400→
8Q−91 集成館採取 反射炉滓 ×100 外観写真		
2Z−6 柳谷遺跡精 錘鍛冶椀形滓 ×100 外観写真½		

Photo. I 顕 微 鏡 組 織

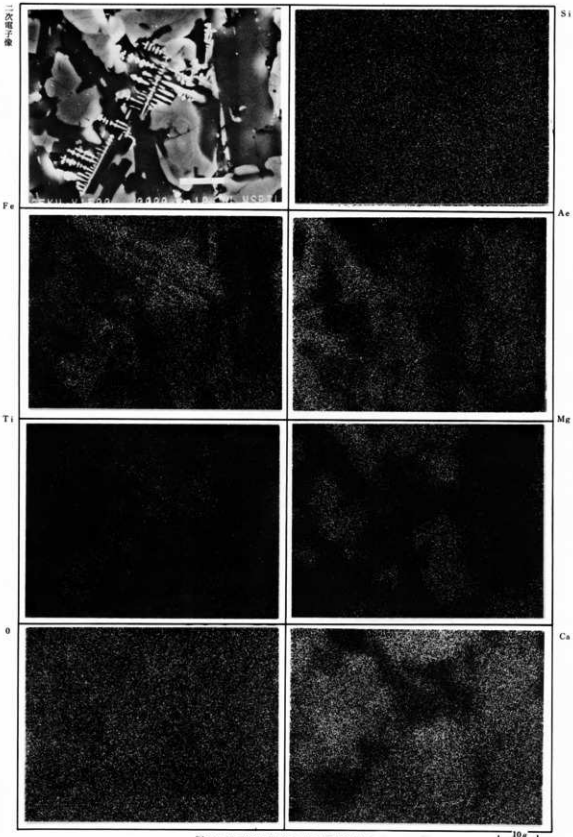


Photo I 善光城跡出土洋の走査X線像

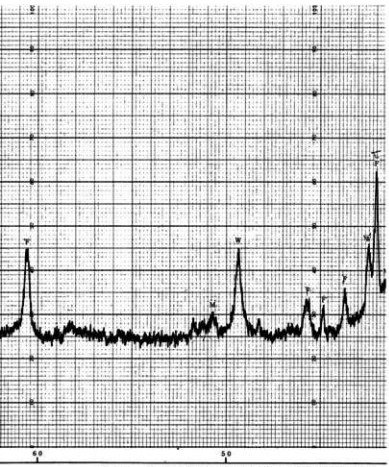
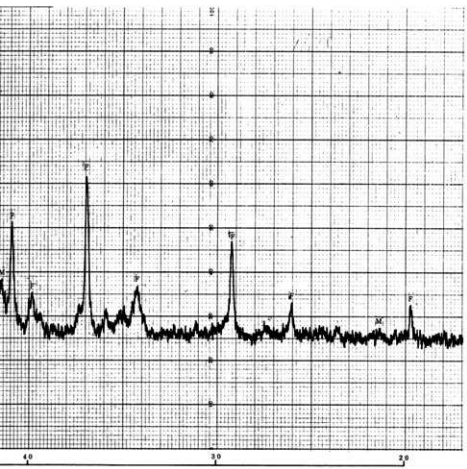


Fig. 1　集成館採取反射炉滓の粉末X線回折

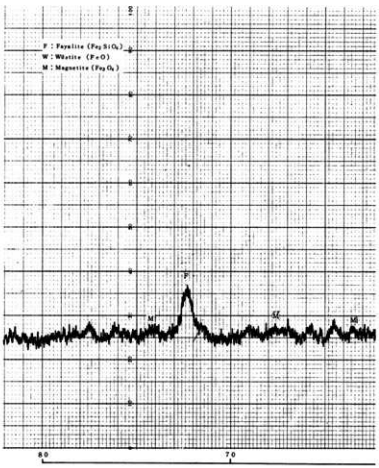

40
30
20

鹿児島県埋蔵文化財発掘報告書（27）

皇徳寺ニュータウン（仮称）造成
工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

苦　辛　城　跡

発行日　昭和58年３月
発　行　鹿児島県教育委員会　〒892 鹿児島市山下町14番50号
印刷所　かわち印刷有限会社
住　所　〒892 鹿児島市下竜尾町26－１　電話（47）４１２３


F : Fayalite (Fe_2SiO_4)
W : Wüstite (FeO)
M : Magnetite (Fe_3O_4)
F
M
W
W
80
70